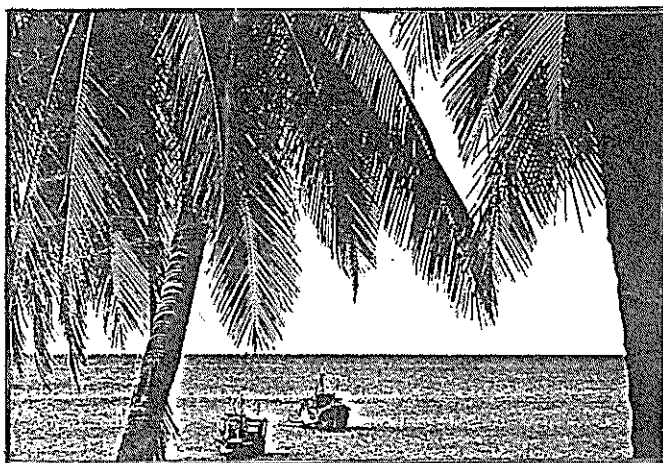


海のシルクロード紀行 (中国編)

(主な訪問地)

鑑真和上と隋の煬帝の揚州
南京大虐殺30万人の考察
朱子学の武夷山と竹筏下り
中国の湾岸戦争論 (福州行列車内)
アヘン戦争・林則徐の福州
異国情緒溢れる古港・泉州
明の志士・鄭成功のアモイ
自由経済を謳歌する広州人
少数民族と南の涯の海南島



(平成3年3月5日～3月19日・15日間)

寺 前 信 次

海のシルクロード紀行（中国編）目次

まえがき	1	泉州海外交通史博物館	54
1 2 回目の訪中の旅の前後	3	老君岩	55
3月5日 上海着	3	開元寺	56
3月6日 上海～南京	4	泉州～アモイ	58
南京～揚州	6	アモイの概要	59
揚州	9	3月13日 アモイ観光	60
隋の煬帝	10	華僑博物館	60
鑑真和上	12	南普陀寺	61
大明寺	13	胡里砲台	62
平山堂	15	金門島	63
瘦西湖公園	16	鼓浪嶼（コロンス）島	64
揚州～南京	17	鄭成功	67
南京大虐殺30万人	17	3月14日 アモイ～広州	67
3月6日 南京～景德鎮	21	広州観光と通訳	73
3月7日 景德鎮～邵武	22	中山記念堂	73
邵武～武夷山・幔亭山房	23	六榕寺	74
武夷山市の概要と名称の由来	25	越秀公園	75
武夷山の概要	26	陳氏書院	76
3月8・9日 武夷山登山	26	広州～海南島	77
九曲溪の竹筏下り	32	海南島の概要	78
武夷山・山茶研究所	35	3月15日 海口～通什	79
朱熹（朱子）記念館	36	海瑞の墓	79
孫中山堂	36	観鹿園	80
3月10日 武夷山～南平	37	五指山	82
南平～福州	38	少数民族の通什	84
中国の湾岸戦争論	38	黎族村の見学	84
福建省の概要	41	3月16日 苗族村の見学	88
福州の概要	42	檳榔樹	88
3月11日 福州観光	43	苗族の祠	89
鼓山・湧泉寺	43	三亜	89
于山・烏山	45	天涯海角	90
林則徐祠堂	46	鹿回頭公園	92
林則徐とアヘン戦争の概要	47	3月17日 三亜～興隆～海口	93
隠元禅師の里	50	3月18日 海口～上海	95
福州～泉州	50	海口公園	96
泉州の概要	51	上海へ	97
3月12日 泉州観光・清浄寺	52	3月19日 上海～帰国	98
靈山聖堂と碧玉毯	53	あとがき	99

まえがき

「烏兔^{ウウ}匆々」といわれるように歳月の流れは速く、識らず間に古稀も過ぎて1991年の春を迎えた。「門松は冥途の旅の一里塚」の諺の通り、正月の目出度い門松も、今ではあの世へ行く旅の一里塚の感じを強くする年になってしまった。

冬の眠りについてた獣は微かな春の気配で、誰に告げられることなく身震いするように、私まで遊学(?)の志が燃えてきた。2月は短くあっという間に過ぎ去ることから「2月は逃げて走る」と言われているが、雪国でも如月の声を耳にすると、白梅が一輪一輪と咲き始める。その花を眺めて脳裏を掠めたのは蘇軾の詩であった。

「春宵一刻直千金」というのは、宋代の詩人・蘇軾(1036~1101)の詠んだ「春夜」の起句である。当時の有名な逸材であった王安石、歐陽修、司馬光などの詩の底には、共通の考え方や感じ方が流れていた。

それは人間の存在、あるいは心の活動というものを、宇宙の中の一存在として客観的に見ようと努力したのであった。そこから生まれてくる彼等の人生哲学は、他の時代の人達に比べて哲学的であり、深みがあったように思われる。

そのような面で特に代表的であった蘇軾の春夜の詩には、その生活感情や文化気質が強く表れている。すぎやすい春の夜の一刻一刻を千金の値があるものとして味わっている彼は、ただ「春宵はよいものだなあ」と言っているだけではない。今すぎてゆく刻一刻にこそ、人生を充足させるべきだと言っているのだ。

冬来たりなば春遠からじと陽春を待ち焦がれていた蟄居中の私は、春の走りを迎えると、「春眠曉を覚えず」という名句を吐いた孟浩然(689~740)の「春暁」とともに、涅槃(やすらぎ)の楽しみを願う心の芽が吹き出した。

「心猿不定、意馬四馳、心気散乱於外」、心の中の猿は落ち着かず、望みの馬は四方に馳せ、精神や元気は外に散ってしまう。略して「意馬心遠」と謂れるが、望みはさまざまに跳ね回って押さえ切れず、まさに暴れ馬か、猿のように私の旅心は胸中を駆け巡った。

旅を人生の友とした旅心は理性や理屈ではどうにもならず、自分で自戒しても「とめてとまらぬ恋の道」と同様に、夢を追う者にとっては「人生即旅、旅即人生」、そして「後の10年より今の1年」であった。

ただ生きているだけで何の役にもたない行^う肉^くの身でありながら、趣味については論議の余地はなく旅、その旅も我が心一つ、決心次第という状態であった。諺は日々の経験から生み出された人生の知恵であり、「人生の運用の妙は一心にあり」と、一陽来復とともに籠の鳥が雲を慕うように旅の夢を追った。

饕食^{タウ}う虫も好き好き、究極の旅と言ってよいほど強烈な印象を与えてくれる中国、回数を重ねるごとに感慨を高揚させる不思議な国である。「蟹は甲に似て穴を掘る」と謂れるが、私が兵馬倥傯の間に青春を過ごした中国は大好きだ。

昨年10月、戦後11回目の訪中を終えて席の暖まる暇もなく、隴を得て蜀を望むように首鼠両端することなく、今回もまた唇齒輔車の国、中国に食指が動いた。

明朝の復興を念じて清朝に反旗を翻した明の志士「鄭成功」、英国の密輸アヘンを没収焼却してアヘン戦争を誘発した清朝の忠臣「林則徐」、海賊と風波の災いのために、5度の渡海に挫折しながら渡日を果たし、日本仏教に貢献した「鑑真」、それらの縁故の地を訪問することは、私の積年の宿願であった。

「玉となって砕くとも瓦となって全からじ」、立派な男子は玉となって砕けても、瓦となって無事であることはできないとの諺も、今では遠い南阿の夢物語となってしまった。然し乍ら、鄭成功、林則徐、鑑真らの偉業は、草も揺るがぬ平穩無事の世になってた今でも、格物致知としなければならない。

人の心は持ち方一つで、此の世は楽しくもなり苦しくもなり、何時年貢の納め時の到来も判らない無常迅速の世の中、時は得難く失い易しと矢も楯もたまらぬ気持で、2月初めに此のツアーに参加を申し込んだ。

時はイラクのクウェート侵入（昨年8月2日）に始まった湾岸戦争が、1月17日から多国籍軍のミサイルや空爆攻撃が開始され、「砂漠の嵐」が吹き荒れていた。

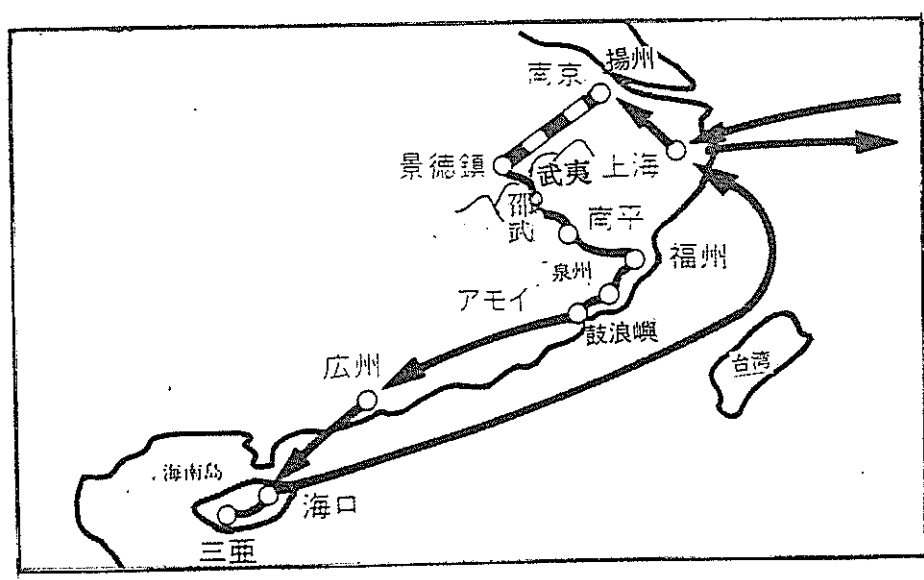
旅立つ一週間前の2月24日正午（日本時間）、多国籍軍は地上戦に突入したが、2月28日に戦闘は停止された。開戦から43日、地上戦突入から4日足らずで多国籍軍は一方的な勝利を取めた。

自己の力を弁えずに猪突盲進したフセインは、将に螳螂の斧であった。飛蛾の火に赴くが如き独裁者は「遼東の豕」、世界を知らない者は自分だけが偉大だと得意になり、遂に墓穴を掘る結果となった。

兵は凶器、戦いは逆徳、争いは末事で天の許さぬところ。幸い震憾の淵に沈んだアラブ世界に一条の光明がさし、中国へ飛する直前に矛が収まったことは人生の偶然性であり、神奇と謂わなければならない。

人生は寿命という長さで制約されており、どのような暮らし方をしようと長短には変わりはない。人間は周囲の流れに惑わされることなく、自分に相応しい自己仕立ての人生を送り、最大公約数的価値を見出したいと念じながら、あの世への旅の準備のようにして出奔した。

（下図はその昔、世界的に名高い景德鎮の陶磁器、或は絹を欧州まで運んだ海のシルクロードの基点、揚州から福建省、広州、海南島までの、今次旅行の要図である）



1 2 回目の訪中の旅の前後

朝に紅顔あって夕に白骨となる人生は無常、その無常を強く覚醒する心境になったのは、殺戮極まりない激戦場に於て尊い人命を犠牲にし、「馬を華山の陽に帰す」と周の武王が言ったように、桎梏から開放され復員してからであった。

死生契闊を俱にした者には幾星霜を重ねても、慰霊の責務を果たすことが最大の責務、年老いた我が身の棺に打つ釘の切迫するにつれて、其の心は強くなって来る。

3月3日、私が雲南・ビルマの身の毛のよだつ修羅場に於て、奉職した大隊本部の慰霊祭が佐世保市で開催され、勿頸の生存者達とともに霊前に頼ずいた。僥倖なことに、3月5日福岡空港発の今次訪中は、日時的に又とない機会となり、一死一生すなわち友情を知るといった感じを抱かせた。

昨年の本部慰霊祭後は天草半島を一周し、強く天草四郎のキリンタン一撥に心が打たれた。本年は是非とも原城の史跡見学に思いを馳せていたところ、有難いことには、金石の交わりの田島計彦様から車の提供を受け、大山、森、中島様も同乗して其の念願が叶えられた。是に田島様の御厚意に対し深甚の謝意を述べます。

心に刻み込まれた事績として何時までも残る原城跡は、多大な印象と感動を与えた。轍鮒の急とも言うべき生死の瀬戸際に追い込まれ、敢然と戦った若き天草四郎、彼は平和ボケした現代の若者に、「一生の仕事を見出した人は幸福である」と論しているようであった。

命をカナナで削るように、振幅の大きな生き方をする運命に遭遇した我々は、前世の約束事であったのかもしれない。その影響からであろうか、老いてますます壮なるべしとミスター旅人を目指し、「学問は一生の宝であり、旅もまた一生の宝である」と自家撞着のような心境になっていた。

原城跡を訪れた3月4日の夜は、金蘭の契りを交わした大山様宅に御世話になり、芯から心温まる御歓待を戴き、是に辞を低くして深謝いたします。

慰霊祭から戦友会、原城跡、その途上で中村、原田、竹口様らとも再会し、深く心に記した銘肌鑢骨の2日間を有意義に過ごした。

3月5日、17・20福岡空港発MU913便に搭乗、世俗のわずらはしさから逃れるように、竜驤虎視というか威勢よく、950km西方の上海へと快晴の空に向かって鷗博した。

3月5日 (火) 雨 上海着

5ヶ月ぶりに上海空港に降り立ったのは18・55（現地時間17・55）、気温11度で雨であった。性格破綻者サダム・フセインが巻き起こした湾岸戦争の影響から海外旅行者は激減し、上海虹橋国際空港の乗客も平素の半数以下であった。

一行20名の顔触れは老いの一徹といった老齢者ばかりで、白髪は冥途の使いだと自認する者にとっては、政府の海外旅行の自粛勧告も、鹿の角に蜂が刺すように効き目がなかった。

禁断の木の実が甘く、禁じられたことほどしたいのは人情の常、明日は明日の風が吹くと平氣の平左衛門の旅名人の一行は、時は矢の如く飛び去り、時は人を待たずと
いった心境であった。

蛇の道は蛇で不安も焦燥にも駆られることもなく、案内されたホテルは空港近くの
古めかしい「天馬大酒店」（中国では酒店はホテル、酒家はレストラン）であった。
正面玄関のロビーには天空を飛翔する「天馬」の彫刻が意味深に掲げられ、観る者を
形容し難い世界に引き込んでいた。

古代から漢民族にとって大問題であったのは、北方民族の匈奴（胡）であった。秦
の始皇帝は全国を統一すると、万里の長城をつないで匈奴に対する防備を固めた。漢
の高祖は自ら匈奴討伐に出陣したが、彼自身が捕虜になろうとするほどの大敗北を喫
してしまった。

漢の文帝は対匈奴作戦のために大宛国（現在のソ連ウズベク共和国のフェルガーナ
市附近）や、大月氏国（現在のソ連サマルカンド地方）の名馬を得ようと遠征を試み
た。機動作戦には名馬を必要としたからである。

この名馬のことを「天馬」と称し、非常に優れた駿馬のことを指している。或は天
帝を乗せて天を行く馬のことを「天馬」というのである。（史記・大宛伝）

長安（西安）を発って大宛国、大月氏国に行く敦煌などを通る陸のシルクロードは、
漢の武帝が派遣した張騫が開拓したルートである。それ以来、漢民族は世界への見聞
をひろめ、黄河中流の文化圏を東や西のそれとドッキングし、さらに長江流域のそれ
とも融合し、江南・華南までを一つの地域としたのであった。

今夜、上海の天馬ホテルに投宿することになったことは、陸のシルクロードを既に
踏破した私には実に懐かしい思いがする。且また海のシルクロードに挑戦する今次旅
行を更に意義深くするもので、天馬は旅の門出に吉兆を表わす瑞光のようであった。

3月6日

(水) 晴 (霧)

上海～南京

縁起の良いホテルから良い旅立ちが生まれると信じ、歴史を偲ばせてくれた天馬酒
店を早朝の6・00に発ち、6・50発の南京行に搭乘するため空港ターミナルに入
った。国内線は中国人で混雑し、彼等の特徴の騒々しさは小学生の遠足のようで、日
本では想像できない光景であった。

木で鼻をくくったようなサービスの欠如した中国も次第に改善され、日本語の放送
が流れていた。それは上海空港が霧のために発着ができず、遅延するというアナウ
ンスであった。「月に叢雲、花に風」で、この世には邪魔が入ってくるものだと切齒扼
腕するばかりだ。

同じ羽根の鳥は一緒に集まるというのか、似た者同志の旅の達人たちは直ぐ通じ合
い、2階の喫茶でコーヒを飲みながら時間待ちをしていた。

北京の国際旅行総社から派遣されてきた通訳「趙海泉」と会話を続けていると、
「劉桂香」女史が榮進して彼の上司であることが判明した。彼女は国交回復後の第1
回訪中（慰霊団）の時の通訳で印象が強く、在日中国大使館勤務時代に東京で再会し
たこともあり懐かしい。

狭隘で粗悪な空港ターミナルの拡張工事は遅々として進捗せず、恰もそれと土俵を同じにしたように空港の空は充満した霧の世界。一方の南京は快晴だと聞くと、予定の南京～揚州の見学時間が短縮されることに、隔靴搔痒の思いが募るばかりであった。

待つこと5時間に及んで11時頃になると、コーヒコーナは中国人の昼食のために混雑し始めた。趙通訳の交渉によって一行は一階の貴賓室に移動し、お粗末な昼食弁当が渡された。40回近い海外旅行でレストランでなく、弁当の配給を受けたのは初体験である。

中国人たちは立錫の余地もない処で渡された弁当の立喰を始めた。日本人ならば喧々譁々の大騒ぎとなるところだろうが、絶対権力に飼い馴らされた彼等は沈黙を続け、ここにも大陸人らしい鷹揚な性格を見せていた。没法子の伝統であろうか。

ままならぬは浮き世の常であり運否天賦だ。運にまかせて諦めることが心の養生だと、天候の回復に下駄を預けていた。漸く南京行きの搭乗が告げられ、6時間も遅延して12・00に離陸した。

航路の下界は、春秋戦国時代から狭い地域で蝸牛角上の争いを続けた江南の地、歴史を賑わした呉越の葛藤の場所である。(右は上海～南京間の図)

依然として下界は霧が深い、地球を覆った白雲を翺び抜けると、上空は晴天が無限に拡がっている。思い出の深い蘇州も網膜に映らず、虎視眈々と無錫の太湖に期待をかけたが、憎らしく薄雲が視界を遮って勝手に帆の機会を逸してしまった。

絹の里と呼ばれる蘇州や無錫は今でも絹織物の盛んな街で、優美な光沢と独特の感触は、化学繊維の発達した今日でも変わらない人気を保っている。絹織物は紀元前1400年頃の殷の時代に中国で生まれ、当時の記録では黄河流域で作られている。

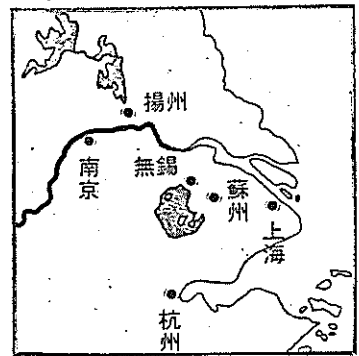
その後は長江流域に中心が移り、紀元前1世紀頃から絹はシルクロードを経て地中海沿岸に運ばれ、東西文化交流に大きな役割を果たした。さらに其の技術は弥生時代(200年頃)の日本にももたらされたが、今次の海のシルクロードの旅にも大いに関連した地域である。

離陸後30分を経過した頃から、霧は流れて下界が瞰下され出したものの、明瞭な地点がつかめず、江南を網の目のように囲繞するクリークだけが銀色に輝いていた。

突然右手に、何処までも悠然として流れる一条の長江が眼に入った。櫛風沐雨の戦いの歴史を展開した此の流域は、歳移り月廻っても自然の偉大さを留め、あらためて中国の広大さを知る。

天馬が空をゆく旅と期待した航路も約1時間を経過し、南京空港に滑走態勢に入って古都・南京の土を踏んだのは13・00であった。虚空の蒼さはとりとめもなく拡がり、深さを計ることも出来ないような快晴だ。ターミナル正面には真紅の李花が勢いよく開花して、若葉の緑は險を刺激していた。

しかし南京～揚州を案内する通訳の姿が見えない。同気相求む旅行マニアの一行は私を含めて秋の扇子、秋の田の落とし水のように不用となつた老人ばかりで、慌てず騒がず通訳を待っていた。



慌てふためきながら通訳は満面に笑みを浮かべて走って来た。飛行機の長時間の遅延で待ちぼうけを喰い、昼食をしている合間に我々が降り立ったらしく、平身低頭して詫びていた。

古都・南京に第一歩を印し、私の心底に千々に乱れて思い出されたのは、日本が経済大国になった時に乗じ、「侵華日軍南京大虐殺同胞記念館」の正面に、30万人の大虐殺の碑を建立したことであった。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」「戦いの後は勝者が善人になり、敗れたものは悪者にされる」、これは古今東西の勝者敗者についての実態である。戦争を知らない者にとっては戦争は想像の世界、そして30万人という数字は、戦闘を体験した者にとっては疑問の残る幻想・幻覚の数字である。この件に就いては一項を設けて後記する。

南京～揚州

南京は遠く遡れば春秋時代の呉の国、戦国時代は楚の国の位置したところで、古名を「金陵」と呼んでいた。揚子江（長江）に臨んで江蘇の肥沃な平野の中央にあるため、古来天下を窺うものは幾度か此処に国を建て都を置いた。

先ず三国時代には呉の孫権がここに都を置いて「建業」と名付けた（業を建てる即ち天下統一）。次いで東晋の武帝が洛陽から遷都して「建康」（317年）と呼び、以降、隋・唐時代は「江寧」という名称が用いられた。今日でも江寧という言葉が使われることがある。

元を滅ぼした明が興ると太祖はここを都と定め、成祖が都を「燕京」に移して初めて燕京を「北京」と称し、これに対し此処を「南京」と呼ぶことになった。南方の首都という意味をもつもので1441年である。明の太祖が紫金山上に立ち、この景勝の地を称して王者の地だと褒めた話は有名だ。

明が亡んで清朝は首都を北京に置くと、南京を再び江寧と呼んだ。清朝末期に太平天国の乱（長髮賊の乱）が起きて10余年も此の地を占領し、遂に兵火のために焼野原と化してしまった。

中華民国が成立すると間もなく孫文によって此処に臨時政府が組織され（1912）孫文は虚名ながらも大統領に就任して、北京の袁世凱と互いに首都を主張した。結局、蒋介石の率いる北伐軍によつて民国革命がほぼ完成するのを待ち、孫文の遺志を奉じて此処を首都としたのである（1928）。

金陵と称し、江寧と呼び、南京と唱え、その間の興亡は幾千年、8王朝が首都としている。しかし不思議なことに、ここに政権を建てた王朝の多くが短命に終わり、東晋の260年を除くと百年を越えた政権はない。南京は悲劇の王朝の舞台であつた。古今東西、体制は必ず崩壊の運命にあると言えるだろう。

復讐を忘れるなという意味の代表語にされている、「臥薪嘗胆」の語源の主人公は南京である。つまり呉王の夫差は蘇州ではなく、南京に居たといわれる。これは意外な新知識となった。

飛行機の延着のため、3時間の南京見学は嬉喜びとなって中止となり、空港から古都を通過して一路、揚州に向かってバスは進んだ。地図を広げながら位置を確認し、手に汗を握って前方を凝視し続けていた。

華美な装飾をした店の並ぶ古都は、やはり異国の香りが芬々と匂っている。先ず眼に映ってきたのは光華門跡に遺された濠で、城壁は除去されていた。(右図参照)

光華門は支那事変に於ける南京城攻防戦の最激戦地である。私が小中学を過ごした福井県・鯖江歩兵36聯隊が甚大な犠牲を出し、南京城の一番乗りを果たした有名な門である。

昭和12年12月、開戦当初のこともあり、県民は郷土部隊の誇りとして絶頂になっていたことが懐古されてくる。

残念ながら肝腦地に塗れた兵どもの夢の跡も素通りして北に進んだ。

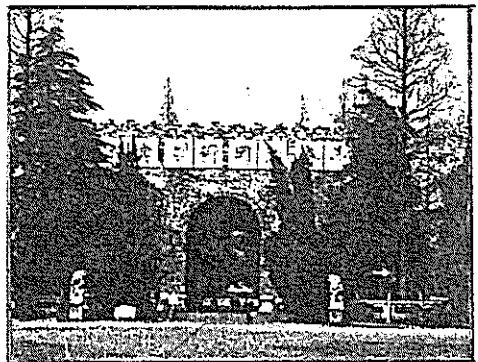
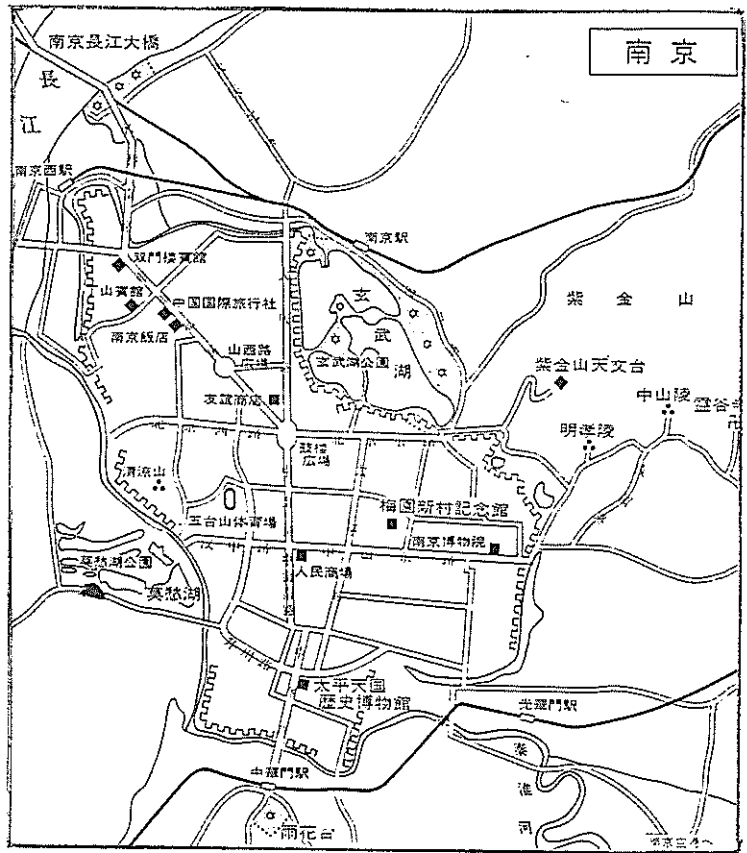
古都のこの街には雅やかという言葉がよく似合う感じがしている。未だ新芽の吹き出さないプラタナスの樹間から、黄金色の屋根瓦をのせた朱塗りの明朝故宮遺跡が、威容を現わした。朱元璋(明朝初代の洪武帝・太祖)が一農民から身を立て、天下に覇権を樹立した歴史が偲ばれてくる。

突然フロントガラスの前に城壁が映った。「未だ遺っていた」という感動の一瞬である。金城湯池の城壁は明の太祖の構築したもので既に五百年余を経ており、幾度か兵火に見舞われている。

特に長髪賊の乱の時には明初の広大な建物は烏有に帰し、今見えている城壁は当時の内城の一部である。(右の写真)

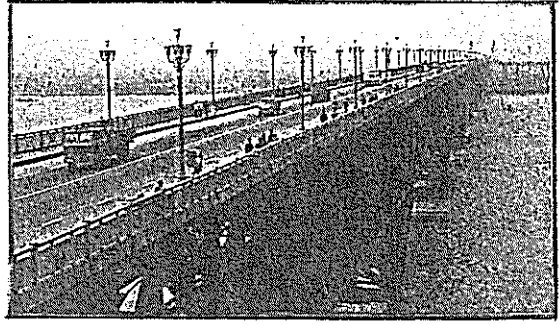
整然とした広い街路を左折すると右手に市政府の庁舎、その先の広場の角には鼓楼が高く聳えて歴史の名残を留め、市民の憩いの格好の場所となっている。中山路を走り南京飯店で休憩となった。(図の左上)

南京は東西と南に連なる丘陵に囲まれ、自然の要害の役割を果たして攻略は容易でないとされていた。しかし明の永楽帝は此処においては、政権の長期化を企てることは困難だと判断して北京に都を移した。若し遷都しなかったらば、明朝はもっと早く



歴史から消えていたかも知れないと、歴史を頭の中に繙いていた。

休憩が終わって南京長江大橋に差し掛かった。1842年8月、南京下関の長江上に停泊した英艦上で調印された南京条約、香港の割譲、広東、上海らの5港の開港、アヘン輸入量の追加拡大を認めさせられた、屈辱的な条約締結の地であったことが想起される。



この時から中国は西欧列強の半植民地となり、激動の運命を辿ったのであった。バスは長江大橋を渡った。全長6772mの大橋は南京の象徴であり、重慶、武漢大橋とともに長江の三大大橋の一つである。殊に南京大橋は彼等が誇る中国独自で建設した自力更生のものである。(上は南京長江大橋)

その為には橋上の中央には「労農兵」の群像や大展望楼が建ち、その下を洋々とした長江の悠久の流れが、黄色く染まって流れていた。

対岸は浦口だ。軍籍に身を投じた戦時中は未だ大橋は建設しておらず、我々は北京・天津から浦口に通じる津浦線(当時の名称)に乗車した。実に懐かしい忘れ難い名称で、早や50年以上の歳月が経過した。命長らえて忘れかけていたものを取り戻したような感じがする。時世が進めば変わらないものはない。

年齢を忘れて人生で最も充実していた時期を懐古しながら大橋を右折し、有料道路に入って100km下流の揚州へと驀進した。数年前に武漢(漢口・漢陽・武昌)の黄鹤楼を訪れたことを想い浮かべると、右に流れる長江は、自然に李白の詠んだ「烟花三月揚州に下る」の詩を脳中に浮かばせた。

故人西のかた黄鹤楼を辞し 烟花三月揚州に下る
弧帆の遠影碧空に尽き 唯見る長江の天際に流るるを

今は李白の詠んだ時と同じく烟花(烟=煙)の3月である。李白が黄鹤楼で揚州に行く友人・孟浩然を送ったときの別れの詩だ。弧帆が次第に遠ざかり、ついに碧空に吸い込まれてしまう。そして帆影が消え去ったあと、天と水とが接して遙か彼方の天際に、長江の水がゆったりと流れてゆく、という意味である。

私は舟で長江を下っているのではないが、これから訪ねる揚州の情景をあれこれと思い描きながら、バスに揺られていた。すると杜甫(唐)の詠んだ「江南の春」の名句がまた、頭の隅から思い出されてきた。

千里 鶯啼いて 緑紅に映ず 水村 山郭 酒旗の風
南朝 四百八十寺 多少の楼台 烟雨の中

(千里は江南の広さ、山郭は城郭で町のこと、酒旗は居酒屋の旗、南朝は金陵に都を置いた6王朝、楼台は寺の高い建物、烟雨は細かくけむる雨)

江南の地の至る所で鶯が鳴き、木々の緑と花の紅とが照り映えている。水辺の村、山際の町には、酒家の青いのぼりがはためいている。南朝以来の四百八十といわれる寺々、その高々と聳える多くのいらかが、ぼんやりと雨の中に遠望できる。

この江南(長江下流の南岸一帯)の春景色を色彩あざやかに描いた詩は、今私等が通過していく風光とは変化しているだろうが、詩を口ずさむと、多少は其の雰囲気を

味わえるような気がしてくる。

バスは遅れた時間を取り戻そうと、韋駄天走りに物凄いスピードで一気に快走して行く。砥石のような平らな大平野を柔らかい春の陽ざしが包み、鶴に乗って揚州へ上ると詠った、揚州の歴史の風が胸中を吹きぬけた。(右は揚州附近の要図)

見たいが病のように緊張の糸を張りつめていると、市街にクリークの流れが映った。静かな湖面は忘れていた言葉呼び起こし、やはり揚州の歴史は隋の煬帝に始まる水の歴史であった。

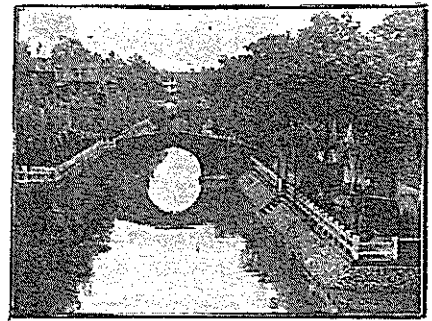
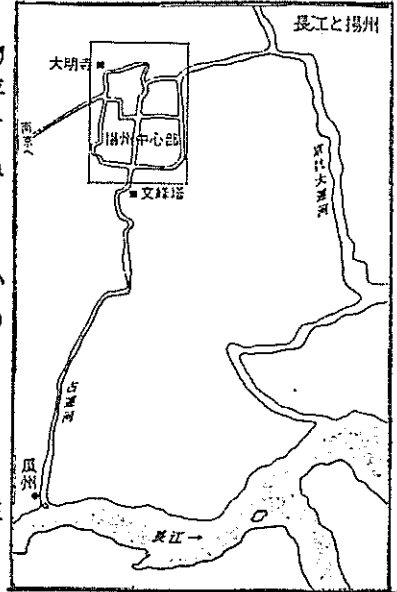
「十日の月の入るまで、二十日の月の出るまで」というか、揚州への長い間の願望が叶えられる喜びは、遠い昔の渺茫とした歴史を夢みるようであった。

詩情あふれる運河と河畔に咲く花との出会いも他生の縁、この美観をマルコポーロは東方見聞録に綴り、未知の国への想いを人々に伝えたのであろう。

伝統文化の重みと新鮮で清楚な美しさを味わいながら、思考力を停止させたような大小の運河の交錯する街を北上した。(右は運河風景)

突然バスは停車した。そこに私を釘付けに下のは、「大明寺」と黄金色で書かれた石碑と朱塗りの山門であった。(到着は16・00)

手の舞い足の踏む所を知らず、欣喜雀躍として大明寺に参詣できたことは、旅の冥利に尽きると言わなければならない。

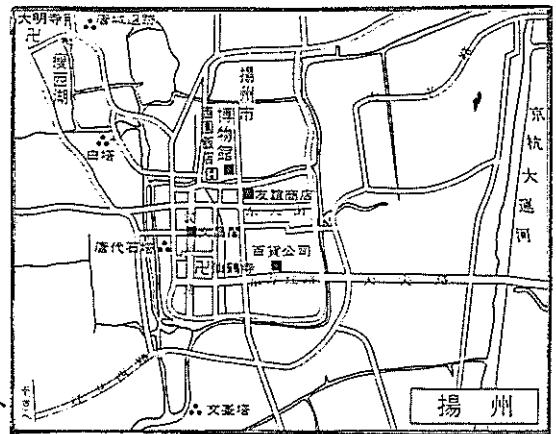


揚州 (右は揚州の地図)

揚子江の名称は此処から起こったと謂れるほど有名である。揚州は長江の北にあり、江岸から10数km北に府城があった。勿論、江岸も揚州府の管轄で、そこから南岸への渡し場が「揚州渡」「揚州津」と呼ばれ、土地の人々は長江を揚子江と呼んでいた。

外国人が其の辺の人に長江の名を聞くと、揚子江(ヤンツチャン)と答えたことから、それが欧米の地図に書き込まれ、日本もそれに倣ったのである。

現在50万人の揚州は中国24文化都市の1つに数えられ、悠久な歴史文化史跡と秀麗な名勝地、豊富な物産資源に恵まれているために古代から富豪が多く、米、絹布、



漆器等の輸出が盛んであった。また古都に因んで美人の産地として蘇州とともに知られていた。マルコポーロの旅行記にも此の地名が明記されているが、彼はここで暫く「元の官吏」に仕官していたと伝えられている。

揚州は2500年の古い歴史があり、紀元前486年に呉王の夫差が邗江城（邗＝揚州）を築いたのに始まる。運河は夫差が手をつけて隋の煬帝が完成させた。ここから遠く長安に達している運河を煬帝は龍船で巡幸したが、その船を曳く人間は8万人、船列は200余里（1里は約500m）にのぼったという。

煬帝は江都の揚州の風景を愛し、遂にこの地を死場所を選んだ。彼は高句麗遠征に失敗し不穏な空気のみなぎる中を、またしても揚州に巡幸した。そしてこの宮殿で反乱軍に殺されてしまった。

隋の煬帝は一方では深く仏教に帰依し、彼が揚州に巡幸する際には必ず仏僧を従えていたという。煬帝が仕上げた大運河は、そこを通過して仏教が我が国に伝わり「仏教の水路」でもあった訳である。（運河と煬帝に就いては後記する）

隋・唐時代の揚州は我が国の遣隋・遣唐使を乗せた船が先ず向かった港で、現在の上海のような立場であった。揚州へ辿り着いた船はここから大運河に入り、運河づたいに洛陽や長安に向かったのであった。

我が国の最初の遣隋使の「小野妹子」は有名である。606年に聖徳太子が隋と国交を開くに当たり第1回の遣隋使となって入隋し、次ぎの国書を提出した。

聖徳太子が隋の煬帝に宛てた国書の中に、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」（推古天皇の15年7月、日本書紀）と記され、また「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す」（推古天皇の16年9月、日本書紀）と述べられており、堂々と自主独立の外交を展開したことは、我々年代の者は熟知している。

しかし国書を提出したが煬帝を怒らせ、小野妹子は隋使の「裴世清」と共に帰国した。妹子は帰途、隋の国書を奪われたが、特に処罰を免れたのは隋の国書の内容が日本の朝廷の期待したものでなく、妹子が自ら破棄したとも言われている。

裴世清の帰国に際し妹子（隋名は蘇因高）は再び国書を携えて遣隋使として入隋、このとき8人の留学僧たちも随行し、翌609年に帰国した。これらの留学僧や留学生が大化改新に大きな役目を果たしている。

唐代に入り717年には阿部仲麻呂、804～06年には空海が揚州から入唐している。また唐に渡った日本僧の栄叡らの一行は揚州に辿り着き、大明寺に鑑真和上を訪ねて僧の日本への派遣を懇願した。（鑑真に就いては後記する）

隋の煬帝

彼の生まれたのは569年、日本では欽明天皇の30年に当り、欽明天皇の孫である聖徳太子は煬帝より5歳年下である。605年に即位して年号を「大業」と改めたが、僅かに在位14年であった。

この14年ほど中国の歴史の中で激動の時代は少ない。煬帝にとっては前半は天国、後半は地獄であったが、民にとっては全てが地獄であったかもしれない。

煬帝の行った大事業の第1は大規模な国土改造計画で、他の1つは外征であった。大業元年に林邑（今のカンボジア）及び契丹（北方の遊牧民族）を襲って攻略した。

煬帝の頭の中は秦の始皇帝や漢の武帝を夢みていたようだ。

大業3年(607)には北方や西方の遊牧民族は隋に伏し、東は琉球、南はカンボジアを征して赤土(スマトラ)にも使いを出した。大業4年には倭王の多利思比孤(聖徳太子)も入貢している。

東西南北の諸国はすべて隋の威光になびいていたが、ただ1国だけ朝貢しない国があった。それは高句麗である。(朝鮮半島北半から東南の満州を領有し、日本名は狗)

父の文帝は先に高句麗征伐を行ったが失敗した。煬帝は父の恨みを晴らすとともに、唯一の朝貢しない高句麗を己の威信にかけても、討伐しようとしたのは当然である。

大業8年(612)の第1次高句麗遠征では大敗を喫し、翌年に再び第2次高句麗遠征をこころみだが戦いは利あらず、その時に突然、国内に反乱軍が挙兵したために撤兵。その翌年に第3次高句麗遠征をしたが双方ともに疲弊して和平となった。

国土計画では、父の文帝が長安を都と定めたが、長安を中心とする渭水地方は農業生産が貧弱で、大勢の人を養うには全国から食糧を集めなければならなかった。そこで文帝は585年に「広通渠」を開通させ、黄河と結んだ。(右地図参照)

しかし煬帝はこれに満足せず、新たに洛陽に巨大な都城を造るほか、淮河と黄河を結ぶ「通済渠」の大運河を完成させた。

中国大陸は黄河と長江の2つの大河が背骨となって成立している。しかし北と南を結ぶルートがない。黄河文明と長江文明を如何にして一体化するか。その知恵を生み出したのが運河で、秦の始皇帝の万里の長城に匹敵するものであった。



大業元年8月(605)、煬帝は洛陽から船を浮かべて江都・揚州に行幸した。前記したようにこの行幸は素晴らしく、動く宮殿と言われたという。

大運河建設は遊幸のためだけではなく、経済的、軍事的な目的も持っていた。経済的には南の物資を北に運び、北の物資を南に運ぶことができ、この運河は以降も中国の一体化に大きな役割を果たしたのであった。

大業4年(608)には洛陽から今の北京の南にあたる涿郡に通じる「永済渠」を造り、大業6年には揚子江南岸の今の鎮江から南に向かう「江南河」を造った。

日本の遣唐使のコースも明州(現在の寧波で杭州の東方)に船を着けた時は、杭州から江南河で長江に達し、揚州から大運河で北上して洛陽・長安に向かった。

唐の首都になった長安の繁栄は、大運河による豊富な経済力によって支えられたと言ってよい。安祿山の乱で唐は終わりかと思われたが、その後まだ150年も国を保つことが出来たのは、南方が無事であったからとも言える。

南北が相通じてこそ国家が安泰であった。この点からも運河が如何に重要であったかが判り、まさに大動脈である。この大動脈の起点が揚州であり、陸路から海路を一廻りしてきたシルクロードは、揚州で環を完成したようだ。

その意味で揚州は海のシルクロードの起点であり、今次旅行も揚州を訪れたのであり、隋の煬帝の功績は大と謂わなければならない。

現代の中国まで恩恵を与えている煬帝の大国土改造は、史上稀に見る強大な権力と煬帝の強い意志、緻密な頭脳の賜物とも言える。

大業12年(618)、煬帝は江都・揚州へ行幸して「江都の好きを夢みる・・・」と詠んでいるが、荒淫益々盛んなために、彼の最も信頼していた宇文述の3人の息子によって殺され、隋は38年の短命で滅亡し唐となったのである。

鑑真 (688~763)

我々日本人は揚州といえば鑑真和上を頭に浮かべる。鑑真は唐の中宗の時代に揚州に生まれた。揚州は前記したように隋時代には大運河が建設され、物資の大集散地となり、長江に近いことから外国貿易も盛んで、海外との人事の往来も盛んであった。空海や円仁も揚州へ行っており、我が国に揚州文化を持ち込んだとも言えるだろう。

彼は701年に揚州の大雲寺で出家し、のちに竜興寺に移り、日本に渡る前には揚州の大明寺(9頁地図参照)に居たと謂れている。

唐に渡った日本の僧・栄叡ら一行は大明寺に鑑真和上を訪ね、戒律を伝えるために僧を日本に派遣することを懇請した。鑑真は心よく願いを聞き入れ、「誰か日本へ法を伝えに行く者はないか」と門弟の僧にたずねた。しかし一座は寂として答える者がなかった。遠い倭国に果たして無事に到着できるか不安だったのであろう。

鑑真は「誰も行かないのなら私が行こう」と決意を披瀝すると、門弟は争って随行を申し出て、21人が同行することになった。それを聞いた栄叡の胸のうちは、いかにばかりであったろうか。

742年(天宝1年)、伝律授戒のために門下を率いて日本へ渡ろうとしたが、朝廷の許可を得ない国禁をおかしての渡航であったから、罪に陥れようと誣告されて失敗した。翌年12月に再び僧俗85人を率いて出帆したが、揚子江口の狼港で風浪にあい、官船に救われて揚州に戻された。

748年、また一行37人で出帆したが強烈な冬の季節風を浴びて海南島に漂着、雷州半島から広西・広東の各地を巡って揚州に帰ったが、この間に高弟の祥彦や日本僧の栄叡は死亡し、自らも盲目となるほどの惨苦をきわめた。

12年間に5回の失敗を重ねたが初志をまげず、753年(天平勝宝5年12月)、遣唐副使の大伴古麻呂の船に乗り、鹿児島県西南方村(現在の坊津村)秋目に着いたことは有名である。

日本では勅によって伝律授戒の権をゆだねられ、上皇・皇太后・天皇その他の僧俗に授戒し、東大寺の戒壇を建て、日本の律義はこれによって整った。756年に大僧都、758年に大和上の称号を授かり、759年には律宗の唐招提寺を開いて宗祖となり、在日すること10年、76歳で没している。

唐では既に一流の高僧であり門下から多数の名僧を出した。日本には仏舎利三千粒のほか、律天台の經典を招来して日本天台の先駆をなした。書道では王羲之父子の真跡を持参し、美術界には唐彫刻の新様式を紹介して唐招提寺派の源流をなし、西大寺の唐風建築も其の紹介によるものと言われている。

また医薬に詳しく正倉院の薬品を整理し、一切経の誤写を訂正するなど、日本文化に大きな貢献をして其の影響は今日に及んでいる。仏教、医学、言語、文学、建築、

彫刻、書法、印刷等にひいで、このような偉大な鑑真の里・揚州を訪れることは、今次旅行の圧巻であると云える。

鑑真の「律宗」とは律を教義の根拠とする宗派である。仏教の戒律には種々あるが、鑑真の戒は2つの性格を持っている。1つは「止持戒」という悪行を禁じる規則、他の1つは「作持戒」という善行を勧める規則である。

また戒を受けるときは、菩薩戒（衆生済度を意味する）も受戒することを習いとしている。戒律こそ仏教徒の心の柱であるというのが、律宗の根本思想のようである。

大明寺（位置は9頁地図参照）

大明寺は揚州城外の岡の上にある鑑真和上の居られた寺で、東に観音山、西に平山堂があって風光明媚なところである。寺で求めた上海文化出版社の書によると、この岡を蜀岡という。これは此の岡に蜀（四川省）に通じる井戸があったらしい。

大明寺は今から1500年以上も前の南北朝の大明年間に建てられたから、其の名が付けられた。隋の時代に此处に9層の棲霊塔が建てられたので、棲霊寺とも呼ばれる。

清代になって乾隆帝は「法浄寺」と命名し、つい最近まで其の名で呼ばれてきた。それが奈良の唐招提寺から鑑真像が「里帰り」したのを記念して、1980年の春、再びもとの大明寺という寺号に改称することに成った。（上は大明寺の平面図）

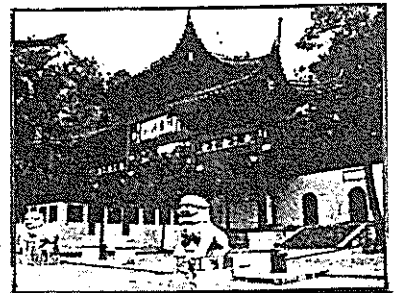
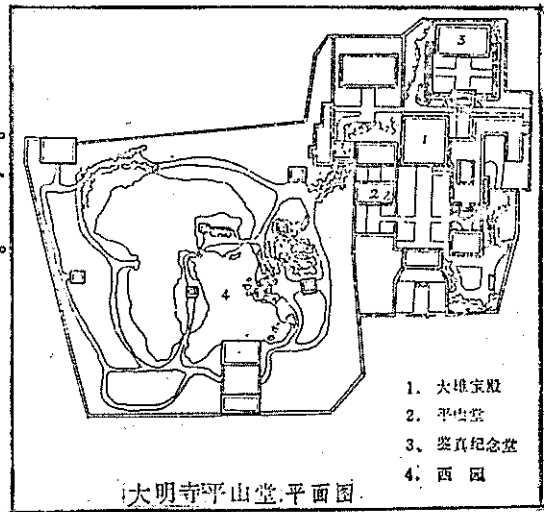
対になった狗犬に護られたように建った牌楼は朱色でピカピカに塗られ、扁額に「棲霊遺跡」と記されていた。棲霊寺と大明寺と同一の寺であったのか、両寺が並んで建っていたのか、それは判明しないが、書には棲霊遺跡の北正面が大明寺と記してあった。

数奇な運命の鑑真ゆかりの寺の門前に吸い込まれるように立つと、生を視ること死の如く運を天にまかせて渡日した、和上の心が切々と私の胸を打っていた。

待ちかね山のホトトギスではないが、本当に心から待ちかねていた寺であり、画龍点睛のような感じがする。（上は大明寺の山門）

牌楼をくぐって薄黄色の土の山門を見上げると、大明寺と刻んだ横額が掲げられている。さらに門の中に入ると、笑顔で参拝者を迎えるような顔立ちの弥勒菩薩が安置され、両側に鎧を着た四大金剛力士像が睨むようにして立っている。

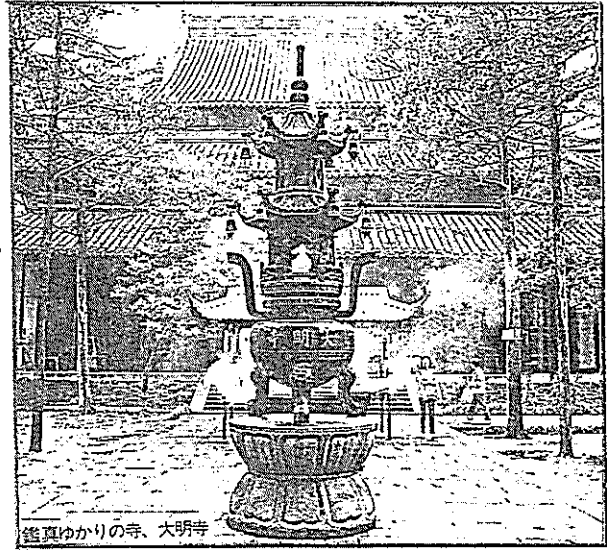
山門を通り抜けると大香炉を前にした古色蒼然とした大雄宝殿（本殿）が、長い歴史を秘めているように荘厳な姿を現わした。威厳に満ちた気品のある殿宇は、我々を畏敬感佩させるような雰囲気漂わせていた。（次頁の写真）



襟を正して宝殿に一步足を踏み入ると、静寂を破って合掌した僧侶の修行の音が響き渡り、香煙は縷々として堂内を満ち、隋代に迷い込んだような心境に立ち到ったのであった。(右は大雄宝殿)

正面の蓮座には三尊仏の釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来の格調高い仏像が黄金に輝いている。

その中央の須弥壇を囲んで東西両側に18羅漢像が、これまた金箔をキラキラと輝かし、悠遠荘重な仏を拝すると、暗夜行路に灯火を得て、温かい心の故郷に帰ったような心地がする。



極彩色に光る大雄宝殿の前庭に立つ「淮東第一観」の石刻が眼を引いていた。宋代の詩人・蘇東坡が揚州に遊んで其の美を称賛して詠んだ句である。淮東とは淮河(11頁地図参照)の東側、即ち江蘇省東部を意味しているのであろう。

宝殿の裏手に足を運ぶと、そこに見覚えのある建物が眼にとまった。これが奈良の唐招提寺の金堂を模して造った鑑真和尚記念堂であった。

遠い過去から現在に引き戻されたような錯覚に陥り、感激のあまり暫く絶句した。心が宙に舞うとはこのことだろうか。

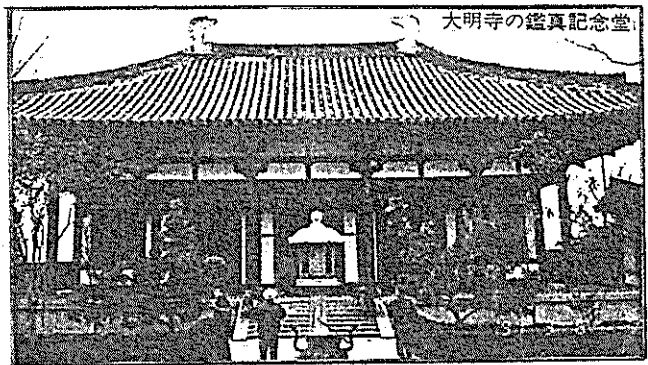
鑑真の1200回忌を記念し

て、日中双方の仏教会の努力によって1973年に完成したもので、屋根瓦の美しさ、左右の鸕尾の見事さに眼を見張らなければならない端正な建築である。(上の写真)

堂内には樟材で彫られた鑑真和尚像が祀られ、周囲に鑑真ゆかりの出来事を描いた大壁画が掲げられている。1つは奈良の唐招提寺の伽藍を写したもの、1枚は和尚と共に日本へ渡ろうとして海南島に流れ着き、広州の竜興寺に辿り着いて死んだ日本僧・栄叡を悼んだ風景画であった。栄叡は鑑真を案内して日本に帰り着くことが出来なかったが、彼の胸のうちは如何ばかりであったかと思えてくる。

「人の行方と水の流れ」と言われるように、人の一生はどう進んで行くのか誰しも判らない。しかし由緒ある寺に参詣して学ぶことによって歴史を知ると、不思議にも自然に心が大きくなったような気がする。学ぶのには年をとり過ぎたということはなく、学問には際限がないとの金言に接したようであった。

日本人の意識を刺激した鑑真和尚記念堂の拝観が終わると、早や帰途の時間となってしまった。無駄足かと思いつながら一行から離れて駄足で大明寺の西側に出てみた。



犬も歩けば棒にあたり、大明寺に接した其処に「平山堂」の扁額が網膜に映った。

平山堂 (13頁地図参照)

大明寺の敷地内にある平山堂は、北宋の文人宰相「歐陽修」が揚州の大守だった時に建てた堂で、彼は屢々ここで詩の宴を張った。

蓮の枝をまわし、宴に列席した一人一人が一枚ずつの其の葉を摘み取り、最後の一枚を摘むことになった客は、覇として酒を飲み干さねばならなかったという。(右は平山堂の扁額)



唐宋八大家の一人に数えられるほどの文才と、書画も一流の芸術肌だった彼は妥協することを極度に嫌い、政治上、気に入らないことがあると直言した。彼が揚州に赴任したのも中央で失脚した為であったという。

堂内を覗くと「風流宛在」の扁額があり、詩も書かれていた。宛は「あたかも」という意味であろうか。風流が恰も存在するとは何処だろうかと眼を丘の下に移すと、杭州の西湖を小型にしたような、湖や奇岩、樓閣の幽静な景観が展開していた。これが西園であり、瘦西湖につながっている。(右は西園の景観)

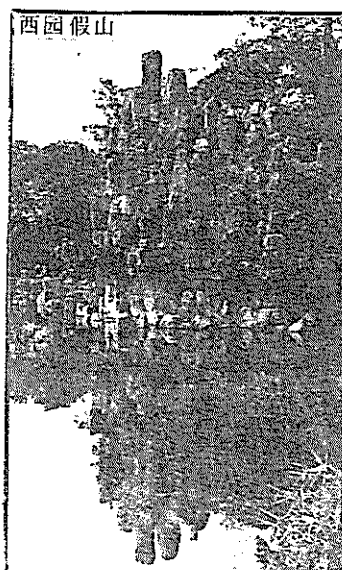
ここに遊んだ歐陽修は、この風光明媚を一望の裡に眺められたから平山堂と名付けたとも言われ、詩人の蘇東坡もここでよく詩を作っている。

この美観を堪能する暇もなく急いでカメラに収めて、石段を登って一行の後を追った。

行く手に白壁の2層の堂があり、「天下第五泉」と書いた石碑が岩場の中に見えてきた。白壁の建物は井戸であった。唐代の「張又新」という人は此の井戸で茶を飲んだ。彼はその茶書の「煎茶水記」では全国の水を7ランクに分類して、大明寺の水を「天下第五泉」としたのだということである。

中国の水は一般的に硬質で水質は日本より悪い。水を沸かしてお湯を飲むと不味というので、茶の葉を入れて飲むようになったという説がある。中国の文化人たちは良い水に強く憧れた。平山堂を散策した張又新は此の水を飲み、これはいけると満足したその様子を想像しながら西園を出た。

悠久の歴史をもつ中国では様々な文化が生まれ育ち、日本に伝わったのも数知れぬものがある。その筆頭格にあたる大明寺とも離別しなければならない時が来た。会う喜びは短く忽にして別れが訪れるのも人生だと、拝観の感銘を心に刻んでバスに乗りし、瘦西湖へと進んで行った。



瘦西湖公園 (9頁の下の地図参照)

車は瘦西湖の北門の大通りで停車した。路傍の枯草の下から柔らかい若芽が吹き出して緑は春を伝え、生は死から生じるといふ自然の法則を教えているといふような、感慨に打たれていた。(右は瘦西湖公園の平面図)

古色満々の門を潜ると一面は嫋々とした楊柳の若葉と李花が咲き、全体は古代の面影を残すような気品に満ちた風光が拡がっていた。

夕暮れ時のかすんだ湖水の彼方に、昔を偲ばせる五亭橋と白塔が湖面にその姿を落としている。竜頭鵠首の天子の船が美妓を乗せ、豪遊した光景が想像できるようだ。

一行は肩を並べて五亭橋へと歩いた。湖上に美しい蓮の花が咲いたように5つの亭が建っているから、古名は「蓮花橋」と呼んでいた。五亭橋は好んで揚州を訪れた乾隆帝の22年(1757)に建造した長さ50mの石橋で、その技術は中国橋梁建築史上の傑作と謂れている。

橋上に建つ5つの亭は黄色い瑠璃瓦をいただき、亭の柱は朱紅に塗られ、水の蒼さと相俟って其の色彩は典雅壯麗である。

橋の下には15個の円形の洞(船の通路)があって縦横に繋がり、満月の時に輝く金色の奇観は神域を思わせるという。(上の写真の右側が五亭橋)

五亭橋から湖水を隔てた南の高台に、白百合が咲いたように群を抜いて白塔が威容を現わしていた。霞んだ雲をついて聳える白塔は暗がりから牛が出てきたようで、その哀愁をさそう光景は一行を魅了させた。(上の写真の左側の塔)

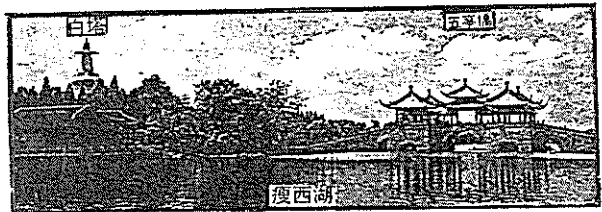
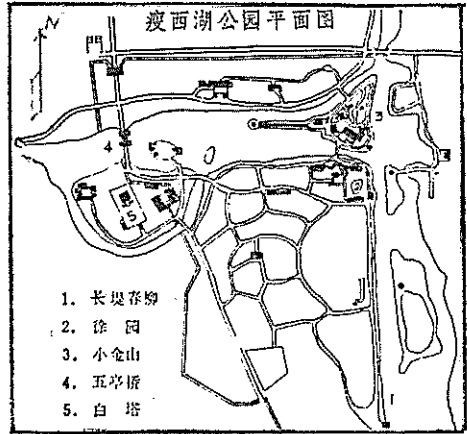
この白塔のラマ塔は北京の北海公園にある白塔と瓜二つで、次ぎのような話が伝えられている。

清の乾隆帝が揚州へ遊覧に来た時、地方官吏に「揚州には北京にあるような白塔があるか」と尋ねた。すると其の官吏は「ございます」と答えた。乾隆帝は「それでは明日見に行こう」と言い出した。

白塔のない揚州の役人や豪商たちは仰天したが、特産の塩で塔を作ることになり、一晩かけて湖の中州に塩の包みを積み重ね、白塔に見せ掛けた。翌日は無事に乾隆帝の遊覧をすませ、のちに塩の白塔の跡に本物の白塔を建てたという。

帰途の時間が切迫し、慌てて東の小金山や徐園を持参した双眼鏡で覗くと、微かに紅欄干のある4つの橋梁が人工の丘の上に見えていた。(上の地図参照)

乾隆帝が船を浮かべ「春嶺春深」と詠んだと揚州導遊書(上海出版社発行)に書かれた文面の、「朦朧的な美、空靈的な美、清幽的な美、縹渺的な美」を頭の中に描いて眺め続けていた。



昔を偲ばせ感動を与えてくれた揚州は私の胸に深く刻み込まれた。しかし霧のために飛行機が遅延した影響がたたり、旅行前に学習した揚州の知識も水泡に帰した感がある。買い求めた揚州の各書から新知識を得たことは収穫であり、憧れの揚州に足跡を残したことに幸福な歓喜を抱き、17時に南京へと出発した。

揚州～南京

「普天の下、率土の濱」、天の下は何処でも地の続くところは何処でも、行ってみたいと旅気狂いになっていた私、矢も楯もたまらなかつた揚州、これが現実となったことに、こぼれるような喜びを感じていた。

家族は九州の慰霊祭を含めて20日間にも及ぶ旅に危惧を抱いた。然しこれも蛙の面に水で歯牙にもかけなかつた。老いて益々壮なるべしと物事にぶつかり、「炒豆に花が咲く」と言った楽しみを味わったことは、また格別な快感である。

友人は昨今めっきり他界する人が多くなり、死んで花実の咲くものか、生きていればこそ今度のような楽しみがあり、大いに長生きして遊学したいという意欲が湧いて来た。若し生命というものを一種の体積と考えるなら、幾つかの違った型があるだろう。私は其の中で細く長い型を選びたい。

バスに揺られながら木々の梢の薄い緑を見つめ、夕暮の静寂なクリークを運航する船のかがり火に眼をやりつつ、いろいろな想いに耽っていた。旅は老いてくると年々賢くなるのだと思う心は、老い木は曲がらない一徹の固まりかもしれない。そのように考えることも道中の楽しみであった。

車が長江大橋を渡る頃には雨となり、南京飯店近くの雙門樓賓館にて夕食を摂ることになった。このホテルは蒋介石時代に英米の合同大使館であった建物で、食前方丈・肉山脯林の美食に舌鼓をうった。

6時間という貴重な時間を割かれてしまった揚州と南京、再び機会を求めて独り旅で散策してみたい。そして南京を去るにあたり、最近盛んに報道された「南京大虐殺30万人」に就いて記載する。

南京大虐殺30万人

昭和12年12月(1937)、南京城を攻撃した日本軍が大虐殺を行ひ、市内が血の海と化した当時の写真や生存者の証言、発掘された人骨の山が「侵華日軍南京大虐殺記念館」に展示されている。

そして其の正面の壁に30万人という犠牲者の数が表示されていると言われている。軍籍に身を置き允文允武の人たらんと志した者の一人として、これは避けて通れない問題だ。

先ず戦争の原因に就いて述べなければならない。戦争には戦争になる原因があり動機がある。しかし支那事変が何故に世界大戦にまで発展したのか、本当の原因を知るのは難しいことである。

日中双方の主張が正しいとすれば、戦争はどちらも正しいことになる。何れに非があり、何れが不正義かを決定するのは勝敗である。勝った方が正しく敗者には正義が

ないことにされた。そのことを念頭に置いて考察する必要がある。

石原慎太郎衆議院議員が、南京大虐殺30万人は中国人の作り上げた話だと発言すると、中国側は石原発言に反対の声を挙げた。石原議員はそれならば証拠を上げてほしいと言明し、南京大虐殺事件が日中双方の大問題に発展した。

中国側は30～40万人の中国人が殺害されたとし、その証拠として善善堂という慈善団体が10数万人を確認したという記録を持ち出した。善善堂というのは埋葬する機能を持たず、当時は活動する力は殆どなかったと中国の記録にはっきりしている。

それほど事件であれば何故に国際的な問題にならなかったのか。当時、国際連盟があって中国（蒋介石総統）も加盟しており、中国側はことあるごとに日中の問題を国際連盟に持ち出していた。しかし30万人、40万人が虐殺されたという事件を一度も持ち出していない。

このようなことから判る通り、南京大虐殺は中国側が戦後にでっち上げたものと言えるだろう。そのため極東裁判では松井石根方面軍司令官が死刑になり、それに関連して広田弘毅首相も死刑になっている。

あまりにも見え見えのでっち上げであって、嘗の連合軍も知っていたらしく、裁判後、彼のキーナン検事が日本人秘書に松井・広田の死刑はやりすぎだったと、述懐したほどだ。中国本土でも谷寿夫第6師団長が事件の責任者として死刑になっているが、勿論、松井大将も谷中將も最後まで南京大虐殺というものを否定して死んでいった。

それから20数年も経過し、中国側のでっち上げということが忘れられて来たころから、再び南京大虐殺が取り上げられるようになって来た。最初に取り上げたのは朝日新聞社の本多勝一記者である。

本多記者たちは南京大虐殺に関して日本人から聞こうとしない。数千人もの日本人将兵が健在だが、それを差し置いて数人の中国人の話を持ち出した。日本人は信用できず、中国人なら信用できるというのであった。

中国が虐殺記念館を造ったのは日本が経済大国になってからで、彼等が虐殺があったとした時から半世紀も後のことである。これは金になると考えたと言われても仕方がなく、本当に虐殺記念館が必要なら以前に造っていたはずである。

私も剣電弾雨の中で戦闘生活を4年以上も体験した。戦闘は殺戮合戦であって血の雨を降らす戦闘場面に於ては、血も涙もなくなり獣類化して殺し合うのは当然で、容赦なく殺害するのは戦場心理である。

しかし激突した戦闘が一応終結すると人間性を取り戻し、平常心に立ち返るものだ。私の体験から言えば、彼等の宣伝するほどの大虐殺が行われたとは考えらず、全く虐殺がなかったとも言えない。これが戦場の常であった。

世界の戦史を繙いてみると侵略を伴わない戦争はなく、虐殺のない戦場はなかった。戦場の実相や戦場心理等は決して理性的な思惟によって理解されるものではない。戦争・戦闘を知らない人々の埒外にあるのも然りである。

50年の歳月が流れて遠い戦争の記録などは風化しようとしていたが、この南京大虐殺記念碑の建設とともに、この問題が大きく取り上げられた。日本国内でも喧々譁々の論争が展開した。

旧陸軍士官学校OB（私もその一人）で組織する偕行社は、先に「証言による南京戦史」を偕行誌に連載した（昭和58年11月～59年3月）。主として参戦者の証

言によって南京事件を論述し、最終的には南京大虐殺30万人は実在せずと決定した。但し遺憾ながら虐殺のあったことは事実であり、その数は3千乃至上限を1万3千人だったと結論している。

残存する資料の殆どといえる膨大な公式資料を主とし、参戦者の証言に基き4年半の歳月を費やして完成させた。偕行社は平成元年11月に公にしたが、これには公式文書による捕虜、敗残兵、便衣兵の数を集計し、その数を約2万7千としている。

その内訳は収容したもの約7450、武装解除して釈放したもの約7850、処断したもの約1万3千である。勿論これは但書に示すように大雑把な目安に過ぎないが、これが戦史書の結論であった。

果たして1万3千が悉く虐殺であったのか、それとも戦闘行動の延長線上にあったのかに就いては、実際には具体的な総括はされていない。従ってこの不十分な性格をもつ数字をどう判断するかは、読者に委された形となった。或る者は1万3千の虐殺をとり、或る者は更に少ない数字であったと解釈した。

戦史は捕虜、敗残兵、便衣兵を本質的に区別しているが、それは形式的なものに過ぎない。また捕虜の処断を不法殺害とし、或は戦闘行為の範囲に入るとするなど、殺害の実態の概念が明確に規定されていない。

私も書いた経験のある「戦闘詳報」は旧軍の公式記録だが、若干の粉飾があったのは事実である。それは自隊の手柄が功績に関係するからだ。また戦場に現われる現象は戦場心理として極めて巨大に映るものである。

激しい戦闘をしたときは5千の敵が1万にも2万にも見える。戦闘詳報は実際より誇張され、敵の遺棄死体がそうであり、捕虜の数も実際よりは多く書かれていたのが常であった。

この南京戦史の総括的考察として、「中国国民に深く詫げる」と記している。1万3千人は勿論、少なくとも3千人も途方もない大きな数字である。戦場の実相がどうであれ、戦場心理がどうであろうと、この大量の不法処理には弁解の言葉もない。旧軍に属した者の一人として詫げなければならない。

視点を変えて南京作戦の全貌を把握することによって、この虐殺事件を考察する必要がある。南京攻略戦で松井大将の指揮する日本軍の総兵力は約14万、対する蒋介石軍の南京防衛軍は唐生智司令官の指揮する約7万で、彼我両軍の総兵力は21万人であった。

当時、日本軍の軍備は対ソ戦からすると軍の近代化は遅れていたが、蒋介石軍の装備は前近代的で、日本軍に比べ特に航空機や戦車に於て甚だ劣勢であった。上海戦線で総崩れとなって退却した蒋介石軍は、果たして南京で決戦を挑む意図があったかどうかも疑問である。南京防衛軍7万をもって日本軍14万に決戦することは、無謀に過ぎない状態だったと言えるだろう。

このような状況から昭和12年12月9日、南京攻略に際して松井大将は蒋介石軍の南京防衛司令官・唐生智に対し、投降勧告文を飛行機から投下した。そして12月12日、日本軍は南京最後の防衛拠点に対し総攻撃を開始し、これを攻略した。

唐生智司令官は其の日の午后遅く、全軍に日本軍の包囲網を突破して脱出すべしと命令し、自らも南京の下関から揚子江を渡って対岸の浦口に逃れ、奥地に逃避した。

逃げ遅れて日本軍の包囲網の中に取り残された約2万7千が捕虜となり、他は戦場

に斃れ、或は脱出している。偕行社戦史は捕虜のうち釈放したものは7800余、収容したもの7千余、処断したもの3千乃至1万3千と記録し、30万人の大虐殺を否定した。南京攻略戦の彼我兵力は21万人、蒋介石軍の総兵力は7万人であり、30万人という数字が出る筈がないと言わなければならない。

そこで一般住民がどれほど南京城内に残っていたかが問題となる。私の幾多の体験では、殆どの住民は戦闘開始前に予想戦場から避難離脱していた。居たとすれば決死的な便衣隊であろう。私は直接南京攻略戦に参加していないが、戦闘の経験のある将兵は恐らく同感ではないだろうか。

一体、30万人という数字はどこから出てきたのか。中共資料1983年の近代史研究の中に次のような記述がある。

「被害者の人数は究竟多少有り、幾万より幾十万に至り爾來說法一ならず。国民党（蒋介石）は初め30万、その後39万人と公布せる時あり。此に因つて30万の数字の由るは比較的具體性あり、常に一般人の引用するところとなる」と。

根拠のない30万人という数字は、戦争の当事者であった国民党の公式発表である。30万人を採用したから正しいと言うのである。然し、中共が根拠とした国民党政府の戦史資料には、30万の数字の記録はない。

民国35年4月（昭和21年）に公表した「8年抗戦、何応欽上将」の著書には、「民衆之姦淫蹂躪惨殺されて死せる者、10万人以上に達す」と書かれているが、これが最も早い時期に書かれた公式記録で、これが彼等の言う虐殺数の原点であろう。

支那事変当時、中国で自由に行動していた英米仏等のジャーナリストたちは、日本軍の大虐殺を全く報道していなかった。揣摩臆測の乱れ飛ぶ中で、このことが最大の決め手となると確信し、30万人大虐殺の項を閉じることにする。

「一人虚を伝えれば万人実を伝う」という格言があるが、一人が嘘を伝えると大勢がそれを真実として伝えるのだ。真実は「天知る地知る我知る人知る」の四知に委ねなければならない。ただ粒々辛苦して築いた日中友好のアキレス腱になることを私は恐れている。

論語にある「伯夷叔齊、不念旧惡、怨是用希」とは、伯夷叔齊は過去の悪事を心にとめない、だから人から怨まれることが少ないと言う意味である。50数年も経過して骨箱を叩くようなことを、何故に中共政府はとるのだろうか。これに対して日本政府は、米搗バッタのようにペコペコ頭を下げることも慨嘆に堪えない。

私は人一倍中国を愛している。だからこそ12回も訪中しているのだ。現在の日本は「眞下の阿蒙に非ず」、戦争を否定していることを理解して欲しい。過去の先進国の武力絶対主義と、今の日本の絶対平和主義を混同するのは不毛の対立である。

南京大虐殺を掲げて日中友好を叫ぶことは、葬式と結婚式を一緒にやるようなもの、お互いに良知良能を傾けて過去を忘れ、鳥の両翼、車の両輪、地球家族のようになりたいものである。

3月6日夜～7日

(木) 晴

南京～景德鎮

長い間の願望であった南京・揚州の旅は、飛行機の遅延によって竜頭蛇尾に終わり、熟読した中国の古代史も「氷に鑊め脂に画く」ように画餅に帰し、骨折り損となったことは返す返す残念であった。

今は亡き私の次兄は、南京城一番乗りを果たした靖江歩兵36聯の南京攻略後、補充要員として南京に赴任した。その当時の話を懐古すると、挽歌が聞こえてくるような感じがする。

南京の古い歴史や大虐殺という不幸な悪夢を抱いて、南京駅の貴賓室に入って列車を待っていた。そこに服務する4、5人の女性駅員に持参してきた菓子を渡し、拙劣な中国語で会話を楽しみながら時間を潰していると、何処で買い求めたのか、山水画を店開きして自賛している一行も見えていた。

21：27に南京発の寝台列車に乗車した。市街地を離れて田園地帯を走る車窓から、青く流れる月光の家々の屋根を照らす夜景だけが眼に映り、更けゆく夜は人影も景色も見えない漆黒であった。

寝るほど楽はなく、寝る間が極楽だと窮屈な寝台に横臥すると、列車の振動は忽ち快い眠りを誘った。沿線上にある黄山登山の基地・屯溪の街は想い出が多く、もう一度、眺めてみたいと思っていたものの、春眠暁を覚えず、化石のようになって眠っていた。(上の地図参照)

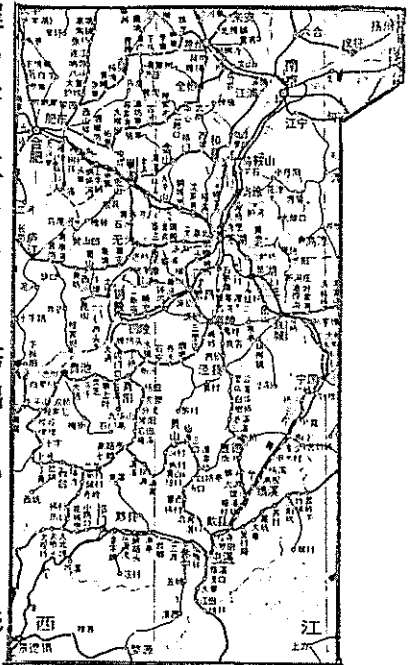
列車が祁県に停車して漸く目が覚めた。5ヶ月前に車で通過した此の街は磁土の産地で、景德鎮で使用する磁土は総て祁県産である。また中国随一の紅葉の名所だったことも脳裏に浮び、旅を懐古することも楽しいものであった。

定刻の9：44に磁器の里・景德鎮駅に到着して駅前広場に降り立った途端、出迎えた通訳の張氏は満面に笑みを浮かべて手を差し伸べ、昨秋にも景德鎮に来られた方ですね、と力強く握手してきた。天から降って湧いたような奇縁に、芯から心温まるものを覚えたのである。

昨年10月に訪れて2泊した景德鎮賓館は若葉の香りを漂わせ、館前の公園も春の花に包まれて、湖畔の風物は私の来訪を待っていた。既知の張氏といい景德鎮賓館といい、一寸先は闇の世の中で、忘れかけていた何物かを取り戻したように懐かしい。

ホテルで小休止の後は明・清時代に宮廷用磁器を精製した珠山地区の陶磁館を訪れ、昼食後は各種製造工場の見学となった。昨秋、2日間も具に見学した私は充分その古陶の美を觀賞し、今回は独特な街の風格を静観したいと別行動を申し出た。

「白きこと玉の如く、明らなこと鏡の如く、薄きこと紙の如く、音は磬の如し」と形容する景德鎮の磁器は忘れられない。午後は一行と別れ、これらの製品の並ぶ自由市場の前でバスを降り、時間をかけて眼の保養をすることにした。



気心が合って親しい間柄になっていた莫逆の友・円城太一氏は、首鼠兩端することなく私について下車した。彼は戦時中に南昌や九江に居たことのある年配の人で、類を以て集まるとでもいうのか、旅馴れした者は雀百まで踊りを忘れぬように、二人の足は自然に市場に向かっていた。

煤煙の匂いのする活気を浴びた町並みにも、爽やかで豊潤な若葉の緑臭が溢り、市場には景德鎮の生命が躍動して箒で掃くほどの買物客が集り、市に帰するが如く股賑を呈していた。

円城氏は磁器製の電気スタンドに御執心らしく、軒を連ねた100軒ほどもある店を丹念に覗き込み、瓢箪ひょうたんのように決めかねていた。「愚者も千慮すれば必ず一得あり」とか、私が古陶の美を表現している中国三大美人、「西施、王昭君、揚貴妃」を描いた品を推賞すると、彼は漸くそれに満足して購入した。

景德鎮の市場を散策していると、日本の陶器市を歩いているような懐かしさを覚える。何といっても其処に棲む人達の顔立ちが余りにも良く似ており、仕種しぐさや表情までも共通点が多く、ひやかし半分のショッピングに時間を忘れて充電した。

それ以来、彼と私の距離は短縮し、爾後の旅の期間中は常に深い友情に結ばれ、心おきなく話し合える仲となった。このことは異国情緒に花を添えたとも云えるだろう。

市場からホテルに帰る道すがら立ち売りの蜜柑を買い求め、歩道の椅子に腰掛けていた若い男女にサービスすると、彼等は我々老人に蜜柑の皮を剥いて逆サービスだ。商売の街・景德鎮の市民たちは親切で商魂は逞しく、日中親善外交の一時を楽しみながら帰館した。

3月8日

(金) 小雪のち晴

景德鎮～邵武

昨日は真夏の気候で半袖姿で過ごせたものが、今朝は一転して小雪が舞う天候に急変した。大陸の気候には用心をしないと気がけない蹉跌をきたすものだ。

夢想だにしなかった通訳の張氏との再会は、人種を越えて旅の楽しみを倍加させ、惜しむ名残をこらえて早朝5・57発の列車に乗車して、武夷山登山のために邵武に向かった。

僥倖にも列車は新品の寝台列車だった。然し乍ら文句の付けようのない中で、小雪の舞う寒さにかかわらず暖房が入らない。経済状態が依然として向上しない中国の緊縮耐乏生活は優等列車にまで影響し、ベッドの布団にくるまって辛抱しなければならなかった。

影のように暗い山野が灰かに光を浴びてきた。やがて昇る旭は薄暗い空気を一掃し、山麓の風光の細部まで照らし出してきた。福建省や武夷山の名勝に、無限の想像力と夢をかきたてて寛いでいたが、退屈はその意欲を越していた。

漫然と何もしないことに耐え切れず思案の揚げ句、独り車掌室を訪れ地図を開いて位置の確認を求めた。これも気分転換と語学勉強の口実の一策である。早速コーヒと日本タバコを3人の車掌に進呈し、会話を始めたがさっぱり通用しない。

怪訝な顔をしていたところ、彼等は「歡迎你們下次多車」と紙に書いて私を歓迎してくれた。昔の漢字で筆談を交えて会話を続けると、「中国字写得很好」、昔の字を

よく知っているとの返答が返ってくる。

そこで私の今回の訪中は12回目だと告げると、おなたは「活力很好」、元気だから百歳まで生きられると御世辞を述べていたが、和気霽々の会話は歓喜に充ちた思い出深い一時となった。

袖もすり合わすのも他生の縁だと話をしていると、列車は線路の交叉する鷹潭駅に停車した。昨秋、革命の街・南昌に行く時に眺めた駅である。安徽省から江西省に入ると白壁の家は姿を消し、いよいよ此处から南下して福建省に向かうのであった。



武夷山系の山が迫って千枚田の世界に移り、未だ霧の棚引く魅力は一段と景観を引立てている。一筋の間道が山間に向かって細く延びていた。星を頂いて出で星を頂いて帰る農夫の姿は、数千年の昔と少しも変わらない状態である。

前後に連結したSLは、煤煙を騰々と吹き上げながら幾つかのトンネルを通過し、懐かしい何十年前の日本の列車を思い浮かべて眺めていた。

猫の額ほどの狭い溪谷に咲く李花は今が盛りと咲き乱れている。曲がりくねった山の斜面を一畝一畝耕す農夫を眺めていると、蒋介石軍の猛攻から逃避して武夷山系に蟄居した、共産軍の在りし日が彷彿として浮かんでくる。

何時の間に分水嶺を越えたのか溪流は南に流れ、明るい太陽に照り付けられた青葉は目の葉のように緑を増し、迫ってきた山は松や竹で覆われて、いよいよ南国・福建省に入ったのであった。

古くから福建は南蛮夷狄の地とされたのも不思議ではない地形である。そして福建省は古代から地勢の関係から文化が遅れていたが、土着民は仲々精悍であった。又、福建軍といえば軍閥時代の中国では最も強い素質をもった軍隊であった。これを利用した共産軍が、福建軍と連携して反蒋介石的立場をとった経緯は、それほど遠くない記憶である。

武夷というのは勇敢な民族の武と、南蛮夷狄の夷から取って付けられた名称だろうか。元のチンギス・ハンは天下を平定すると蒙古人を各省に分駐させたが、明の太祖は逆に蒙古人を圧迫して通婚までも禁止した。その蒙古系の子孫が少数民族となって山中に残存しているのでおろうか。

南国らしい棕櫚の林に見惚れていると、列車は14:50に邵武駅に到着した。

邵武～武夷山・幔亭山房 (次頁地図参照)

古代から鉄の邵武といわれている此の街は、武夷山系の南を流れる樵川上にあり、「一灘(難所の意)の高さ一丈、邵武天上に在り」という俗語があるほど難所が多く、下流の富屯溪から70kmの間に500余の難所があるという。

駅前広場には三輪タクシー(昔のミゼットのようなもの)が並び、運転手は南国らしく竹製の帽子を被って客待ちをしていた。(次頁の写真)一方では露天が所狭しと軒を連ねて賑わい、38万の田舎町は盛んにビルを建設中であった。

中国ではタバコは専売ではないのだろうか。各地方で価格が違うばかりか、同じ町でも同じ品が店によって価格が違うのは不思議な経済である。

出迎えた通訳の姓は町名と同じく「邵」氏で、例によって一応の邵武の説明をしていた。北宋の李首相の出身地でもあり水運が発達していた関係から、木材、竹材、農産物等の集散地として栄えたという。

河の流れに眼をやると数隻の舟が上下して水面を航行し、筏で運んだ昔の面影は姿を消していた。

一行はバスの所要時間は約2時間半、85km東北方の武夷山へ向かって疾走した。邵武の町外れは赤茶げた山肌が続き、まばらに緑の生えた丘の上には7層の塔が聳え、その名を鉄牛塔と呼んでいる。詳しい説明はなかったが、恐らく武夷山に因んだ伝説があるのだろう。

茶の産地であろうか、丘という丘には何処までも茶畑が広がっていた。日本で人気絶頂の烏龍茶は、福建省が産地だったことを漸く思い出す。茶畑に混じった蜜柑畑や桃(李)の畑、それに菜の花は真っ盛りで日本よりも1ヶ月は早いようである。

むれ咲く菜の花をぬって飛ぶ蝶は春を喜び、人間も動物も此の短い一時を互いに大事にしているように見えている。農家は裕福なのかテレビアンテナが各家に立っており、2毛作の田圃を耕す中に混じって家鴨が餌をあさる光景など、長閑な田園風景は我々の心まで春めかしていた。

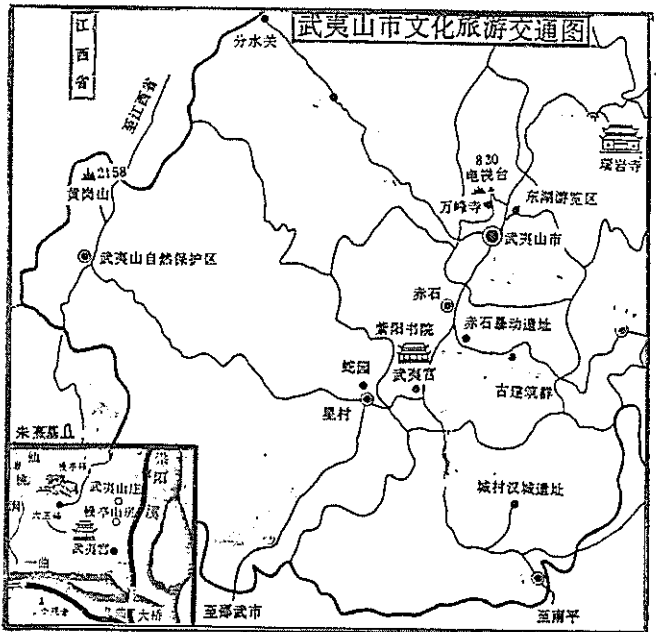
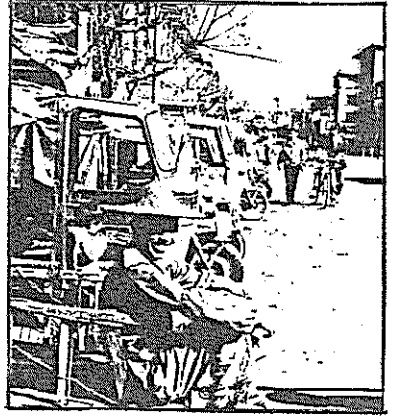
山脚の小さな水田地帯を走る道路を水牛の群が塞ぎ、峨々たる連峰は跳梁跋扈した武々しい夷が棲んでいたような山容だ。

大橋を渡って「武夷宮」の標示を左折し、宮殿のような建物(武夷宮)を通過して、武夷山最古の宿舎である幔亭山房に到着した。(右図左下参照)

時計の針は16・30を指して未だ陽は高く、後方に聳える大王峰は山頂に人頭を乗せたような奇岩を頂き、その北側の幔亭峰もまた峰頂に巨岩をのせて下界を睥睨していた。

仙人の棲む藐姑射の山に似た環境は表現する言葉も知らず、佳境に入ってきた感じの幽境であった。

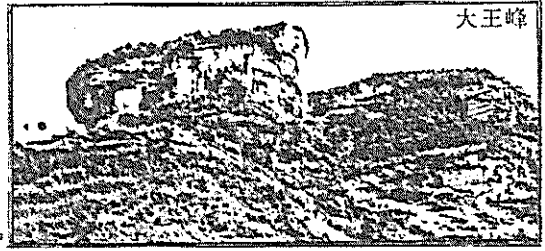
宿舎の幔亭山房の名称は幔亭峰の名を引用したもので、山房の建物は数棟に分かれ、森閑として静寂な山脚の一郭を占めている。紫のコブシの花の咲く前庭を通り抜け、指定された2号房に入った。建物に囲まれた内庭の湖水は清々しく其の影を映して、



淵に咲く橙色の花は季節を呼び寄せ、人を招いていた。

山房の建物は全てが竹で作られ、郷土文化の個性を集めた薫りを充満させ、古代の王侯貴族の棲家の感じがしている。

正に武夷山麓に相応しい逆旅（宿舎）は、万人に好奇心を抱かせたことだろう。



（上は幔亭山房の後方に聳える大王峰の威容である）

次第に峰々は茜色に染まり始め、夕日を浴びた江面は紅に燃え出した。金色の流れに浮かぶ曳き舟の影は峡谷を一段と引き立て、静かに詩情がにじみ出る世界に嘆息せざるを得ないものがある。

今日は中国の雑祭の日であった。山房の若い女性従業員たちは武夷市（前頁地図参照）に映画観賞に出掛け、そのために我々の夕食は早くなった。暇となった時間を利用して購入した「武夷山史」を繙き、人間は死ぬまで勉強だと懸命に読破した。

武夷山市概況と名称の由来

武夷山史によると、幔亭山房や其の前に建つ武夷宮は武夷市に属し、人口20万の武夷市は福建省で最少の市である。（前頁地図参照）武夷山脈は武夷市から西方に延び、福建省と江西省の省境をなしており、1990年1月より崇安県武夷市と呼ぶようになった。

著名な武夷山風致地区を擁する市は殆ど森林に覆われ、茶の生産地として有名な外、竹木製品が特産である。また閩北（閩は福建省の別名）革命の策源地で、その活動の中心として赤石暴動遺跡があり、その他、漢時代の城跡も遺っている。

著名人の筆頭である「朱熹」（日本では朱子）の生誕地として知られており、朱熹墓や朱熹故里遺跡、武夷宮等が遺り、武夷山をこよなく愛した彼の摩崖刻石は全山に遺っている。

武夷山の名称の由来には多くの伝説がある。隴西邑彭氏族譜には次のように記載されている。

黄帝の7代の子孫であった顓帝の第3子、名を篋籛と呼び、功績があつて彭城（現在の徐州）に封ぜられた。以来その子孫の姓を「彭」と呼び、篋籛を始祖、すなわち「彭祖」とした。

紀元前12世紀の殷の末期に世が乱れた。その時、彭祖は2人の子供の「彭武」と「彭夷」を彭城（徐州）から風景秀麗な此の幔亭峰の麓、現在の武夷宮附近に派遣して開山させた。

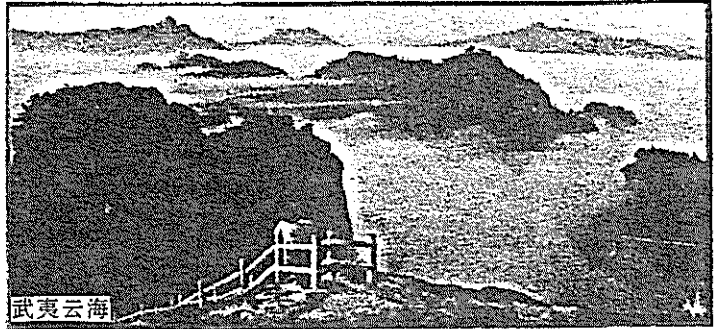
この地方の人たちは開山に功績のあつた2人を記念し、彭武と彭夷の名前の1字ずつをとって「武夷」と命名したという。これが「碧水丹山」とまで称される武夷山の名称の由来で、彭祖篋籛を「武夷君」と呼ぶようになったと言う。（武夷山史）

山房には、武夷君が武夷山の13仙人と此の房で開設の祝宴をあげ、国泰民安の祈願をしたという伝説がある。そのために当地の民家建築の様式を取り入れて、古朴な自然美を現代に遺していると謂れている。

武夷山の概要

武夷山風景地区は武夷市から西方40kmに及び、国の5つの重要自然保護区に指定され、平均海拔は1200m、北部の黄岡山は2158mで中国南部の最高峰である。

一帯は大竹が群生して世界的に有名であり、高山植物は200科、2000種に及ぶ。(上の写真は武夷山の雲海の景観)



その他、原始林は数え切れず、武夷山に棲息する蛇(五步蛇という)は珍貴で、野生動物も400科、哺乳動物は400種以上、鳥類は400種、これらは全国の4分の1と言われて自然動物園をなしている。(福建省発行武夷山手冊による)

武夷山には36峰、72洞(洞とは洞穴や広場を意味する)、99岩があり、これらの砂礫岩は層畳をなし、群峰は地を抜いたように聳えて秀抜奇偉、千姿百態の景観は秀奇を競っている。

冬春の雲海は茫々として拡がり、群峰は忽にして隠れ忽にして現われ、変幻万化する奇観は黄山に匹敵するという。澄んだ碧水の九曲溪流は峰を縫うように流れ、兩岸の千峰は天然の美を水に映し、竹筏に乗った遊覧は天然の博物館を見るようだ絶賛されている。

武夷山の歴史は古く、文化悠久の名山として志(天文、地理、礼楽などを記述したもの)に記載されている。秦・漢以来、各地の名士、禅家、文人墨客が訪れ、特に武夷山記には漢の武帝が武夷山へ遣使したと記している。

天嘉年間(560~568)には范仲淹、朱熹、王陽明等が相次いで武夷山を遊覧して賛美した武夷山の景色を詩に詠んでいる。武夷山には多くの著名人の古跡や摩崖刻石、詩文洞のほか、神話伝説が遺っている。(武夷山旅遊手冊)

3月9日 (土) 晴 武夷山登山 (雲窩天遊コース)

(九曲賓館~接筆峰~隠屏峰~茶洞~天遊峰~桃源洞~九曲溪)

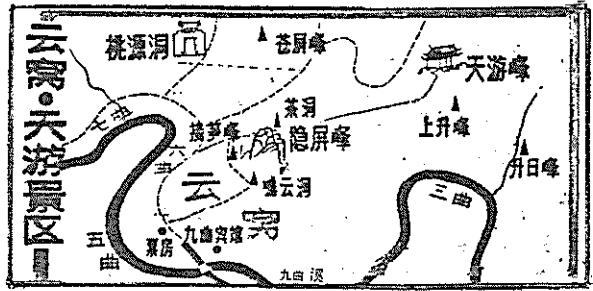
熟睡中に風の音に眼を覚ますと、それは私の喘息の喘鳴であった。年老いてくると呼吸するたびごとに笛が鳴るのだ。昨秋の黄山登山では熱発のために伏臥した苦い経験があり、思い出すと砂を噛む思いがする。

頭から離れない黄山の悪夢は「一災起きれば二災起きる」と、身の毛がよだち肌粟が出るほどだ。しかし登山を前にした現在、黄山の苦痛も過ぎ去れば楽しみの種となっていた。それは河豚は喰いたし命は惜しいと云うほどの、高山ではないからだ。

東の空は朝焼けして絶好の登山日和だ。春先は死んだ馬の首も動くと言うように、眠っていた生物が活動し始めるのと同様、人間は病気の問屋とも知らずに吾れ我れを

忘れて小心翼翼しながら気負い立っていた。

今から6億年前に形成された武夷山には前記の通り36峰がある。従って登山道や遊景区も数多く、我々は武夷宮（24頁地図参照）から大橋を渡って九曲がり（溪流の曲がった数の順位を表わす）を通り、五曲がり附近の九曲賓館へと進んで、上図の云窩（雲窩）・天遊景区の登山となった。



バスを降りて九曲溪の清流を渡った所にある売店では、杖は羽根が生えて飛ぶように売れていた。入場券を売る票房を通ると「雲窩」と刻んだ石碑が立っている。（右の写真）

窩とは穴の意味で、雲窩とは仙人の棲んでいたという意味であろうか。3千年前に開山した彭祖は、8百歳まで生きたと伝えられているから、恐らく仙人の棲家と言うのであろう。

武夷山はまた道教の山、日本で言う「朱子学」の中心的聖地であり、朱熹を祀る武夷宮はそのためである。神社仏閣があるから聖地ではなく、聖地だから其れらが建てられるのだと、武夷山は我々に教えていた。その聖地めぐりこそ観光旅行の原型のように思えるのである。

近年になって鼓吹宣伝し始めた武夷山、この一樹の陰、一河の流れも他生の縁だと山脚を進むと、清楚な趣をみせた風雅な境に、無数の生命のざわめきが周囲を包容し、竹藪の中に混じって咲くコブシの花も、人の世を眺めて生き続けていた。

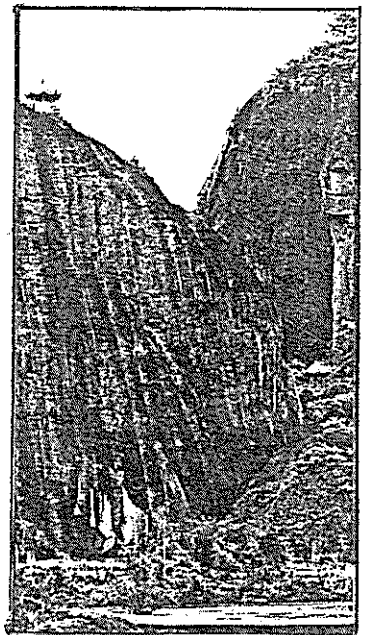
今日まで名前も知らなかった辺境の武夷山は魅力的な山容を現わし、幽人・隠逸の人の棲む秘境の雰囲気漂わせている。そして山岳は総ての風景の始めであり、終わりであるような感じを与えるのであった。

長い年月の間に自然が造り出した様々な景観は旅情を掻き立てていた。雄渾な天空の一角に流れる白雲を眺めていると、大自然の中へ昇華して行くようで、神々への厚い信仰心も自然の造形を伝説化したもののように思えてくる。

雲窩の石碑から迷走する岩道に入った。接筆峰は河に迫り、その裾は垂直な断崖絶壁の蝕崖となって溪谷に落ち込み（伏虎岩）、その景観は異次元の空間に足を踏み入れたような感じだ。（右の写真）

これを言葉で表現すると、森羅万象がことごとく息を詰めてしまったような、威圧感を受けると言ってよいだろう。

830段もあると言われる砂礫岩の階段を登攀すると、



自分の体の細胞の一つ一つに靈風が通り、血液が浄化されて行くような感じを受けてくる。黄山の轍を踏まないようにと、蟻の行列のように一列になって登る一行の、最後尾をゆっくりと歩いた。

苔生した岩壁に「問樵台」と彫んだ3文字が眼に入った。雲窩には接筆峰、隠屏峰、天遊峰などの高峰のほかに、洞も十数ヶ所もあり、そのために、人はしばしば迷路を彷徨うことがあるらしい。

「問樵台」は、そういう時には必ず道を樵夫に聞けと云う注意書きの石刻であった。

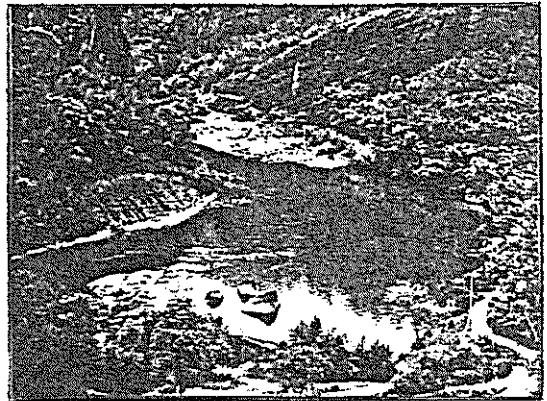
接筆峰を左に見なかせら嘘雲洞を通り抜け、山肌の複雑な表情を捉えて行くと、擦れるように迫った岩間から妖しい山気が一段と立ち昇ってきた。

白雲亭の眺望は山と川とが互いに照り映えて、我々はこれに一つ一つ応接する暇がないほど変化していた。(上の雲窩の要図参照)

この地一帯は明の万曆11年(1583)、兵部侍郎だった陳省が隠居した聖地である。聖地とは全身を耳にし口にして、天と地を貫く大気をひたすら吸い込む所であろう。自然は無為であり、無為にじっと耳をすますことが心の旅だと感じてくる。かって仏教徒は巡礼という名の旅に出たが、道教も同じだろうか。

気は世を蓋うと云うように心だけは元氣澆刺、しかし急いでは事を仕損ずると、急な石段をしっかりと踏みつけて水月亭に向かった。十数個ある雲窩の亭の中でも最も名のある水月亭(上の要図参照)は、避暑と佳景の名勝地であった。

山の中に深く入って味わう神々しい山岳美と、凜然と下界を流れる溪谷の俯瞰美に、何もかも忘れて呆然と見惚れていた。(右の写真は水月亭からの眺望)

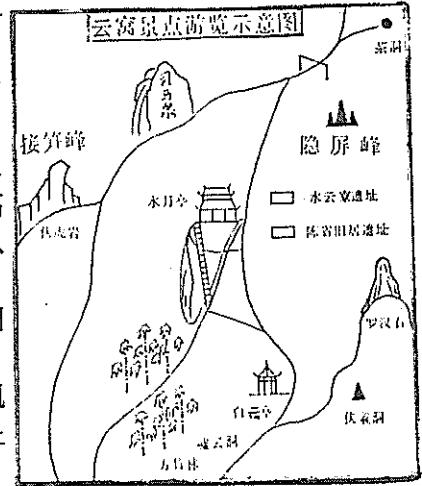


水月亭から隠屏峰の峻険な岩道をたどると、行く手にはしばしば岩場に穿たれた隧道が続き、万曆年間に「方孔焰」氏の書いた「重洗仙顔」の石刻が網膜に映ってきた。仙人たちが顔を洗った所であろうか。

死神が抱き締めているような静寂さは仙境らしく、その心に迫る感動は筆舌には尽くせない、神秘的な色彩と輝きの二重奏であった。

暫く進むと其処に朱塗りの「叔圭精舎」の石刻が、険阻な山間にある石門に彫まれていた。ここは北宋の詩人・江執氏の棲家で、修業するには玉(圭)を拾う(叔)と言うような良い処という意味であろうか。

加齢現象が次第に現われたのか、金属疲労したように疲れを覚え出した。そして何歳になっても気持だけは現役だが、五里霧中になって上を見ると不気味な不安に教わられてしまった。それは垂直な断崖絶壁の崩れ落ちそうな隠屏峰が、虚空に高く聳えていたからである。(次頁の写真は隠屏峰の断崖と石門)



隠屏峰に対峙する接筆峰の岩壁に彫られた「水雲寮」は、雲窩の中で最初の宿舎があった跡である。続いて朱熹の作と言われる「崢嶸深鎖」（山が高く険しく深く閉ざされている意味）と書いた石門があり、そこから眺める**隠屏山**も稀有の美観であった。

先哲や文人墨客たちは此の深山幽谷の環境に身を置いたとき、魂が浄化されて自己陶醉に陥ったのであろう。

それを思うと私までが、犬が尻尾を上げるように浮き浮きとなり、天にも昇る心地で幸福を一身に湛えたような気持ちになっていた。

隠屏峰、接筆峰の間を抜けると、山間の斜面に茶畑が一面に広がっていた。福建省は烏龍茶の産地だが、武夷山の高山茶は岩茶と称して極上の品であり、この地が「**茶洞**」であった（前頁地図参照）。

茶洞にも春を呼ぶ花が我々の心をほんのりと温め、乙女の唇を思わせる赤い花が咲き、茶洞に色を添えている。

伝説によると、神仙が医の第一は茶であるとして此処に茶の種子を蒔いたのだと言う。四周は高峰に囲まれた幽深絶座の佳境の地、歴代の有名人は最高の避暑景勝地として、茶洞に隠居したのである。

牡丹は中国が原産地、可憐で清楚な味わいは強い生命力を表現し、私の最も好きな花である。茶洞の牡丹は少々時期早々であろうか、蕾は開いていないのは残念だ。

「居は氣を移す」と言うように、人の居場所は其の人の心を変えるものだ。魅力が充満した茶洞に未練を残しながら、千姿万態の風景に引かれ惹かれて先へと進んだ。

その行く手を遮るような峻険な岩壁に一条のつづら折りの石段が現われ、屠殺場に引かれる羊のように、一列になって登攀する人影が見えてきた。

龍の鬚をなで虎の尾を踏むような危険な急坂に吸い寄せられるように登った。高所恐怖症の私の背筋を一瞬ぞっとさせたが、旅名人は危うきに遊ぶと言われており、意を決して這う這うの体で青息吐息で攀じ登った。（右の写真は険しい急坂）

深山だから秘境があり、黄山登山の懐かしい息づかいに包まれながら、老いては麒麟も駑馬に劣ると休憩を続けて、大男が殿ををつとめた。

濡れ鼠になって発熱するのを怖れていると、気が合う仲間となっていた莫逆の友の円城氏も、私と団栗の背比べの状態で見送られてきた。

年寄りがいくら元気だからといっても、春の雪のように体力はない。浮き世は悲喜こもごもだと憔悴しながらも、老い木に花を咲かすのだと氣力を満身に込めて、怯む心を書き立てた。しかし矢張り山は凶器であった。

獅子奮迅の力をふりしぼって登り続けると、道標のように老練に枝をひろげた大木に突き当たった。そこを通過



した途端に一帯は台地となって開け、2層の大楼閣が碧空に聳えていた。ここが「天遊峰」の展望台となっている。(右上の地図参照、下の写真は天遊観)

巍然と独立して聳えた天遊峰は武夷山第一の景勝地で、高台に建っている楼閣を「天遊観」と呼び、登攀してきた石段の数は840段であった。

早速、天遊観の楼閣の上に立つと、羽根のついた仙人になって自由に飛び廻る羽化登仙の気分だ。九曲溪の清流や各峰の全景が手に取るように眼底に映り、何か自分が飛び抜けて偉くなったような感じがする。

天遊観に掲げられた「遊遊霄漢」の大扁額は一際目についていた。遊遊は遊ぶことで、霄漢は青空の意味であって、将に天遊の名の通りの美観だ。

特に日の出の情景は雲海がたなびき、その奇観を眺めるために最近になって宿泊施設まで造ったという。

天遊観の周囲にある約30余りの懸崖石刻には、「第一山」「福地洞天」などと彫まれ、その絶景の景勝をたたえていた。

天遊観の楼閣内では書画が展示即売されていた。その一隅に竹の根株で作った大きな面が秘蔵品のように飾られていたが、武夷山は岩茶の産地と共に世界的な竹の産地だけあって、生まれて此のかた目にしたこともない珍品であった。

咽喉から手が出る程の竹株の面は根が髭となっており、根の直径は30cm以上もある中国老人の顔を形どったものだ。日本円にして2万円だが下山の苦勞を考えると、残念ながら諦めなければならなかった。

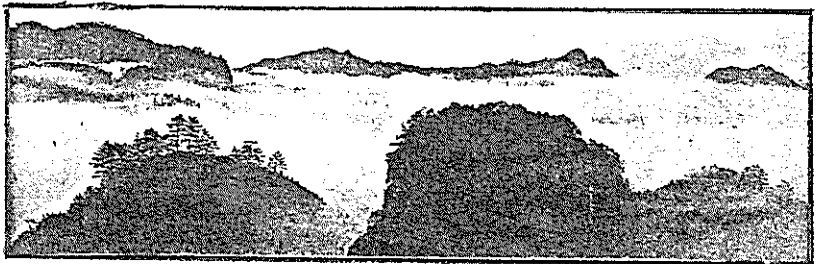
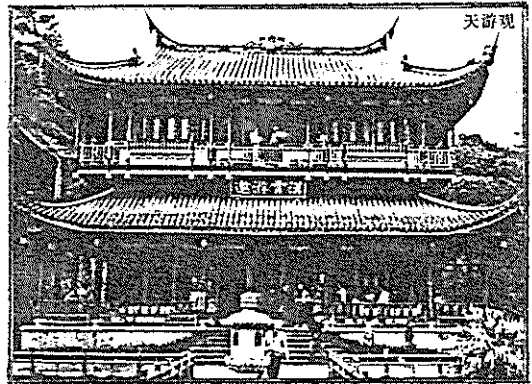
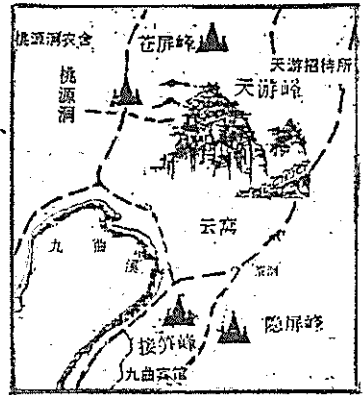
後髪を引かれるように天遊観を降りると、重なりあった森の強い精気が全山に充満していた。

木立ちの隙間か

ら差し込む柔らかい日差しが緑を写し出し、黄山登山のように龍頭蛇尾にならないように用心深く歩を運んだ。(上は天遊観からの眺望)

下山する径は登山した時の径とは違って西方に向った(上の要図参照)。岩壁には「胡麻澗」(山と山との間にある水流の意)、「競秀争妍」(妍=麗しいこと)などの石刻群があり、七曲がりの溪流を眺望するのに絶好の場所だと賞賛されている。

さらに石段を下っていくと道教の靈山でありながら、「無量寿仏」(阿弥陀如来の異名)の石刻が懸崖に彫られていた。中国では仏教と道教とが混合している場合が多



く存在し、秘境の聖地は競って仏教、道教が道場化したのである。

突然、前方の林の中に大石門が出現した。これは天門坊と呼ばれる石門で、雲窩の中に幾つかある登山道の一つであった。この附近には蒋介石夫人・宋美齡の別荘があり、蒋介石自身も別荘建築の予定をしていたと言う。

よい出合いに恵まれたように私と円城氏、趙通訳の3人は一行から遅れ、途中の道路の分疑点で休憩して、さあ出発しようと左へ下りる径を選んだ。

ところが其の時、前世の因果か慈悲心からか、江西省の看護婦たちの一行を案内する中国人が、我々を呼び止めた。

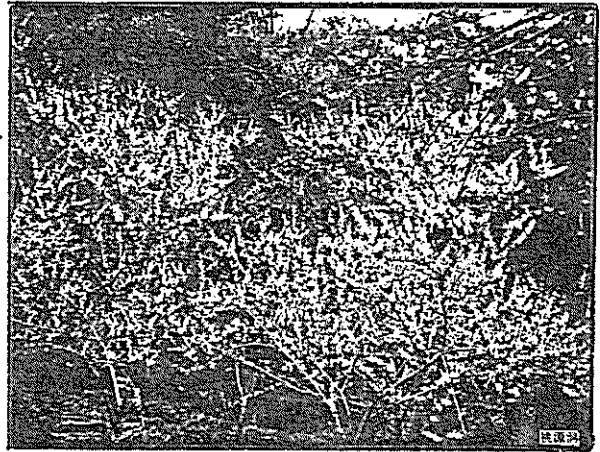
疑心暗鬼で右側の径に導かれて行くと、弁慶の立ち往生のように径は途切れて進めない。身を横にして岩の細い間隙を案内する彼は、私の手を取って漸く通り抜けた。

古色蒼然とした石門に「桃源洞」と彫った扁額が私の目に止まった。(上の写真)苔蒸した石門をくぐると眼前に広々とした世界が開け、周囲を松竹の林に囲まれた緑の中に李花が紅に染まっている。



「万緑叢中紅一点」と豊麗に咲き誇る景観は將に桃源境であった。武夷山の洞という意味は洞穴の意味と、この桃源洞のように広場という意味をもっている。

桃の花の一輪一輪の花容は一日一日を、どんなに尊いかと美を競い合い、日本人の我々の美意識を刺激して、その華麗な姿に声を上げずにいられない。壮麗とは此のような景色の形容だろうか。



〔上の写真は桃源洞に咲く満開の李(桃)の花の一部〕

太古の聖王と知られる黄帝が、夢の中で遊んだ華胥の国とは此のような処であろうか。独特な文化や風俗を培ってきた美しい花の咲く大自然と、神仏を信じる素朴な人々を魅了する桃源洞は、春を迎えた風の匂いが花の匂いに変わっていた。

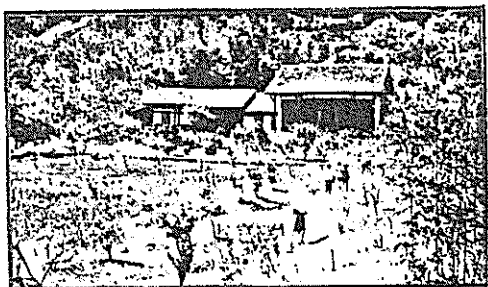
武夷山の神話によると、北宋時代に此処に石堂寺が建てられた。一人の樵夫がここで仙人に遭い、余りに景観が優れていたから山を開き、桃源の世界を造ったと言う。

瓢箪から駒がでたように、思いがけない武陵桃源(人里はなれた別天地)に案内してくれた江西省の中国人、時は得難く、よい道連れは佳境に入る一番の近道だったと、今も心から感謝している。

江西省の看護婦一行と、「問津」と書いた石刻と李花を背景にして記念写真に移った。彼女等は棒腹絶倒、腹をかかえて大笑い、友好親善の実を上げたのである。

「問津」の「問」は訪れるという意味、「津」は崖とか溢れ出るという意味で、仲々意味深長で古代中国人の表現力は敬服の至りである。

武夷山旅遊手冊によると、桃源洞は武陵桃源の風景に近似しているから、又の名を「小桃源」と称すると言う。宋の詩人・陶潜の「桃花源記」では、湖南省の武陵桃林の奥に、戦乱を避けた人々が平和に暮らす仙境があったことから、武陵桃源の名が生まれたと言われている。



開豁に眺めが開けた向こうに見える隠士「根据仙」の棲家の跡に、今は桃源洞農舎が建っていた。それを取り巻く世界的に名高い岩茶と竹の産地らしい光景は、何時までも私の脳裏から離れなかった。（上の写真は根据仙の棲家跡の景観）

ツアーの一行と離れて何時までも陶醉していることは許されない。しかし千載一遇の機会を逸した一行の人達は、宝の山に入りながら空しく下山したことは誠に残念であろう。本当に心から同情している。

歳月は顔や皮膚に皺を寄せられるが、魂にまで皺を寄せることは出来ない。その点百花繚乱の桃源洞は、本当に私の生命の皺まで伸ばしてくれたような気がする。

意気軒昂として3人は九曲溪に沿った径を雲窩の入口に向かった。接筆峰の絶壁に彫られた「壁立万仞」の石刻に見惚れていると、責任感の旺盛な添乗員の山田君は、心配のあまり途中まで出迎えていた。

我々だけが牡丹餅で頬を叩かれたような幸運に恵まれ、誠に相済まなかったと謝罪して、有意義な武夷山登山を無事に終えたのである。

疲れ切った体が車の振動で揺られていると、桃源洞の美観が浮かんでくる。その時、「昨日の花は今日の塵」の句が脳裏を通り抜けた。花の命は短くて儚いように我々の運命は判らず、今日あって明日のない身、人間は恒常不変ではないのだと思えて来た。

九曲溪の竹筏下り

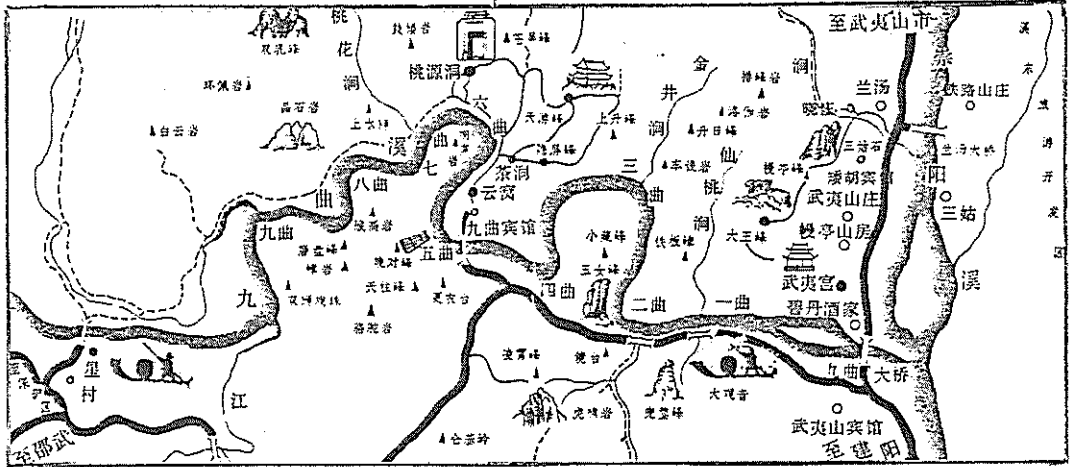
定めなき世であっても旅は矢張り空想の友である。午前中は岩と樹と花に息を合わせるように自然の中を歩いて眼を潤し、食欲を満たした昼食後は疲れ果てて暫く寝台に横臥した。

午後は14:20から武夷山中を流れる九曲溪の竹筏下りとなった。「天竜下れば飛沫にぬれる」、伊那節で有名な天竜の舟下りを想い出しながら、バスに乗車して竹筏に乗る星村に向かった。（次頁の地図の左下が星村）

武夷山36峰の千姿百態の溪谷を流れる清流は、地図（次頁）のように一曲から九曲まで曲がりくねった九曲溪をなしている。

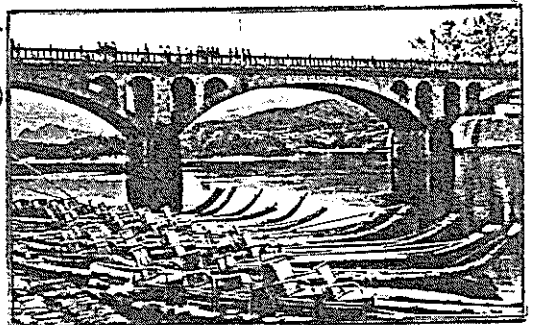
武夷山旅遊手冊によると、溪流は山をめぐって兩岸の千峰はその影を碧水に投影し、古朴的な竹筏で乗遊することは賞心（景色をめぐる心）、悦事（よろこび）の極であると賞賛している。

九曲溪の長さは約9・5km、その奇麗非凡は中国の名山中でも数少ない風景遊覧区である。乗る竹筏は幅約2m、長さ約9mの遠い昔の小舟のままで、筏には欄干もなく、兩岸の景観を見るのに遮るものは何もない。



星村の大橋の裾で下車して岸边に出ると、そこに10隻ばかりの竹筏が繫留されて我々の到着を待っていた。(上は九曲溪地図)

竹筏は初見参である。前記したように武夷山は世界的な竹の名産地だけあって、その名案には感心させられた。直径15~20cmほどの竹を20本ばかりくりつけ、6人乗りの椅子まで竹製品、ただ靴が濡れないように足場だけは木の板が置いてあり、本当に古朴素なものであった。(上の写真は

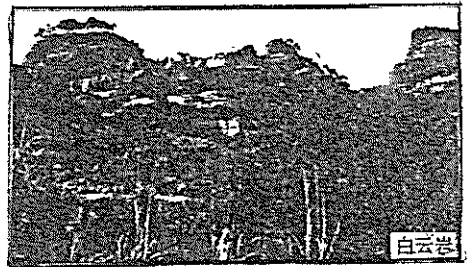


下の写真は)大橋下に繫留された竹筏群)

前後で筏を操る船頭は昔ながらの竹棹で、水深1mほどの川底をさしながら筏を流れて動かし、旅は心の栄養剤のように血を沸き立たせ、筏下りの情緒は武夷山ならではの。

凜然として流れる水面を春風が走り、周りの松籟の澄んだ中に白雲は空高く流れて、九曲附近(上の地図参照)では「白雲岩」が見え出した。(右の写真は白雲岩)

その中腹にある尼僧の住む道教の寺は如何にも信仰の山に相応しく、「煩惱あれば菩提あり」と両者を武夷山は取りもっている。



峰が川に迫る緩やかな流れと同様に筏もゆっくりと下った。蛙の格好をした蛙岩や蝕崖から突きでた奇岩が次々と連なり、これほど風雅に視細胞を刺激させて遊び心を味わったことはない。

八曲附近を蛇行する溪流は灘となって白波が立っていた。飛沫に歓声を上げる人も見受けたが、残念ながら日本のように船頭の歌声は聞こえない。夏目漱石の文句ではないが、「知に働けば角が立つ、情けに棹させば流される、意志を通せば窮屈だ、とかくこの世は住みにくい」、と言った気分を吹っ飛ばしていた。

七曲附近になると川幅は広くなつて瀬が見えてきた。樹木に覆われた峰々が峡谷の

流れに影を映す光景にはっと息をのみ、人間の力に優る天のエネルギーを感じない訳にはおられない。瀬の向うの乳房の形をした「双乳峰」は新緑に染まり、山河は天の配剤の妙を盛り合わせている。(右は双乳峰)

「足を万里の流れに濯ぐ」という詩が脳裏に浮かんだ。万里もあるような川で足を洗うことで、世の中の雑然とした出来事から離れ、超然としている意味である。清冽な舟下りの風雅は將に明鏡止水の心を堪能させてくれた。

六曲附近は午前中に遊び心を興奮させた桃源洞であった。天遊峰も其の威容を現わしたが一瞬にして姿を隠し、郁鬱の夢を見ているようである。また水の泡はできては直ぐ消え、夢や幻のように実態がなく泡沫夢幻の世界を展開していた。

六曲から五曲にかけて接筆峰や隠屏峰の垂直な蝕崖が迫っている。午前の疲労困憊した登攀の苦勞もすっかり忘れ、その美観に惹かれながら至美至楽の山水に抱擁されて無我の境地に陥っていた。

(右の写真は隠屏峰と竹筏に乗る一行)

せせらぎにも草の葉のそよぎにも耳を傾けると其処に音楽があり、また江山水陸の風光は百媚、その過ぎて行く一時をも逃さないと総てが魅了の虜になっていた。

四曲の両岸は奇岩怪石の連なった豪快な溪谷美を誇っていた。澄んだ水の流れは時には瀬となり、そして淵をなしている。水そのものの青さが或は空を映した色なのか、久しく忘れていた色に感動を覚えるのであつた。

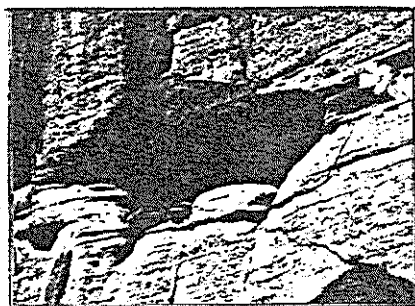
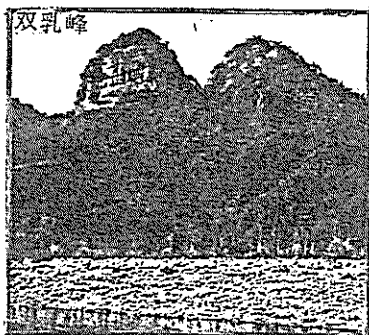
切り立った溪谷に張付けたように茂っている松林の中に、一条の白糸の細い滝が見えてきた。眼もくらむ高さから落下して碎ける飛沫は精霊の歓喜が宿っているようだ。

四曲附近を竹筏は滑るように流れて行くと、隠屏峰の水月亭は空中の楼閣のように見えていた。与えられた今を楽しむことが現在の肯定であり、それが本当の自由に生きるという意味だと、勝手な解釈をしていた時、筏は三曲の瀬に接岸して一行は次々と上陸した。

突然、頭の上から岩が落ちるように岸壁が迫り、其処に大きな洞穴が口を開いていた。(右の写真)

これが即ち「風葬」の洞穴であった。武夷山旅遊手冊によると、今から3400~3800年前の夏の時代のもので、現在は少数民族となっている古代越人の「架壑船棺」だと記されている。(架壑は空中の谷の意味、船も棺も同じく棺桶の意味)

私はパプア・ニューギニアで風葬を見た経験はあるが、このような断崖絶壁の風葬を眼にするのは初めてだ。何のようにして屍を垂直な岩壁の洞穴に運んだのであろうか。仙人の風葬と呼ばれていたが、神話の世界に引き込まれそうな雰囲気であった。



よろずのものは生滅流転するように変化し、現実も夢であり夢もまた現実であろうと感じながら風葬を去った。さまざまな奇勝が点在する前方の二曲に、変幻な幽趣をたたえた玉女峰が視界に映った。

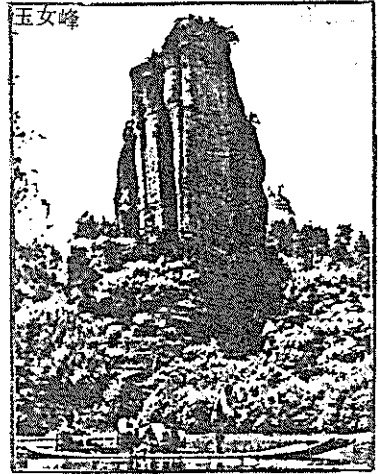
髪に花をさしたような挿花の奇峰が淵に聳え、その形が三姉妹が玉立しているように見えるから、玉女峰の名が付いたと言われている。(右が玉女峰)

新緑や奇勝を眺めて清流で水飛沫を浴びる川下りの醍醐味も、いよいよ千秋楽が近づいてきた。美しい自然の中での遊びが終わると、おのずと風流の二文字が頭の中を掠めてくる。

一行の宿泊している幔亭山房の裏に聳える大王峰は、玉女峰と相對峙して一曲の景観に花を添えるように、夕日を浴びていた。(右は大王峰)

心の空腹を大自然の美しさが満たしてくれた九曲溪の川下りは終わった。

「死んで花実の咲くものか」、木や草は折れ曲がっても生きておれば実を結ぶ。しかし人間は死んでしまえば花が咲かないのだ。水の流れと人の身を考えると、万物は全て師であった。



武夷山・山茶研究所

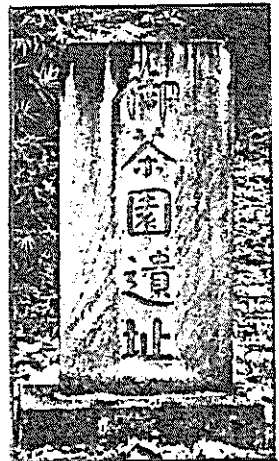
竹筏から降りた一行はバスに乗り、四曲附近の山の中にある御茶園に案内された。現在は茶の研究所となっている。早速その主任は武夷山の茶は世界的に名声が高く、特に此の研究所の品物は本場の最高級だと縷々と説明を始めた。

前漢時代に始まった喫茶の起源は私も知っていた。長江流域の江蘇、四川、雲南省も茶の産地として有名であり、烏龍茶は福建省が本場である。

烏龍茶とは黒い茶という意味で100種以上の種類があり、その中で最高のものが武夷山の「岩茶」だと言う。高血圧症や痩せる効果が抜群の岩茶の中でも、「毛蟹茶」「肉桂茶」が最高だと説明していた。

説明の後には例によって即売に移った。一行は高齢者が多い性か、茶は羽根が生えて飛ぶように売れ出した。茶研究所への案内は日本人の茶好みを当て込んでのことであろう。そこで私は研究所を抜け出して独り「御茶園遺址」を訪ねた。(右の写真)

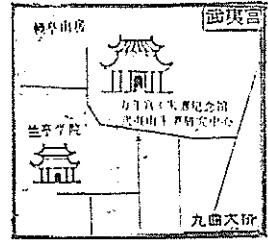
石碑の裏面に御茶園の由来が彫られている。武夷茶は宋時代に栽培が始まり、この御茶園は元の大徳6年(1302)に創建され、官営として茶の生産に貢献し、元の皇帝・クビライ・ハンにも献上したと記されていた。



朱熹記念館 (万年宮・武夷宮とも称す)

茶研究所から幔亭山房に戻って小休止後、山房前に新築された木の香りのする真新しい朱熹記念館の参観に出掛けた。

朱子とは朱熹の尊称であり、朱子学は南宋の朱熹(1130~1200)によつて大成され、日本にも影響するところが多かった儒学である。〔右は記念館(武夷宮とも称す)位置図〕



日本には鎌倉時代に伝わって江戸時代に普及し、官学として封建社会の中心思想となったのは周知の通りだ。藤原惺窩、その弟子の林羅山のほか木下順庵、室鳩巢、新井白石、貝原益軒等が輩出している。

儒学は唐代になって盛んになり、宋代になって益々盛んになった。朱子の学説は宇宙の本体を指して太極と言っている。

太極より理と気の2つが生じ、あらゆる万物は理と気によって成立する。理は万物を生じる道で、気はその万物を形づくる質であり、両者は分離独立するものではないと言うのである。

孔子の「心の欲する所に従って矩を踰えず」、孟子の「義集りて浩然の気を養う」という位置に到達した時の境地を指すものと言えるだろう。(詳細は略す)(上の写真は朱熹記念館の玄関)



朱熹は安徽省の出身で官に在ること50年、享年72歳。南宋時代に彼は武夷山の管理を委任されて隠遁した。武夷山中では隠屏峰下に武夷精舎を建て、武夷山を詠んだ摩崖石刻群は数え切れず、九曲溪を詠んだ九曲棹歌は至る所で眺められた。

武夷山市(24頁地図参照)の全市にわたって彼の業績を称えた遺址が多く遺り、朱熹故里遺址や朱熹墓などは代表と言える。1988年に武夷山朱熹記念会が成立し、昨年の1990年10月、朱熹生誕860年を記念して「万年宮」の跡に、建立されたものが此の記念館である。

「万年宮」の俗称を「武夷宮」と称し、唐時代に創建されて千有余年の歴史をもっている。歴代王朝は修復を重ね武夷山門として尊敬された。その後、武夷の主神を祀って勅使を派遣し、道教の書籍を多く収蔵している。

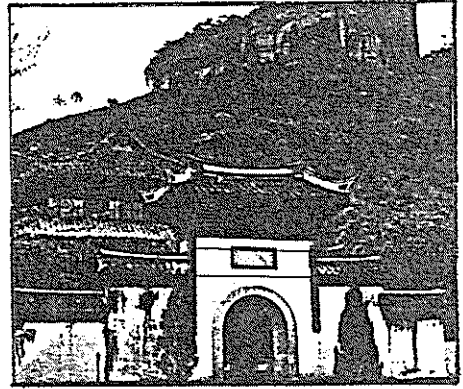
閉門時間ぎりぎりになって入門したため駢足で広大な記念館を一巡した。大雄宝殿の扁額に書かれた「学達性天」の四文字と朱熹塑像は、青年時代に学んだ儒学を懐かしく想起させていた。

今や日中ともに時代が変遷して思想や価値観の変化は著しい。しかし武夷山市が哲学者、理学者、教育家で儒教經典に大胆な新解釈を加えた彼に対し、研究、賞賛していることは誠に喜ばしく、その印象は私の脳裏に深く刻み込まれた。

孫中山堂

陽は西山に傾いて薄暮を迎え、一行は万年宮の前に建つ孫文の孫中山堂へと急いだ。

薄暗い堂の中には孫文の偉業を称賛した数々の書が陳列されている外は、総て芸術学院の資料館となっており、拝観するようなものは見当らない。中山堂の後方には芸術学院の数棟の建物がたち、武夷山市の教育に対する熱意が見られた。(右は孫中山堂と大王峰)



今日一日の予定を竜頭蛇尾にならずに無事に終り、年寄りの冷水と言われながらも、好奇心に駆られて夕暮の武夷宮の街を散策した。

10軒足らずの店頭には、どぐろを巻いた蛇が並び、仙境の武夷山は30種類に及ぶ蛇の産地であることを知る。また前記したように竹の名産地だけあって竹製品が多く、我々が川下りした竹筏の細工は特に印象づけていた。

石や木や水を素材にした自然の造形美に情熱を燃焼させてくれた武夷山、風流な竹庵の宿で手足を伸ばした幔亭山房、凡ての想い出は胡蝶の夢を見たようで、夕食後は半死半生になって眠りに就いたのである。

3月10日 (日) 晴 武夷山～南平 (古名は延平)

朝の明るい光がブラインドの窓から細い筋のように差し込み、山際にもう明るくなって紫雲が長く柵引いていた。山房の庭に咲くコブシの花は、環境は外界と人間との相互の関わりだ、と言わんばかりに私を手招いていた。

人里を遠く離れた山中に住み、自然を友とした生活にふれた武夷山、いよいよ離別の時を迎えた。思えば今日は昔の陸軍記念日であった。毎年、代々木練兵場に繰り広げられた観兵式の壮観な絵巻も、今では昔の夢物語となってしまった。



今から南平を経て福建省の省都・福州に向かうことになった。何処かへ進むと言うことは帰りつつあると言うことだと、何気無く思えてくるのも年の性であろうか。

8時に出発したバスは紫陽溪に沿って南下した。溪に糸を垂れている太公望、日曜日とあってか繁盛する三輪タクシ、田畑で餌をあさる白豚、屠殺場に白豚を運ぶ荷車など、豊かな流れに人々の暮らしが概ね満たされている感じだ。

地形が蜜柑畑に変化して9時半に建陽(人口35万)に到着。書籍づくりでは全国第1と言われる此の町は活気に溢れ、緑の芽の吹く街路樹の中にビルが林立していた。水運の便が街を発展させたのであろう。

紫陽溪と南浦溪が合流する地点から両岸は穀倉地帯を形成し、水上には材木を運ぶ筏が流れ、丘陵地の桃李の花は陽に映えてまぶしく輝き、武夷山と違った長閑な風景は我々に心と眼の保養を与えていた。

銅の延平と言われて漢時代に殷賑をきわめた南平郊外で、思わぬハプニングが突発してバスは停車した。嫁入り道具を運ぶ小型トラックが、我々のバスを追い越そうと

して接触事故を起し、互いに烈火の如く口角泡を飛ばす口論が始まった。

我々は列車の乗車時間に支障をきたすのではないかと案じたが、彼等は漸く落ち着いて30分ばかりで示談が成立した。通訳の話ではトラックの方が50元を支払ったという。

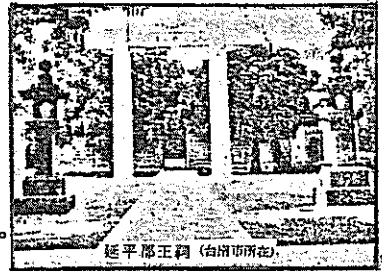
3時間半のバスの旅も終わり、南平市の幔亭酒店で昼食を摂った。南浦溪と閩江^{ビシウ}（閩＝福建省の別名）との合流する所に発達した此の街は、船便が良好なために河港をなし、一行のために優美な影の孤舟まで川面を滑っていた。

1958年に鉄道が開通して交通の要衝となり、新聞紙の生産は国内随一と云われ、木材、茶、薪炭などの大集散地となっている。

昼食が終わると、長崎県平戸市に生まれた明の「鄭成功」の史実が脳裏に浮かんだ。彼は陸海から南下した清軍を福州に迎え討って敗れ、明の唐王・隆武帝を奉じて此地「延平」（南平の古名）に逃れ、「一念天に通ず」との信念のもとに潜伏した処が南平であった。

この戦いで彼の母（日本人）は安平城（泉州の南）で自害し、父は清軍に投降したと聞くに及んで、益々「抗清復明」（清に抗し明を復興）の意志を固くした。

1650年に明の永曆帝から「延平郡王」に封ぜられ、その後、コロンス島（アモイ）に根拠地を移し、大軍を率いて南京に向かって進撃した。（鄭成功に就いてはアモイのコロンス島で項を設けて記述する）



（上の写真は現在、台湾・台南市に祀られた鄭成功の「延平郡王祠」である）

幔亭酒店から南平駅に到着すると、そこに住む人、行き来する人の顔には田舎の省とも思えない活気が溢れ、駅舎には武夷山と閩江の流れを描いた大きな油絵が飾られていた。

南平発福州行の「特快・武夷号」に乗車する群衆は駅舎内に入り切れず、駅前広場にまで続々と流れ出ていた。ふと広場から川辺に眼をやると花は所を定めぬもの、どんな所でも美しいものは美しいのだと、閩江河畔にも桃李の花が薫風に揺れていた。

南平～福州と中国の湾岸戦争論

列車は南平駅を15:06の定時に発った。一面の菜の花畑の黄色に眼を染みながら、林則徐や鄭成功の近代史の宝庫・福建省を険に浮かべると、人生にこんなに楽しい旅があったのかと、胸の鼓動は高まるばかりであった。

「嘉肴ありと雖も食わずんばその旨さを知らず」だ。味わってみなければ判らないのと同様に、中国の夷狄の辺境も此の眼で確かめなければ真価はわからない。思い切って今度の旅に参加した喜びが、閩江の流れのように押し寄せてきた。

我々の乗車した軟車は文明列車と標示されていた。日中両国とも千里同風というように文化の2文字が氾濫している。自由と平和を希求することは喜ばしいが、文化は字句だけの付け焼き刃であってはならない。

彼等の言う夏、華、華夏、中華、中州、中朝、中国など、世界の中央に位置するという思想は千古不磨の原則である。彼等指導者の日本に対する臆に落ちない言動に、

危惧の念を懐かざるを得ず、鼎の軽重を問いたい心境を文化の2字は刺激していた。

車中は牛は牛づれ馬は馬づれの気心の合った者同志が集り、奔騰する閩江の急流が時々刻々と形を変える光景に応接の暇がない。

豊富美麗な自然環境の中に「灘」(舟行の難所)や「虚」という市場も見えていた。虚と云うのは長髮賊(太平天国の乱)が此の地方を通過した時に多数の人を殺し、人口が減少したため定期的に市場(虚)を設けたという歴史がある。

閩江沿岸に住む人々の祖先には蒙古種族も多いらしい。チンギス・ハンが天下を平定すると蒙古人を各省に分駐させたが、明の太祖が興ると蒙古人は逆に圧迫された。彼等は山中に逃れ或は水上に逃れて水上生活を余儀無くされ、漢民族との通婚も禁止された歴史は前記した通りで、複雑な南蛮の福建省は興味津々である。

列車はお粗末だが日本と同じように車内販売があった。雑誌を手に抱えた売り子を呼び止めてみた。猿が水に写った月を取るような精神異常者・フセインを、中国は如何に報道しているだろうかと物色した。

洪水のように報道する日本とは異なり、中国では人民を余計に刺激しないという魂胆があるのか、売り子の持った5、60冊の雑誌は小説ばかりであった。捜しに捜した挙げ句、「**海灣来自戦場的報告**」と題した1冊を見付けた。これは北京・群衆出版社発行で印刷部数は限定の5万冊に過ぎない。それだけ報道は少なく、従って人民の関心も薄いのであろう。

天上天下唯我独尊の思想は中国、イラクとも同じではないかと、95頁のこの本を一気呵成に読んだ。「海灣」とは「湾岸戦争」のことで、藁半紙のような粗末な紙に印刷し、白黒の写真も西側が報道した写真を掲載して、ぼやけていた。

湾岸戦争は昨年8月2日のイラク(中国語では伊拉克、以下同じ)のクェート(科威特)侵入に始まり、本年1月17日から多国籍軍(联合国)の空爆開始、2月24日に地上戦突入、2月28日に戦闘は停止された。しかし旅立って以来の1週間の戦況は全く不明で、世界の情報から遮断された盲聾の生活の苦痛を、此の時ほど味わったことはない。

「先ずイラクよ、クェートから出て行け」(漢出、科威特)が巻頭の辞であった。この戦争は中国のベトナム(越南)戦争とは異なると解析し(中国が仕掛けたベトナムへの越境攻撃は領土が目標ではなかったという)、フセイン(薩達姆)の行動は世界的な大賭博であり、アラブ(アラ伯)世界の和平を訴えている。

米国(美国)のブッシュ(布什)大統領の各種の演説を掲げ、米軍の強大な威力を全面的に紹介している。特に中国は未開発なのだろうか、夜間戦闘の能力(例えば夜間眼鏡など)を強調していた。これらは中国軍のハイテク技術の飛躍的な発展を人民に訴え、理解を求めているもので、総ての結論は自国に結び付けているのが特徴だ。

一方では1937年生まれ(約旦)国王のイラク支持、イラクの正規軍(親衛隊のことを意味するのも中国らしい)12万は攻撃精神旺盛で軍中の軍だと報道している。中国軍も親衛隊式の組織を考慮しているのかも知れない。

結局、「塞翁失馬、焉知非福」だと言う。日本語では「人間万事塞翁が馬」という意味で、戦争の行方も何が幸福になり、何が不幸になるのか判らないと記述し、一方に偏らない記事が多いようだ。

面白い記事として、「海灣〈孫子〉熱」の一項が大きく掲載されていたことだ。

湾岸戦争では両軍ともに古代中国の「孫子の兵法」を詳細に研究し、サウジアラビア（沙特アラビア）に於ける米軍の最近流行書の第一は、孫子の兵法書だと自賛している。しかし真実のほどは疑わしく、これも中華思想ではないだろうか。

勿論、孫子の兵法の細部にわたった解釈はしていない。百戦百勝は善の善なるものに非ず、即ち戦わずして敵に勝ことが最善だと述べたいのではないだろうか。

結論として中国は両方に顔を立てる「無手勝流」式でありたいのであろう。これは次ぎの中国の態度にも現われている。

イラクのクェート侵入を非難した中国は昨年11月29日、国連のイラクに対する武力制裁決議に棄権した。即ち5大常任理事国で一国の中国だけが、多国籍軍の武力行使に支持も反対もしない態度を表明したのであった。

中国の個別的な国益としては、新疆ウイグル自治区のイスラム教徒の存在があげられる。イランから中央アジアを通して親イラク、親イスラムの感情が伝わると、第2のチベットとなりかねない微妙な問題があり、イラク側の顔も立てなければならなかったであろう。又イラクに武器輸出していたことも関係があると思われる。

日本に就いては戦争開始以来、中国は日本の行動に注目していたと記述している。正当な日本人（この意味は理解に苦しむ）は湾岸戦争の和・戦に猜疑的だったと記し、NHKを始め其の他のテレビ放送は、他の全放送を停止して戦争の進行状況を流したと報道していた。ここでも報道の使命観が違っている。

日本国内では表面的には正常で冷静に見えるが、アラブの石油に依存する日本では平均物価指数は最高に上昇した。そのために一部の人はイラク大使館前で「イラク出て行け」と叫び、米国大使館前にもデモの群衆が押しかけたと書かれていた。この記事は中国の武力制裁決議に棄権したことが正当だったと言うのである。

最後に「日本大輸血」と題し、多国籍軍に日本が90億ドルの追加支援を決定したことを報道して終わっている。天安門事件以来、西側からの支援が停止され、日本に借款を求める中国は事実を伝えるのみで、論評を加えておらない。

この誌の責任者である劉靖華氏は、ペルシア（波斯）湾に閃光が発してアラビア砂漠は黒い幕に覆われ、世界文明最古の地に悲劇が起ったのは残念でならないと述べている。

米国は主導権を握って湾岸戦争に突入、イラクは独裁強権のフセイン主義、ソ連（蘇聯）は覇権主義、日本は「誠」の言葉を述べてない。これが果たして民主であろうか、自由であろうか。中国の態度こそ最善であると強調し、絶対にベトナム（南越）戦争のような悲劇を繰り返してはならないと力説している。この主張も天安門事件以来の変わりばえのしない論調だ。

兵は凶器、争いは事の末である。地震、雷、火事、親父とは天地人の3つの恐ろしい譬だが、戦争を体験した者の一人として、戦争は最大の恐怖だと感じながら読み終わった。

列車は一湯千里に3時間の旅をノンストップで走り、19時に福州駅に到着。省都で温泉町の駅舎は垢抜けた近代建築で、今夜宿泊する駅前の「温泉大廈」は15階建、温泉付きの各部屋は超デラックスであった。宿は夢を見る装置でもあり又、温泉は違った夜を準備するようで福州を印象付けていた。福州は古くから日本との関係が深く、故郷を思い出しながら温泉の湯に寛ぎ長途の疲れを癒した。

福建省の概要

福建省は一衣帯水の台湾海峡を隔てて台湾と相対峙している。省都の福州は84年に沿海港湾都市として開放され、泉州は沿海経済開発区、厦門（アモイ）は経済特別区に指定され、一躍注目を集めるようになった。

もともと福建省は泉州などの天然の良港を利用した対外貿易の中心地であった。今日世界で活躍する華僑の祖先はこれらの港から出国し、華僑の故郷の地である。南国の陽光を浴びたアモイは爆発的な観光ブームを巻き起こし、泉州は静かな史跡巡りブームを起している。

福建省は古代から南蛮馱舌の国と見られて言語も著しく異なり、省内でも福州語、厦門語というように甚だしい差異がある。中国では海岸づたいに南方に行くにつれて性質は激烈になり、福建人も広東人と同じく激しさをもち、言語の上にも表われている。

全省は殆ど山地で「東南山国」の呼称があるほどだ。平野は閩江流域を始めとする河川流域のみで、水運のほかは交通は不便であった。しかし戦後は鉄道が敷設され、自動車道路網も発達した。しかし中国本土から見れば南蛮馱舌の地である。

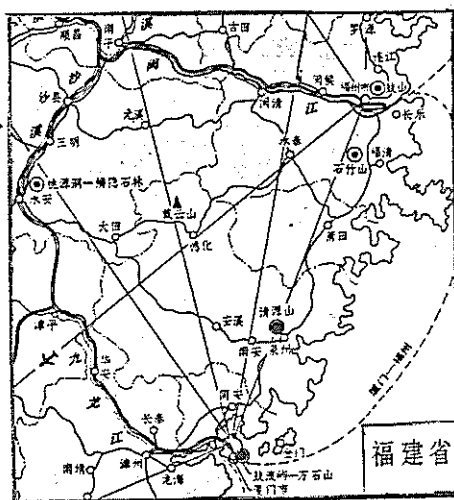
海岸線は屈曲が多く1400余りの島嶼があり、風光は明媚で日本のように松の木の典雅な海岸風景が展開している。特にアモイの対岸の鼓浪嶼（コロンス）の風光は、瀬戸内海を思わせるものがある。

省民は屈曲する海岸線から漁業が盛んで船乗りが多く、昔の海軍は山東省と並んで福建人が主流をなしていた。福建に海軍陸戦隊や海軍の諸学校もあり、海賊の多かったことも有名である。

福建省は地形と文化の遅れから土着民は精悍で、昔の福建軍といえば軍閥時代の中国では最強の素質をもった軍隊であった。蒋介石時代の1933年秋、福建革命が起って此の地方の反蔣勢力が糾合し、福州方面から蔣打倒の第三政権を立てた歴史は私の脳裏に刻まれている。

これは当時、蒋介石の包囲作戦に困窮していた江西省を中心とする共産軍が、反蔣的立場から彼等と連携していた。共産軍は国際路線を福建の海岸に確保しようとして、福建省の山岳地帯に進出した。然しこれも蒋介石軍に撃破され、共産軍は後退、即ち長征の旅となったのである。

日本との関係もかなり古い。平戸の女が生んだ明の英雄「鄭成功」が活躍したのも福建省である。又、退嬰時代の日本に不満を抱き、中国近海に勇姿を現わした「和寇」の群もこの地方で暴れたものと思われる。



福州の概要 (旧名は閩侯)

町の至る所に榕樹 (ガジュマル) が生い茂っていることから、「榕城」と呼ばれる福建省の省都である。冬は暖かくて夏も凌ぎ易く、年間を通じて緑の絶えることのない山に囲まれ、市内を閩江が流れる福州は山紫水明の街である。

長い歴史があり、前漢の紀元前202年に早くも閩王がこの地に都を置き、唐代には福州府が設けられ、以来、福州独特の文化が形成された。昔は東西南北のほか7門がある城壁に囲まれていたが、現在は撤去されている。

福州は茶の名産地として古来から諸外国に名が知られ、我が国の和寇の上陸地としても馴染の深い街である。和寇が福建を襲ったのは明の洪武年間で、爾来20年間に6度も兵を受けたという。そのため沿岸に屯所や狼煙台を設け、福州市内にも和寇台と名付けた台がある。

和寇は朝鮮半島及び中国大陸の沿岸や内陸で行動した、海賊的集団に対する朝鮮人や中国人の称呼で、本来の語義は「日本人の侵略」という意味である。だから支那事変に参加した我々も和寇であった。

日本との関係は和寇だけでなく、福州の外港・馬尾を通じて宋・元代には既に通商があった。江戸時代には琉球館が置かれて琉球墓園も造られている。「琉球」の名は中国人によって明代に命名されたのであった。

市内にある標高86mの烏石山は眺望がよく、唐時代には閩山の名が付けられ、山中は奇勝36を数えて所々に石刻がある。これと道路を隔てて並列する于山 (別名は九仙山) は標高58、6m、昔9人の兄弟が不老長寿の薬を作り、仙人になるために修業した処だと伝えられている。(上の地図の中央附近)

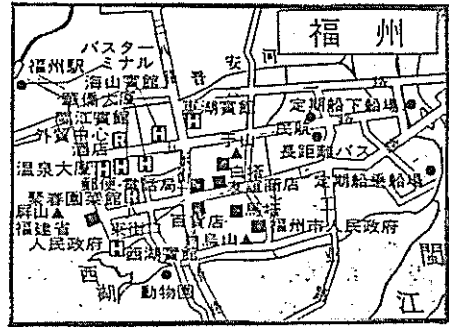
閩江の南河畔に屹立する鼓山は、盛夏の山頂の気温が福州市内より平均10度も低いというほど清涼で、晴天の日には台湾の山が微かに見えるという。山の中腹にある湧泉禅寺は巨刹として有名であり、弘法大師が入唐の際に駐錫した寺として仏教徒に親しまれている。

福州はアヘン戦争後、1842年の南京条約でイギリスによって開港させられた5港の1つである。又、アヘン貿易に反対して国家の柱石となった「林則徐」(1785~1850)は、この福州出身の政治家であった。

福州に立ち寄ったマルコ・ポーロは次ぎのような記録を残している。

「この都市には多数の商人・工匠がおり、盛大な取引が営まれている。(中略) 真珠・宝石の取引も盛んである。それはインド諸島で商販に従事している商人達を満載した海船が、はるばるインドから入港するからである。

それというのもフージュ (福州) 市から6日行程の先に、大洋に臨んだザイトウン (泉州) 港があって、莫大な商品を積み込んだ多くの海船が先ず此の港に入港する。次いで其処を出帆するや (中略) フージュ市まで回航してくる。フージュ市に搬入された商品は、水路か陸路によって再び各地に運搬される。(中略) この町は実に見事で感嘆にたえない都市である。」



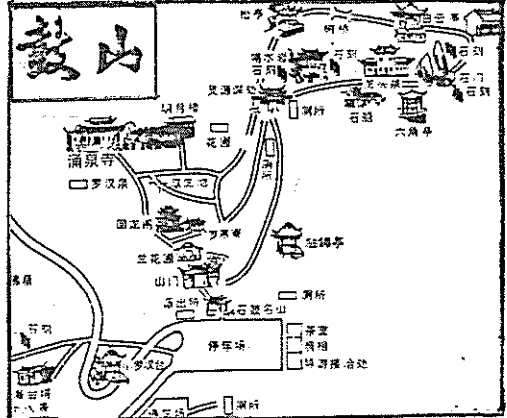
3月11日

(月) 晴

福州観光 鼓山・湧泉寺

武夷山登山、九曲溪下り、閩江に沿った列車の旅から辿り着いた福州は、温泉好きな日本人には絶好の息抜き場所であった。福州の市内は明るく多彩で変化に富み、旅の楽しみが一段と強くなるのは何時の世も変わらない。

名称の由来は、福山という山の名から福州となったと謂れている。先ず最初の観光は鼓山であった。狂瀾怒濤の近代史に富んだ町並みを眺めて進路を東にとり、福州東部に聳える標高969mの山に向かった。



今から1600年前の晋の遷城記によると、峰の上にある一大巨岩の形状が太鼓に似ており、風雨に遭うごとに岩洞が太鼓のような音を出したから鼓山となったと言う。峰の岩は秀抜で幽雅な溪谷をなし、千古の古樹名木が全山を覆い、奇岩怪石や洞の数は数え切れず、至る所に溪や瀑布があって谷中の谷だと書かれている。

湧泉寺は五代后梁の908年、鼓山の白雲峰の下に閩王（閩は福建の別称）によって創建され、規模は宏偉で工芸技術は精巧、そのため「閩刹の冠」と称賛されている。又、宋の真宗の999年に「鼓山白雲峰湧泉禪寺」の扁額を賜り、明の1407年に修復され、今の「湧泉寺」の扁額は清の康熙帝の筆である。

史料によると明の1408年と1542年の火災によって灰燼と化し、1627年に再建され、清の順治・康熙年間に逐次拡張した。大雄宝殿を中心にした殿・堂・楼・閣は25に及び、中国南方古刹の第1である。（上図は鼓山・湧泉寺）

鼓山の駐車場で降りた一行は、鼓山の主体である獅子峰、蓮花峰（上図の左になる）は割愛を余儀なくされ、真っ直ぐ湧泉寺へと進むことになった。旅は未だ長く続き不服を言わず、今日は今日を楽しむことが賢明な生き方だと、鬱蒼森閑とした参道を登った。

新緑の伸びた樹木の中に豪華絢爛な山門（上図）が目を奪い、路傍には黄色い可憐な花と「鼓山題刻」の碑が見えていた。

各地の石刻に書かれた漢字を眺めていると、漢字文化は人間の心の問題であり、時代が進み体制が変わっても変わるものではないと思えてくる。

朱く塗った石の塀垣が地勢に沿って延びており、第2の門をくぐると其処に、「空海入唐之地」の石碑が生彩を放って立っていた。我々日本人の眼を注視させたのは当然のことである。（右の写真）

空海は平安初期の804年4月に出家得度し、同年7月遣唐使・藤原葛野麻呂に従って唐留学に出発、福州を経て



12月に長安に到着した。長安に旅立つ前50日ほど、湧泉寺の前身であった寺に滞在したと言われている。

回龍閣（前頁地図参照）を右に見ながら進むと、羅漢泉の清水は周りの影を映し、一瞬、湧泉寺の名前に名状し難い感慨を覚えた。（右図は湧泉寺平面図）

いよいよ境内に入ると、大腹笑面をした弥勒菩薩を祀った天王殿があり、その前に有名な「千仏陶塔」が左右に二つ立っていた。

何の変哲もない鉄塔のように見えたが、近寄ってよく眺めると、その名の通り陶器の塔であった。高さ凡そ7m、構造は八角9層、陶土を焼いて1層ごとに重ね合わせたもので褐色をしている。（右の写真は千仏陶塔）

北宋の元豊5年（1082）の銘があり、今の湧泉寺では最も古い歴史文物となっている。さらに観察すると各層の周囲を陶土で造った高さ10cmほどの小さな仏像が取り巻いている。

その数は1塔に1038体、両塔合わせて2076体にもなる。しかも仏像は一つ一つ表情が異なり、信者は自分の気に入った顔の仏様に願いをかけるのだと言う。この千仏陶塔は中国でも珍しいもので、人々の厚い信仰を集めている。

塔は仏像の外に武将が72体、陶器製の鈴が72個、各層の座上には蓮花、舞獅子、侏儒（こびと）が飾られ、工匠の名前が刻まれていた。

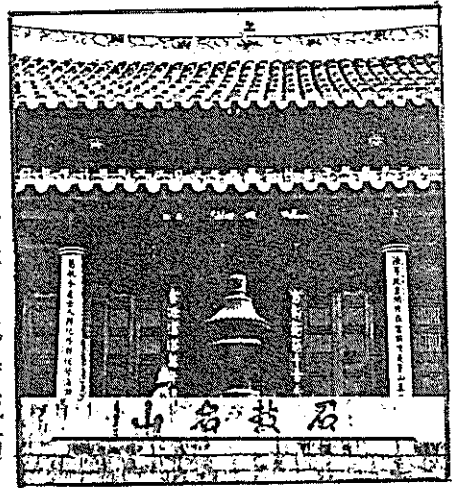
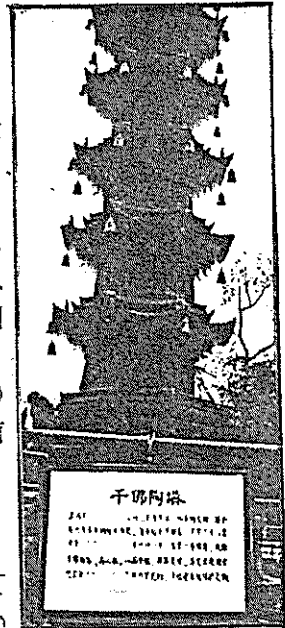
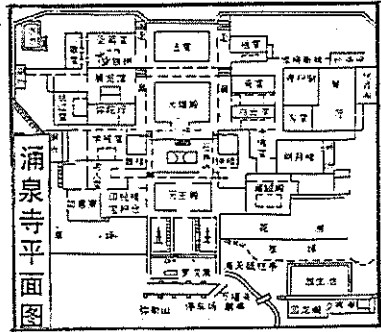
この塔は福州郊外の瑞龍寺内に放置されていたものを、1972年に湧泉寺に移したもので、宋代建築を実証している。

天王殿の後方正面に大雄宝殿、右に鐘楼、左に鼓楼が建っている。広い中庭には豊かな色彩をみせている花が植わり、高い石壇の上に建つ大伽藍の中心・大雄宝殿には、釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来の三世仏が祀られていた。（右の写真は大雄宝殿）

大雄宝殿の裏側の正面は法堂、左が箭堂、右が閻王を祀る祖堂である。また天王殿の右後方の藏経殿には経典2万冊のほか、インド及びビルマから贈られた仏典7冊、血書の経典657冊が蔵経されているという。

この上もない最高の善を尽くし美を尽くした湧泉寺は、克明に私の記憶の中に刻み込まれた。寺の参観が終わった一行は、右手の老樹が鬱蒼と茂る峰に吸い込まれて、鼓山の霊気を感じながら石段を登って行った。

森の強い精気が満ちた峰は日中とはいえ薄暗く、その中に険しい坂道が屈曲して続き、湧泉寺を囲む鼓山に魂が浄化されるような自己陶醉に陥りながら岩道を進んだ。



峻険な急坂を登攀していくと其処の絶壁に、「寿」の摩崖石刻が朱く染まっていた。参拝者が願いを込めて自分の長寿を祈願したのであろうか。私もそれを思う年齢に達したことに、はっと気が付いた。(右の写真)

「寿」の元来の意味は「帰ることを忘れる」ということであり、本当にそのような無心に達したいものである。

「寿」の2文字を眺めていると、「本来無一物」という仏教の言葉が思い出された。世の中のすべてのものは実際に存在するものではなく、みな謂わば幻想であると云う意味であらうか。

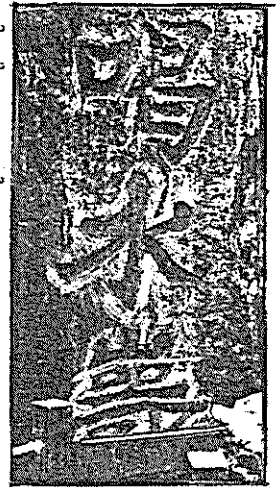
人の言動は其の人の人格が反映されていると痛感するのであった。

足元に注意しながら懸崖に沿った岩道を行くと、そこは「霊源深処」であった(前頁地図参照)。高さ30m以上もある樹齢千年の古楓樹などの大木が鬱然として繁り、「南無阿弥陀仏」を始め300幅にのぼる摩崖石刻群が見えていた。まるで天笠に入ったような感じを与えている。

霊源深処に続く大洞穴の岩石には「喝水巖」と彫られていた。伝説によると約1000年前、鼓山の開山の祖が此処で座禅読経をして大喝一声すると、そこに道が開けて岩間から水が湧出したという。このことから「喝水岩」と名付けられたのである。(右の写真が喝水巖の摩崖石刻)

鼓山の見学は喝水岩を最後にして引返し、真っ直ぐ南下して山を下った。すると其の参道もまた無数の石刻群で埋め尽くされている。仏典の摩崖街道は実に壮観で表現の言葉も知らないほどであり、霊の宿る雰囲気は自然に合掌の心を起こさせるのであった。

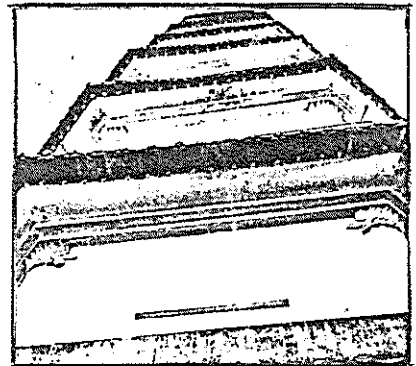
湧泉寺は日本の真言宗の開祖・弘法大師空海の縁の寺ということで、高野山からの参拝者が多く、感激を新たにして湧泉寺と鼓山の参観を終えたのである。



于山・烏山 (43頁地図参照)

鼓山・湧泉寺から福州市街に引き返すと、目抜き通りの温泉街には近代高層建築が林立し、どこことなく明るい感じがしていた。福州は観光立国を目差し、年間40万人の観光客があり、台湾や華僑が主体で日本人客は約2万人だという。

バスは閩江古街の狭い通りで停車した。北側に白い塔が聳える山門に入ると、于山の由来が刻まれている「報恩定光多宝塔」の石碑が立っていた。



于山は道教の山で白塔は俗称である。木造の7層8角の塔は高さ41m、寺院の創建は唐の天祐2年(905)、明の嘉靖13年(1534)に落雷のために焼失し、同27年に4分の1だけ再建され、開放後に重修したものである。

白塔の南に明代の民族的英雄「戚繼光」を祀った「定光塔寺」があり、白塔にも定光塔の扁額がみえていた。(前頁の下の写真は白塔の一部)

前記したように伝説によると昔、何氏の兄弟9人が不老長寿の薬を作り、仙人になるために修業した所だと伝えられている。山頂に立った眺望は福州市街を鳥瞰する絶好の地で、和寇の来襲に備えた狼煙台がここに設置されたのも嘘ではなさそうだ。

標高58.6mの山頂に建った白塔は登上する時間がなく、西方の烏山(標高86m)に相對峙して聳える塔を眺めて于山を去った。

林則徐祠堂

福州と言え、国の運命を左右した重要な人物の「社稷の臣」・「林則徐」が想い浮かぶ。

彼は悪道非道、暴虐の限りを尽くした英国のアヘン政策に対し、責めを一身に背負って颯爽と登場した先駆的な人物である。

今次の福州訪問の最大の目的は林則徐祠堂の参観であった。「桃李もの言わず下自ら蹊を成す」、即ち、優れた人には何もしなくとも、人が自然に集まってくるという言葉の通りだ。

バスは烏山のすぐ北側にある林則徐祠堂の前で停車した。然し乍ら昼食時間のため閉門して拝観は許されず、何という不運であろうかと慨嘆していた。

この時、我々の強い希望を汲み取った通訳の趙氏は、自発的にサービスと交渉して承諾を受け、入場券が配られた。開いた口に牡丹餅というか幸運に恵まれ、私の胸中は夜が明けた時のような境地であった。(上の写真は祠堂前に立つ石碑)

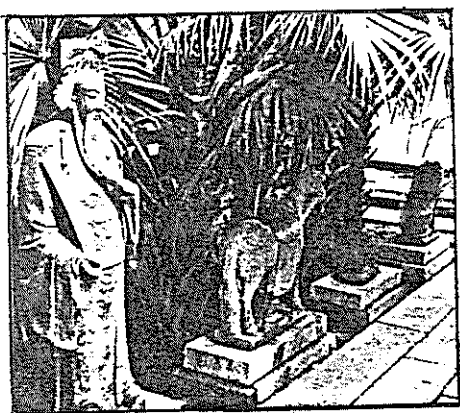
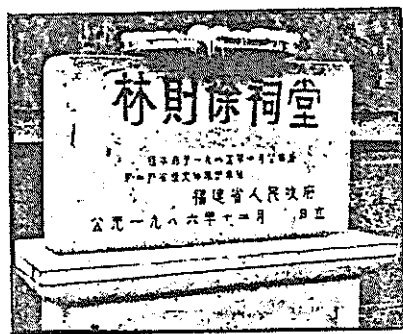
赤く塗られた囲壁には「林文忠公祠」をはじめ、「中興宗襄」「在海偉人」などの石刻が、金文字で刻まれていた。

華麗な街の一角に静かに祀る林則徐祠堂、長年の垂涎の的だった堂内に襟を正して入った。

堂内の参道には皇帝や偉人を祀った社と同様に、小型ながら文官、武官の像をはじめ石獸が両側に並んでいる。(右の写真)

中国の現政権にとっては「黄泉の障り」の人物は、利用価値が大とみえて鄭重に祀っているようであった。

祠堂の殿宇の正面に鎮座する林則徐の像は、外面は菩薩のように優しく内心は夜叉のように見受けられる。大敵を怖れない岩のような信念の人に対し、一掬の涙を禁じ能わずという心境で黙礼した。(次頁の写真は林則徐の像)

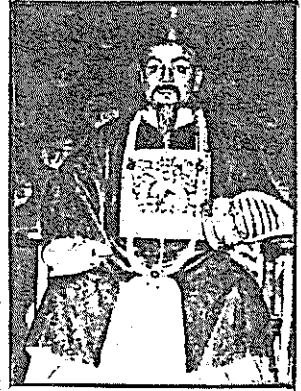


彼の夢は東洋民族の夢であり、特に中国にとっては大きな節目になったのであった。

堂内にはアヘン戦争のイギリス軍に立ち向かう戦闘集団を始め、各種の写真が掲載されていたが、「盤根錯節に遭いて利器を知る」と云うことを啓蒙しているようである。困難に出合って初めて真の値打を発揮する、「疾風に勁草を知る」の生きた教訓であった。

春秋に富んだ時分には彼のような人物に憧れたが、年老いた現在では烏有に帰してしまった。太平に慣れた日本の政治家達も彼を亀鑑とすべきである。

「来を知らんと欲する者は往を察す」の字句の通り、将来のことを考える時には必ず過去の歴史を研究する必要がある。そのために彼の歴史に就いて以下、記述する。



林則徐とアヘン戦争の概要

林則徐は1785年夏、福州市閩江県に生まれ、27歳で科挙の試験に及第して進士となり、江蘇巡撫、湖広総督等の役職に任命され、平穩無事の時代であっても実務官僚として史上に名を残している。

アヘン問題が深刻になったとき、清朝の道光帝は各地の総督、巡撫、将軍たちに其の対策を下問した。その中で最も優れた答案を提出した者を欽差大臣（特命全權大使）に任命し、この問題の解決に当らせることになった。

答案の第1席が当時の湖広総督であった林則徐であった。武昌（現・武漢）から北京に赴いて欽差大臣に任命され、問題の渦中の中心である広東に向かった。

清朝がアヘンを問題にしたのは国民の健康を憂慮したよりも、経済問題、ひいては治安問題として放置しておけなくなったからである。

アヘンは明時代から輸入されており医薬品として用いられていた。それが嗜好品となったのは清代になってからである。それまで一部の人達はアヘンを楽しんでいたが、19世紀に入ると俄かにアヘン吸飲の悪習が一般に拡がった。

イギリスの東インド会社は1780年にベンガル（インド）のアヘン専売権を得て、清国へのアヘン輸出に力を入れるようになった。それまで東インド会社は清国から茶を買ったが、見返りに売るべき商品がなかった。

イギリスにとっては入超となり、バランスをとるためにアヘンに注目した。アヘンを吸えば寿命が延びるといった宣伝もしたらしい。

清国は乾隆帝の黄金時代を過ぎて退廃期に向かっていた。人口の爆発的な増加で生活は苦しくなり、現世の苦難から逃避するためにアヘンが最も適したのであろう。禁止令が出ても賄賂が横行して効果があがらず、人々は公然とアヘンを吸い、その悪習は軍隊にまで及んだ。

アヘンの輸入量は増大の一途をたどった。1821年は4770箱（1箱60kg）だったのが1825年には9066箱、1833年には2万箱を越え、アヘン戦争直前の1838年には2万8千箱という数字になっていた。

これは東インド会社の報告で、トルコ産やイラン産のもの、インド産でもポルトガル商人の手を通じたアヘンは含まれていない。そのため1838年には4万箱を越えたと云われている。

これを中国の銀（当時の中国は銀本位制）の単位の両に換算すると約千5百万両に当る。当時の清朝の1年の歳入が4千万両であったから、アヘン代金が如何に巨額であったかが判る。

清英間の貿易はイギリス側にとってはアヘンの輸出で解決されたが、清国にとっては甚だしい入超となった。茶の輸出代金よりもアヘンの輸入代金の方が巨額になった。決済は銀で行われていたから清の銀は大量に流出した。そのために銀価格は高騰し、銀価が高くなると実質的に増税となった。

アヘン問題は経済問題と治安問題になり、朝廷では嚴禁論と弛禁論に分かれた。そこで前記したように各地の長官や将軍にアヘン問題解決の答案を提出させたのである。

嚴禁論の4人の中で林則徐の案が第1席に推薦されたのは、禁止の方法が他の者より具体的であったからだろう。1年の猶予期間を4期に分け、アヘン吸飲者で1期に自首した者は罪が赦され、2期3期と次第に罪を酌量した。1年を過ぎると吸飲者だけでなく、アヘン吸飲所をひらく者、販売する者、器具を製造する者まで死刑にするというのである。

欽差大臣に任命されて出発の時、彼の友人に向ひ「死生は命なり成敗は天なり」と言って涙を流しているが、彼の決意の悲壮なことが窺われる。

「アヘン戦争の発端」

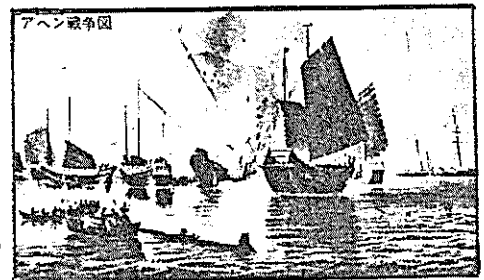
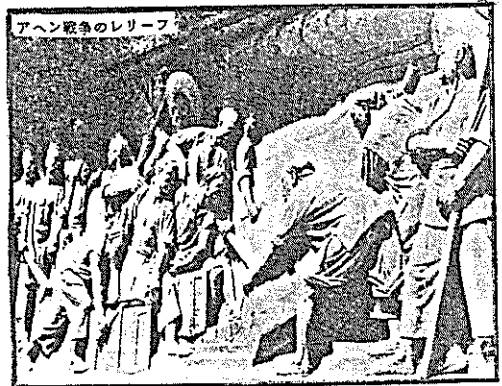
彼が広東に着かない前から林則徐の命令は飛脚によって伝えられ、アヘン商人の大量逮捕が行われていた。広州に到着して直ぐ2つの通達を出した。

その内容は外国商人たちは手持のアヘンを悉く供出し、「これから永久にアヘンを持ち込まない。持ち込めば死刑にし、貨はすべて官に入れる」という誓約書に、サインせよというのであった。

不退転の決意を表明し、期限をきめてアヘンの供出を命じた。しかし期限内に供出も誓約書も実行されなかった。そこで英商デントの逮捕を命じた。本当は最大のアヘン商人のジャーディンを逮捕するつもりだったが、彼は林氏の広東到着前にイギリスに帰ってしまった。（上はアヘン戦争図）

イギリスは海軍大佐エリオットを駐清商務監督に任命していた。マカオにいたエリオットは急いで広州に戻った。広州には長崎の出島のような1画があって、人々は夷館と呼んでいた。（右はアヘン戦争図）

期限が過ぎても林が行動を起さなかったのは、エリオットの帰りを待っていたのである。林は夷館を包囲して再び通達を下した。



期限が過ぎてもアヘンの供出されないので、停泊中の外国船に「封鎖」を行うというのである。即ち貨物の積み卸しを一切禁じた。

夷館には275人の外国商人がいた。長崎と同じく婦人の在留を禁じていたから男子ばかりであった。中国人使用人はすべて夷館を立ち去った。水も食料もストックは余りなく、包囲は48時間に及んでエリオットは遂に屈服した。そしてアヘンの供出を約束し、林則徐の勝利となった。

アヘンのストックは2万283箱、没収されたアヘンは1425トン、これを水路で北京まで運ぶ予定を立てた。北京からは文武官員を率い現地で焼却し、それを公開せよとの命令が届いた。

油をかけて焼却するテストをしてみると、焼却後の土から2～3割のアヘンが採れることが判明した。そこで50m四方の人工池を2つ掘って周囲に板を打ち、底に石を敷いてアヘンの浸透を防ぎ、海に面した方に水門を造って反対側に溝道を造った。

人工池に大量の塩を投入してアヘンをそこに半日ほど浸し、消石灰を入れると煙を吹いて沸騰するようになる。人工池の上に板を渡して人夫たちが棒で掻き混ぜるとアヘンは溶解し、引き潮時に水門を開いて海に流した。

「戦争の結果」

アヘンの供出と消滅は実施できたが、イギリス商人たちはエリオットの命令で誓約書にサインすることを拒否した。こうして問題は残り、イギリス商人たちは抗議のため広州を去って洋上に浮かんた。そして九竜で村民を一人殺したことで問題はさらに紛糾した。

ロンドンでは広州を追われた商人たちが、パーマストン外相に清国の^{アヘン}腐敗を働き掛けた。アヘンを没収された恨みは深かったのである。こうしてイギリスはアヘン貿易保護という不義の目的のために遠征軍を送ることになった。賛成271票、反対262票という僅か9票の差で可決され、イギリスは歴史の汚点となつた不義のアヘン戦争に踏み切ったのである。(1839年で我が国の天保11年)

2年間も続いたアヘン戦争の経過については書くまでもない。イギリス艦隊は林則徐たちが防備する広東を素通りして舟山列島(杭州湾沖の列島)を占領し、さらに北上して天津に向かった。北京は震撼して皇帝は動揺した。朝廷の保守派の大臣たちは皇帝を説得して林則徐の欽差大臣を解任した。

1841年に和議したが同年破棄されて再戦となり、英軍は虎門、呉淞、上海、鎮江、南京を占領して1842年8月、南京条約が成立した。これによって香港の割譲、5港の開港、賠償金支払などを規定し、43年の虎門条約では治外法権が追加された。これは中国最初の開港条約で英国の対中優先権が確立し、中国の半植民地化の発端となった。

1841年、新疆に左遷された林則徐は将来、中国の憂慮となるのはイギリスではなくロシアだと説いたが、全く其の爛眼には感服させられる。1845年に新疆から帰還が許され、太平天国の乱の時に再び欽差大臣に起用された。故郷の福州から潮州(現在の泉州)に向かった彼は其処で病死した。享年65歳。

中国で尊敬する人物を5人あげよと云われると、林則徐は必ずその中に入ってる。明日を知らぬ世に乾坤一擲、国に身を捧げた彼の祠堂に参拝できたことは、今次旅行の価値を一段と高らしめたのであった。(彼の孫は現在、福建省副主席である)

隠元禪師の里

我が国に「いんげん豆」を輸入、普及させたことで有名な隠元禪師（1592～1673）は福州の出身である。

彼は29歳の時に普陀山（舟山列島）で観音の啓示を受け、黄檗山で禅道を極めた。隠元禪師の来日は1654年の承応3年で日本は既に鎖国に入っていた。將軍家綱の招きによって来朝し、京都・山城の宇治の地を授かったのである。

彼のもたらした教えは閉鎖的になっていた日本仏教に清風を吹き込んだ。禅は大陸に於ては既に念仏化しており、彼の禅も念仏禅である。

戒律を堅持する宗風は異国情緒と相俟って日本に広く普及し、京都・宇治郊外にある本山の山号「黄檗山」、寺名の「万福寺」は何れも故地の名をそのまま受け継いだのであった。

私は過去2回、チーク材で造った黄檗山に参拝して禪師の伝記も拝読したことがある。福州を訪れた機会に詳しく知りたいと福州の通訳に尋ねたが、今の若い通訳たちは全く知らず残念であった。

福州～泉州

林則徐祠堂を後にして北京飯荘で昼食を摂り、バスは14時に福州を発って西南方約20kmの泉州に向かった。福州市街で我々の眼を引き付けていたのは乞食の多いことと、マネチェンジを執拗にせがむ光景であった。経済が豊かになったように見えて失業者が多く、自国の通貨を信用しない状態は忌々しいと言わねばならない。



閩江河畔にキリスト教会の十字架が空高く聳えていた。その横通りにナショナルの洗濯機を運びリヤカーの姿が眼に止まったが、「豪民富賈」とでも表現したらよいのだろうか。金持ちの商人が儲けて貧民が苦しむ世相を、社会主義を標榜する為政者は如何に考えているのだろう。

途中、福清県の漁溪華橋大廈で休憩となって停車すると、大勢の砂糖黍を売る農民が押し寄せてきた。農民の押売りは他の地方では見慣れない現象で、商魂が逞しいのか生活が苦しいのか、さっぱり分からない。目の前に控えた台湾の影響であろう。

気候温暖なために麦は早くも穂を出して特徴のある緑をなしていた。その畑の中に割合に清潔で豪華な墓地が見えている。一方、農家の屋根の造りは寺院の屋根のように反っており、福建海岸の家屋は独特の建築美を呈している。矢張り大陸は広大で省の中でもこれだけの変化があるようだ。

泉州街道の輻員は広がってバスは快走した。泉州の市街に近づくにつれて土木工事が盛んに行われ、水の利用度が多い性が珍しく水道橋が延々と続いていた。

行く手の緑は固有の色ににぶく輝き、変化する別次元の風景を楽しみながら市内に入り、市の中心部に構えた金泉酒店に到着したのは18時である。

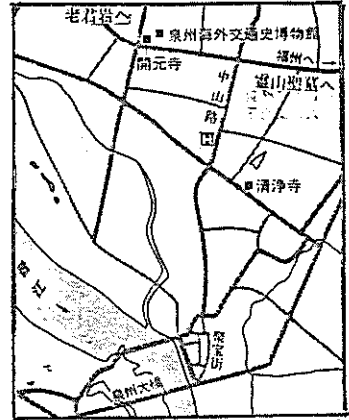
群青の空に光る満天の星、月の惱ましげな光を浴びた商店街は我々を手招きしてい

るようで、食後のつれづれに莫逆の友となった円城、富岡、渡辺氏らと散策に出掛けた。

古くは沿岸第1の街として栄えた商店街は昔の面影を残し、櫛比した店頭には鐘乳石を始めとして幻のような逸品が並び、店員の屈託のない笑顔に引きづられて店の中に入った。

高嶺の花のような逸品の中に合縁奇縁というのか、武夷山の天遊観で見た竹の面も見えていた。武夷山だけでなく福建省全体が竹の産地だろうか。商人の彼等が武夷から仕入れたものに違いない。

茶を筆頭にした漢方薬は、恋の病い以外は万病に効くとばかり陳列されていた。御土産店の数といい品物の豊富さから言っても中国有数の商店街で、「家給し人足る」、世の中が安定して人の心も豊かで満ち足りている状態は、昼間眺めた農村とは雲泥の差であった。



泉州の概要

泉州は晋江下流の北岸に位置し、1300年以上の古い歴史がある古城で、現在の人口は577万（市内は20万、中国では市の下に県がある）である。

古城が鯉の形に似ているから「鯉城」という名称があり、また古城の周りに刺桐樹が植えられているので「刺桐城」とも呼ばれている。そして気候が年中温暖なために「温陵」という雅称もある。

2000年ほど前すでに古越族人が此処に住んでいた。泉州は唐の開元6年（718）に建設が開始されたが、港湾に恵まれていたから唐、宋、元、つまり7世紀から14世紀にかけて、海外交通は大発展を遂げた。

宋、元代の海上交通は唐代を更にしのぐものがあつた。アラビア、イタリア、インド、東南アジア、日本など貿易船で賑わい、ここからシルク、陶磁器、茶などが積み出され、香料、貴金属などが持ち込まれた。当時はアレキサンドリア港と並ぶ世界の二大貿易港であった。

現在もそうした歴史を引き継いでいる。バラモン教（婆羅門教、インド古代のバラモン族の宗教）、イスラム教、キリスト教、ヒンズ教、マニ教（摩尼教、3～14世紀に欧亜両大陸に拡がった宗教で、ペルシア人のマニが教祖）などの外、中国の仏教、儒教などが混在して当時の華やかさを匂わせている。

マルコ・ポーロも此の港より帰国し、その「東方見聞録」には「第二のヴェネチア」と記してある。そして外国人にはジャンフー（唐代）、ザイトン（元代）などと知られており、今日市内に遺された遺跡には嘗ての国際都市の面影を見ることが出来る。

繁栄した泉州湾は晋江から流れ出た泥が堆積して年々狭まり、水深も浅くなる一方であった。こうした自然条件が国際貿易港の泉州を過去のものにしてしまった。

外来文化の多大な影響を受けて豊かな泉州が誕生し、我が国の「堺」を中心にした泉州の名称も、この泉州から生まれたのであつた。（現在、両泉州は姉妹都市を締結）また17世紀には御朱印船の商人が移り住んで日本町も作っている。

泉州の市街は昔のままの姿を留めて道路は狭く、市内には路線バスが走っていない状態だ。庶民の足は専ら自転車と自転車の後ろにリヤカーを付けた3輪車(リntax)である。

一行は金泉酒店からリntaxに分乗してホテル近くの清浄寺へと走った。現在でも未だ2万人のアラブの人達が居住しているという街並には石畳が敷かれている。(右は清浄寺前の通り)

靴、鞆、衣類などを扱う店の並ぶ通りは臭気が漂い、懐かしい支那町を思い出させてくれた。

全体的に中世の面影を残した落ち着いた道路に、青みを帯びた城壁のように高い煉瓦の塀があり、その大門の横にアラビア語で書いた清浄寺の石碑が見えていた。

泉州の対外交流の歴史を伝える重要な宗教史跡のイスラム寺院が、清浄寺であった。

創建はイスラム暦の400年、北宋の1009年であり、中国に現存する最古のイスラム寺院の一つである。高さ4m幅4、5mの大門は独特なイスラムのドーム型であった。

湾岸戦争の余燼もさめない時でもあり、敬虔な態度で肅々と中にはいった。正面に朱塗りの木造建築が建ち、現在の中国式の本堂が礼拝堂になっていた。偶像禁止のイスラム教では礼拝時以外は深閑としている。

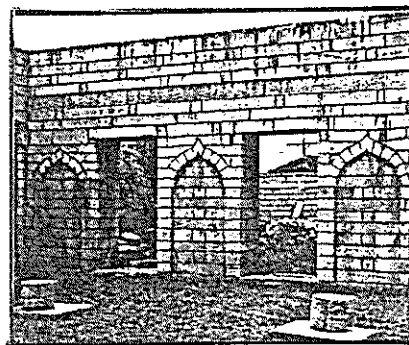
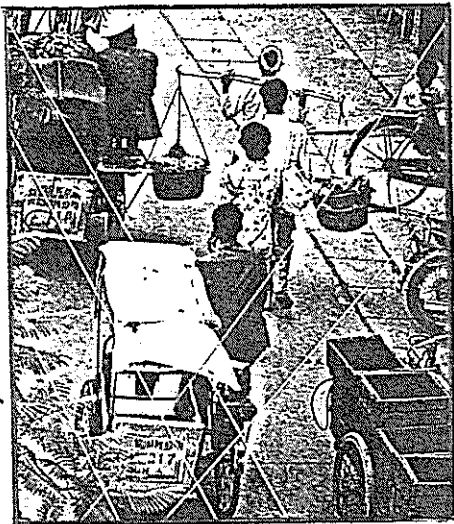
漢化されている寺の正面玄関には「認主独壹」の扁額があった。この意味は神はアラーただ一人というコーランの教えである。つづいて掲げてある「万殊一本」の扁額は、いろいろに異なっていることを一つにすると云う意味であろうか。

(殊は決める意味) (右は認主独壹の扁額と玄関)

三方を白い壁で囲まれた堂内は狭く、20人も入れば一杯になるだろう。正面の壁はアーチ型にくり抜かれ、そこにコーランをアラビア文字で刻んだ石板がはめ込まれていた。

往時の礼拝堂は現在の礼拝堂の左にあり、石造りの壁だけが遺って屋根はなく、メッカの方向の壁は明瞭に窪んでた。(右は昔の礼拝堂の遺跡)

明の永楽帝の「イスラムの教えを敬わなければならない」と言う直諭も石に刻まれ、貿易の発達はアラブ人の保護に通じる歴史の跡が感じられる。

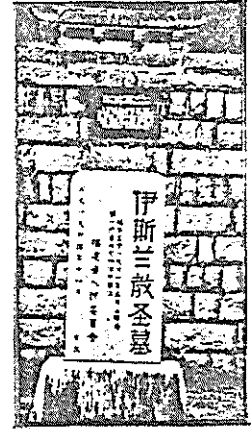


霊山聖墓と碧玉毬 (51頁地図参照)

小さな清浄寺の参観は忽にして終わりを告げ、昔栄えた泉州の金満幻想のように寂れた街を、ホテルまで散策しながら帰り、踵をかえす間もなく福州街道を霊山聖墓にむかった。

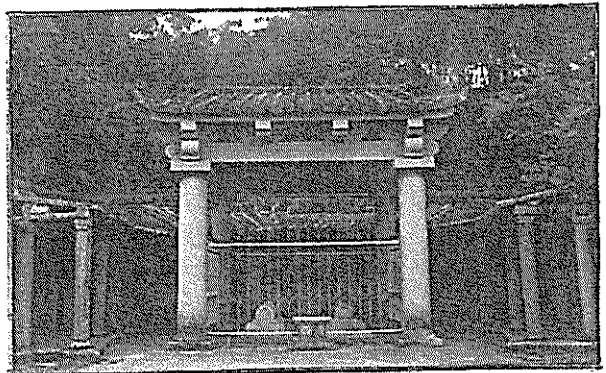
基督教会(プロテスタント)や天主教(カトリック)の建つ市街は、貫禄というか伝統というか、かつて栄えたものは衰えたとはいえ、昔の栄華の跡を留めていた。

この世の中は作られたものだから移り変りは当たり前だと、有為転変の景観を楽しみながら郊外に出ると直ぐ、青松に覆われ翠柏の生えた丘の中腹で下車した。そこがイスラム教の聖墓(伊斯蘭教聖墓)であった。第一印象は至福の楽園のような感じがしていた。(右の写真は伊斯蘭教経墓の標示の石碑)



この聖墓は現在に遺っている最古の一つである。墓室は方形の石造りで、その墓室に入っている石棺は蓮花の石刻で装飾され美しく頑丈なものであった。石の産地だからか、附近の住居も塀垣も路面も石造りだ。

広大な土地に点々とある墓は石の回廊で連なり、廊柱もイスラム独特の型式であった。(右は聖墓)



唐の高祖(618~626)時代に始祖マホメットは4人の賢人の弟子を伝導のため中国に派遣した(問書による)。1賢が広州、2賢が揚州、3賢と4賢が泉州に来ている。その賢人が亡くなってから此の丘に葬られた。3賢は沙土謁、4賢は我高仕と称したが既に1300年の歴史がある。現存するイスラム世界の中でも霊山聖墓のものは最古だという。

唐代に建てたものを1322年(イスラム暦722)に修繕し、康熙3年(1644)には5度にわたって墓を重修して保存している。朝廷はそれだけイスラム教徒を保護したのである。

聖墓の回廊に「鄭和行香碑」が見えていた。これは明代の著名な航海家の鄭和(7回も世界航海した人物)が、第5回目の西洋航海の途中に泉州に立ち寄った時、この墓にきて線香を立てて祈願したことを記載している。イスラム教徒の波乱万丈の生活の一端に触れ、往時を想起しながら次へと進んだ。

聖墓の右前方の豁然として開けた所に、独立した一つの巨石が巍然として台形の岩石の上に乗っていた。

度肝を抜くような大石は「風動石」とか「碧玉毬」と呼ばれる数10トンもある巨石であった。

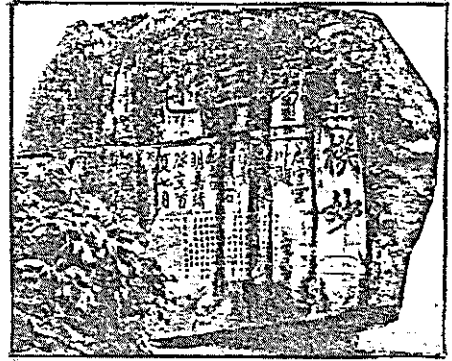
石の正面の上部には碧玉毬、右側には縦に「天然機妙」と明の嘉靖年間に書いた石刻があり、大自然の造化のままで驚嘆に値すると言う意味を表現している。

この碧玉毬は台風や地震出も倒れず、又、少しも動かない。しかし人間の力を加え

ると少々だが動くという不思議な石らしい。

一行は次々と巨石に肩を押し当てて力を入れると、巨石の下に差し込んだ木片との間に隙間が生じ、石の動くのが明瞭に判るのであった。誠に不思議な石である。(右が碧玉毬)

見晴らしのよい丘の上から泉州市街を眺めて昔のこの街の歴史を思い浮かべていた。往時の先進地も今では人工が加わり、ナマの自然が満喫できなかったことは少々寂しい気もしていた。

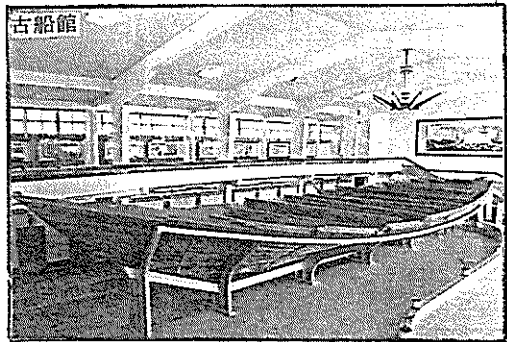


泉州海外交通史博物館 (51頁地図参照)

バスは丘を下りて市内の開元寺北側に建ち、大帆船の形をした近代建築の広場で停車した。これが泉州海外交通史博物館で、海外交通史石刻陳列館、泉州湾古船陳列館、泉州陶磁器陳列館などが含まれている。

先ず1976年に泉州湾内で宋代の木造船が埋まっているのが発見され、これを掘り上げて展示した古船陳列館に足を運んだ。

伝統造船技術と文献によって復元された船体は、船長34m船幅9mの巨大なものであった。(上は掘り上げた宋代古船)



全体に扁平な船体で船倉は隔壁によつて13に仕切られ、側板は3層、底板は2層になっている。これはマルコ・ポーロの船と同様だということから、宋代の造船技術は世界の最高水準だったと思われる。

この船こそ海のシルクロードの出発点が泉州であることを証明しているようである。

歴史を繙くとこの船は南宋と元が戦った時代の商船であるらしい。1276年、南宋の首都・臨安(現在の杭州)は南下してきた元軍によって陥落した。南宋軍は幼い端宗を奉じて福州に逃れたが、元軍の急追によって更に泉州~広州へと後退し、南海の島々を転々としたのであった。

当時の泉州は大混乱に陥ってパニック状態となり、港に停泊していた船の乗組員は船を捨てて逃げ出したのであろうと、船体を眺めて想像を逞くしていた。

船の中から発掘された遺物も陳列されていた。香料、薬物、木札、銅銭、陶磁器、皮革製品、動物の骨など多様に及び、貴重なものばかりで其の価格は計り知れない。

博物館の2階に摩尼教の石碑が展示されていたが、これは私にとっては初めてのことで新知識であった。摩尼教に就いては一部は51頁にも記述した。「摩尼教」は古代イランのゾロアスター(660~583BC)によって創唱されたゾロアスター教に仏教、キリスト教の教理を加味した宗教である。

摩尼教は自然界の光明と暗黒が靈界の善と悪に対応し、現在の善悪混乱から未来の光明と善の世界を祈求する自然教で、菜食、浄身、祈祷が特徴だと言われている。

2階には又、海のシルクロードによって運ばれたイスラムのコーランを始め、世界

各国のものが展示されていた。これらからイスラム教のアラビア人、ペルシア人、キリスト教のイタリア人、アルメニア人、ヒンズウ教のインド人など、多彩な国の商人が溢れていた泉州が想像される。

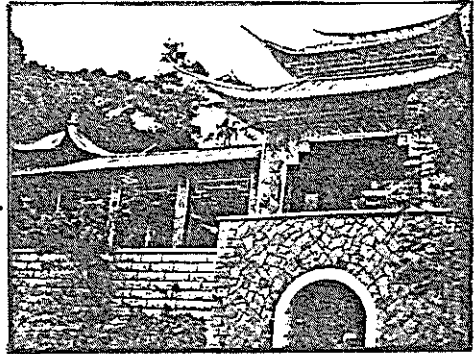
復元船の背後の壁に描かれた画は、宋代の詩人が泉州を詠んだ詩「潮海声中万国商」をもとにして描いたもので、海のシルクロードの起点・泉州を一段と印象付けていた。

老君岩 (51頁地図参照)

古船博物館から市街の北方3km、清源山の中腹にある老君岩へと走った。清源山は3峰が轟立して氣勢は雄大、山間に流泉飛瀑が多く別名を泉山と呼んでいる。泉州の名はこの泉山から名付けられたのであった。

清源山には老君岩、千手岩、弥陀院岩、碧霄岩、瑞像岩、清源洞などがあり、摩崖石刻は500という霊山である。

我々は緑の松柏の中に建つ山門の前で下車した。山門の造りは珍しく全て竹で造られ、自然に孤高のような他と懸け離れた感じを与えていた。特別な愛着が蓄積する竹の建築美は老君岩の情緒を漂わせている。(上の写真は竹で造った山門)



視野に入る多くの中で一際目に付いたのは、自然の大石をそのまま利用して造った老君石像であった。

この石像の老君岩は高さ5.1m、幅7.3m、厚さ7.2m、宋代の石彫芸術を代表する傑作で、福建省一帯に広まっている道教の信仰の対象となっている。その性が参拝者の影はあとを絶たない。

嘗てこの附近には道教の廟が集中して道教彫刻が数多くあったが、明代に破壊されて此の布袋さんに似た石像だけが遺されたと言う。(右が老君岩)

布袋尊は中国の實在の人物である禅僧の「契此」で、弥勒菩薩の化身とも言われている。その福德円満な顔相に自然に笑いが浮かんでくる。



老君は即ち道教の始祖で姓は李、名は耳、老子(604?~531BC)は後日に付けられた尊称である。宇宙の絶対的實在を無とし、無為自然の道を説き、後人がこれを集成して「老子道德教」とか「老子」としたのであった。

伝説によると老子は関谷関(河南省西部の関所)を出て東奔西走、武夷山を経て泉州に来たり、その幽奇な風景を賞景して洞に隠れ、化石となったと言われている。

老君岩像は上の写真のように左手を膝に当て、右手を脇息に置き、両眼は平視して両耳は肩まで垂れている。その安坐する姿は悦に入って入神したようで、これが無為自然・不老長寿を表わしているのであろう。

これも伝説だが、この中国第1の老子像の鼻にさわると102歳まで長生きするそ

うで、今でも参拝者の続くのはそのためであろうか。しかし4 mほどの高さの鼻に触れることは容易ではない。(以上は中国・華芸出版社発行の福建名勝書を参考)

開元寺 (51頁地図参照)

市内に戻って開元寺に詣でることになった。樹勢が盛んで豊かな緑の中に建つ東西2つの八角5層の石塔は、街の何処からでも見ることができる。将に泉州のシンボルであり刮目して眺めていた。(右は東西の塔の景観)

初唐時代にはこの地一帯は一大桑園であった。伝説によると唐の則天武后の垂拱2年(686)、桑園主の黄守恭が寺を建てると桑畑に蓮の花が咲き、満園は蓮の花で白雪のようになったと言う。それから寺名を蓮花寺と呼んでいる。

692年に興教寺と改名、705年に龍興寺と再改名、唐の玄宗の開元26年(738)に「開元寺」の称号を賜る。五代及び宋の時代に開元寺は最も繁栄し、120の支院が周囲に建っていたと言う。

元の22年(1285)に「大開元万寿禅寺」の称号を賜り、僧侶は1千名以上に及んでいた。又、開元寺は洛陽の白馬寺、杭州の靈隠寺、北京の広濟寺と共に中国の4大名古刹と言われた1つで、1300年の歴史をもっている。

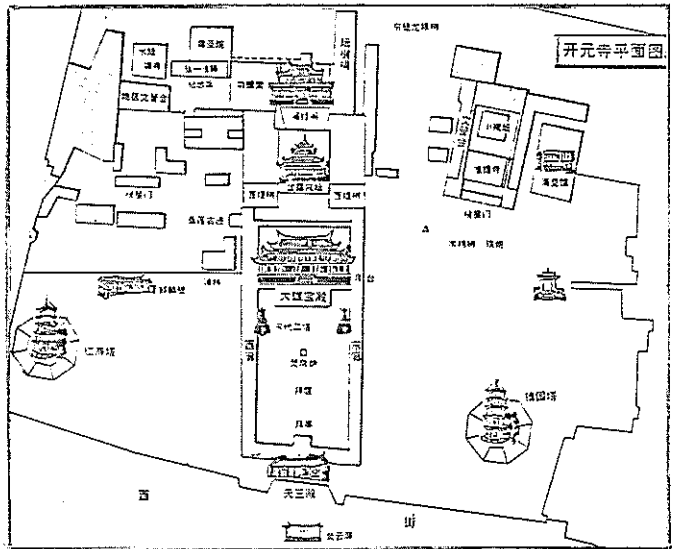
幸い私はこの4大名古刹を凡て参拝することが叶えられた。

バスを降りると紫雲屏の3文字の石刻が眼に留まった。これは明の万曆の1576年に建立したもので高さ6m、幅15m、厚さ0.86m。寺の建立時に紫雲が地を覆ったから大雄宝殿を紫雲大殿と名付け、屏を紫雲屏と称した。(上の地図の下部)

山門の天王殿は直径2mもある24本の大石柱が立ち、門の上には紫雲の扁額があり、鎧甲に拳をあげて憤怒した四大天王(四大金剛ともいう)像が、威風凜々と立っていた。坐高4.5m、体魄魁梧、相貌雄偉は開元寺奇観の第1と言えよう。

大雄宝殿の前庭の両側には120本の石柱の立った回廊が延びている。その腰の部分に青石のレリーフが彫られていた。それは伝説に出てくる巨人と怪物との葛藤の姿で、世界各民族の文化交流を表わし、この景観は開元寺奇観の第2である。

高さ2mの三足鉄香炉を前にした大雄宝殿は横約18m、奥行き12mもあり、正面に「桑蓮法界」の大扁額が燦然と輝いている。これは前記した通り桑園主の黄守恭が寺を建立したとき、蓮の花が一面に開花したからである。(次頁の上の写真)



大雄宝殿は別名を紫雲大殿と称し、御内陣には丈八もある金色の五方仏（五智如来ともいう）が、神秘的な荘嚴の中に安置されていた。

五方仏の間には観音、関羽、神将、梵天、帝釈の像が祀られ、これは開元寺奇観の第3ともいべき仏廟の世界である。

唐代に創建され明代に改修された大雄宝殿の中に、一段と光を放っているものが見えていた。それは百柱殿とも言われる大雄宝殿の、梁と柱のつなぎ目の斗拱部分にある24体の木彫の「迦陵頻伽」であった。

（右の写真が迦陵頻伽24体の1つ）

迦陵頻伽とは「妙音鳥」という意味のサンスクリット語（梵語）である。仏教で雪山または極楽にいると言う想像上の鳥で、妙音を発し聞けども飽くことがないと言われている。

開元寺の迦陵頻伽はみな人の顔と鳥の体をもっている。翼をひろげ鳥爪を両側に露出し、両手を前に伸ばし、琵琶、笙、喇叭、琴などの様々な楽器や文具を持っている。だから「飛天楽伎」とも呼ばれている。

この迦陵頻伽は中国の寺院建築の中では他に見ることはできない。実はこれも西方からの文化交流の影響を受けて作られたものである。

特に景教（キリスト教）の影響を受け継がれて作られたものが迦陵頻伽だと言う。

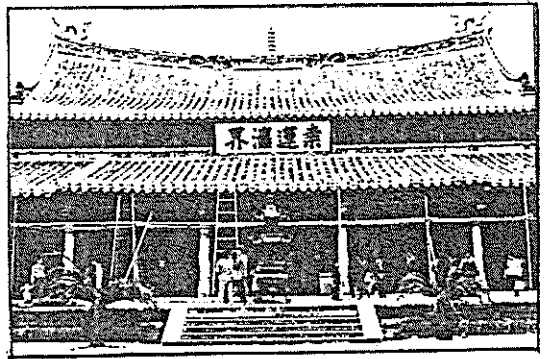
華麗な迦陵頻伽に見惚れていると、開元寺の中にいろいろな宗教が混在し、当時の遺物が紛れ込んでいたことが判る。

大雄宝殿の裏側の石柱にはヒンズー教の浮彫が施されていた。これは開元寺奇観の第4であろうか。（右の写真）

大雄宝殿の裏側の両角にアモイの南普陀山から移植してきた菩提樹が、傘のように繁っていた。直径3、5m、高さ13mの菩提樹は釈迦の悟道の樹らしく、我々の心を引き付けていた。

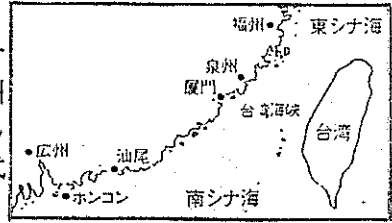
開元寺のシンボルと言われる双塔は、200mの距離をおいて東西に対峙している。唐代の創建当時は木造であったが、南宋時代に石塔に改建され、現存する石塔では最高である。

東塔を鎮国塔、西塔を仁寿塔と呼び、8角5層の楼阁式の花崗岩の石塔は高さそれぞれ48mと44mで、傾斜、変形もなく巍然として聳えていた。（福建人民出版社発行開元寺を参考）



泉州～アモイ (廈門)

往時栄えた泉州は時代と共に移り変わり、アレキサンドリアの百倍の船で埋めつくされていたという泉州は、かつての繁栄の姿を見せてくれなかった。しかし街の各所に遺跡を遺し、各人種が其れ其れの生活様式で暮らした雰囲気は感じられる。



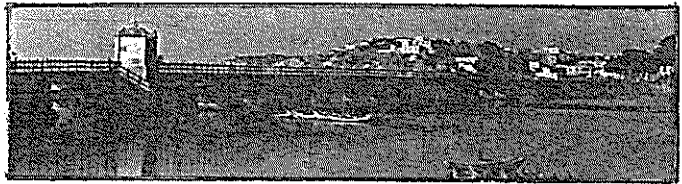
市の東部の荷香酒店で昼食を摂って泉州との離別の時を迎えた。眼底に焼き付いていた双塔は我々の旅の安全を約束するように聳え、14時に廈門に向かって快走した。

市街地を離れるにつれて残念に思えてきたのは、鄭成功記念館の見学が出来なかったことである。彼は主としてアモイを根拠地としていたが、泉州も彼の活躍の場所であり、案内図には明らかに記念館を掲示していた。



車窓から乗り出すようにして福建省独特の屋根瓦をのせた住居を写した。(右の写真) その静かな通りに学校帰りの子供たちや、昼寝をする犬、老人たちが家の前で談笑するのんびりした映像が見えていた。

注意して軒先を見ると細かい透かし彫りのある家が多く、やはり歴史の古い街並みであった。おそらく宋、元時代には古今東西の凡ゆる財宝を集めていたことだろう。そして外国人には固有の生活様式を認めた寛容さが、泉州繁栄の秘密の一つであったように思えてくる。



バスは晋江の泉州大橋を渡ると、橋の裾はジャンクの船溜りになっていた。ここが泉州で最も古い通りだろうかと、

数々の歴史を想い浮かべながら想像を逞うしていた。(上は泉州大橋)

郊外に出て大王松の生えた緑の並木街道を疾走した。畑には早や豌豆や空豆が実り、牛の放牧も盛んで農民は鍬で田を耕し、湾岸戦争もどこ吹く風と知らん顔のようだ。

廈門まで約100km、その間に椰子の樹あり、マンゴ畑が拡がって南国らしい風光を展開し、時間の経過と共に樹間から海岸線や島嶼が見え隠れしている。又、陽を浴びながら飛んで行くカモメの姿も眼に映っていた。

海岸線に建設中の高速道路を眺めながら、バスは幅員20mの鉄道と車道の併用橋を走った。(右の写真) この橋梁は華僑の投資によるもので、アモイ島はこの橋によって大陸と連なり発展したのであった。



台湾の投資が盛んなのか、「台湾人建設予定地」と書いた看板が立っていた。中国政府は台湾の資金を渴望するあまりアモイでは略字を使わず、台湾と同じように旧漢字を使って資本の誘致に懸命であった。これこそ、なりふり構わずと云うのであろう。

湾内に点々と浮かぶジャンクの影は物珍しい景観であった。早速カメラに収めると其処に「厦門高級住宅地」の売り出しの看板が眼に映った。その文中に永久の産権（使用権の意）を保証し、直系尊属への権利の譲渡は可と中国文で書かれていた。

同じ台湾海峡に面した福州や泉州では此のような光景は見られず、経済特別区に指定されたアモイならではの姿である。中国政府の台湾人や華僑に対する懐柔策は想像以上であった。

台湾を旅行しているような錯覚を覚えながら、17時にアモイ島の中心地に建った厦門賓館に到着、5号館で旅の疲れを癒して旅装を解くことになった。

陽は未だ高く明るい太陽に包まれた厦門、明の志士「鄭成功」の情熱を重ね合わせて待ち焦がれていた厦門、漸く辿り着いた喜びは一入であった。

アモイの概要 (右の地図参照)

厦門はアモイ島と鼓浪嶼島及び大陸側の集美学村（学園都市）からなり、総人口は106万、そのうち市区の人口は47万人で、半島の形を成している。

伝説によると昔、ここは白鷺の棲息地であったから「鷺島」とも呼ばれたと言う。明の洪武20年（1387）、外国の侵犯に抵抗するため、島に城と堡壘を築いたことから「大厝之門」（大きな家の門の意味）と呼ばれるようになった。これが厦門島の名称の由来である。

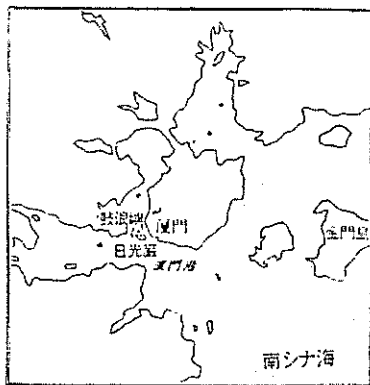
宋末に端宗がこの地に避難した歴史（泉州海外交通史博物館の項）は前記した通りで、この一帯は広東、福建省の海賊の根拠地であった。明代には重要な対外貿易港として発展し、特に明末には国姓爺として我が国に知られている鄭成功が、明朝回復の義軍を此の地に挙げて「思明州」と改名した。つまり明朝を偲ぶ意味である。1842年のアヘン戦争後にアモイは5港の1つとして開港し、歴史的にも国際的にも著名な街となった。

「海上の楽園」と呼ばれるアモイ島は小島で岩石累々とした蔴山が南北に連なり、一帯に長柵、砲台があって自然の要害をなしている。街の東区は昔のジャンク錨地、西区は商業地で日英両国の租界は海岸の枢要な地を占め、外国の建築が櫛比していた処である。

鼓浪嶼島は小島だが、「南国の楽土」と言われるほど美しいエキゾチックな島である。山青く水清らかで気候は温和、共同租界地は此処にあった外、英米仏日など13ヶ国の領事館、台湾富豪家や華僑の老後を楽しむ洋式別荘がひしめいていた。

近々まで台湾との葛藤のために観光客は途絶していたが、これも雪解けムードが高まって増加の一途をたどっている。1980年には深圳及び汕頭（広東省）と共に経済特別区に指定された。

現在は香港への客船だけでなく、シンガポールなどへの貨物定期便があって賑わい、他の都市と異なってカラフルな服装も鮮やかで、香港の風情に似て流行の先端を行っている。



3月13日 (水) 晴

アモイ観光 華僑博物館

厦門賓館で快適な一夜を過ごして
壮快な気分であった。このホテルの
前身はアモイ第1招待所し称したが、
1979年に拡大改装してアモイで
最高のホテルとなった。

館の前には「日月礁」という小山
があり、大きな岩が突出して「凌雲」
の石刻があった。また館内のロビー
に面して「一脈泉」と彫られた庭園
があり、花木が映って清幽な環境で
ある。(位置は右図の中央右側)

520床もあるホテルの中でも5
号館は国賓の部屋であり、上機嫌で
アモイの観光に出掛けた。

緩やかな曲線を描いて延びた異国情緒の溢れる通りを
走り、先ず誘導されたところがアモイ港の蜂巢山に建っ
た華僑博物館であった。(右は目抜き通り)

5層の建物は3階までは洋式、その上は楼閣式建築で
ある。3階の上に「華僑博物館」と書いた金文字の扁額
があり、全般に貴賓のある垢抜けした建物であった。

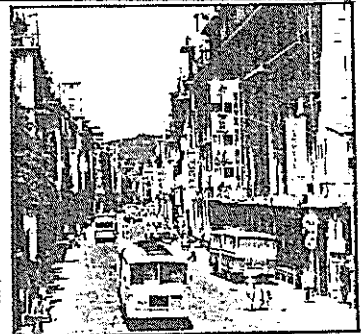
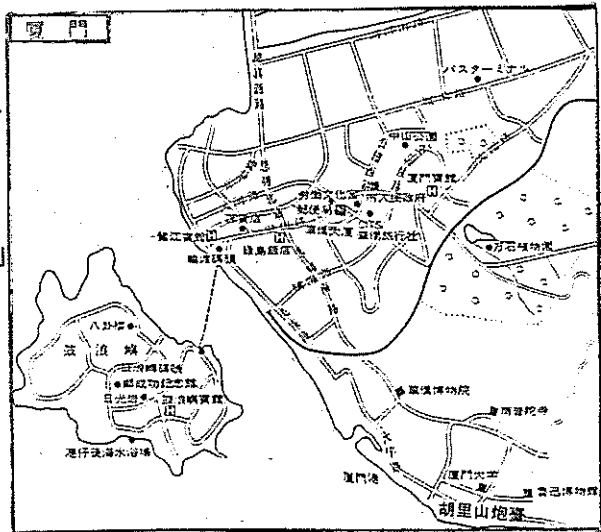
1956年、南方華僑の巨頭であった「陳嘉庚」が、
10万元を基金とし、その他多くの華僑が賛助して建築
したものである。

彼はゴム園を経営して成功し、孫文の革命運動を助け、厦門大学を創設して教育、
抗日を提唱した外、大陸側のアモイの町「集美学村」も彼が辛亥革命期に救国のため
に建設した学園都市である。

正面玄関には「華僑旗幟民族光輝」の金色の石刻を前にした彼の立像が、堂々と飾
られていた。精悍で恰幅がよく妙に存在感が溢れ出るような人物であった。

第1陳列館は華僑の歴史を紹介したもので、陳列品の数は約1200図片。第2館
は祖国の悠久の歴史と文化を反映したもの約2000点、銅器、磁器、書画、工芸品、
兵馬俑などである。第3館は自然博物館となっていて約1000点の鳥獣、海洋魚貝
類の標本が展示されていた。

大きく展示されていた日中戦争の写真に気分を悪くしながら、再び正面玄関の彼の
銅像の前に立つと、吞舟の魚のような大人物は自然に端倪すべからざる眼差しで私を
見詰めていた。



南普陀寺 (前頁地図参照)

中国の三大仏教聖山と言われる峨嵋山、九華山、普陀山に参詣することを念願としていた私にとって、普陀山(舟山列島)に代わって南普陀寺に参拝できることは、今次旅行の大きな成果であり喜びであった。

五老峰を背にして紺碧の海に臨む南普陀寺は、蒼翠につつまれた福建南部の古刹である。前記した三大聖山の普陀山の南に位置するから南普陀寺と呼ばれると言う。

唐代に創建されて最初は普照寺と呼ばれたが、その後、幾多の栄枯盛衰を経て今日に至った。清代の康熙年間(1662~1722)に再建され、以前よりも雄大な規模になったのと同時に南普陀寺と改名、南部の著名な仏教聖地となった。

大門をくぐると左に前殿すなわち天王殿が建っていた。その正面中央に弥勒菩薩が祀られているから弥勒殿の名もある。背後に韋馱天(パラモン教の神でシバの子。仏教に入って仏法とくに寺院の守護神となる)、両側に金色の四天王像が立っている。(上の平面図参照)

大雄宝殿は1932年に修復されたもので、建築技術の粋を尽くした荘厳さは福建南部の特色を現わしている。(右は大雄宝殿)

殿内は山水花鳥の絵で埋まって中央に釈迦牟尼、左に薬師如来、右に阿弥陀如来が安置され、それぞれ丈余の高さの三尊仏は金色に輝煌していた。

大雄宝殿の後方に建っている大悲殿は菩提樹に覆われ、他に類を見ないような金碧の八角3層の殿宇は、精巧美麗を極めていた。

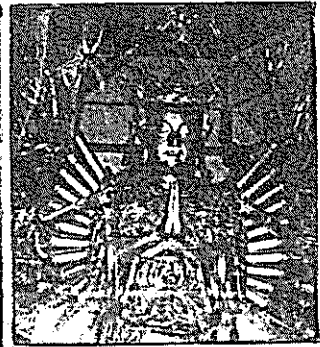
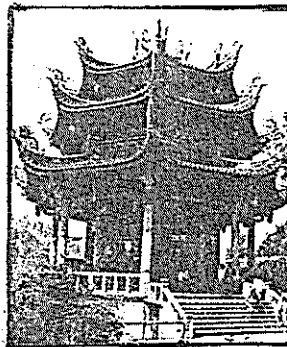
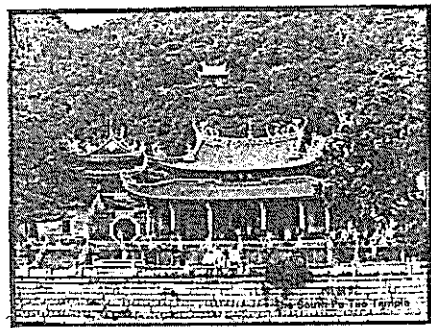
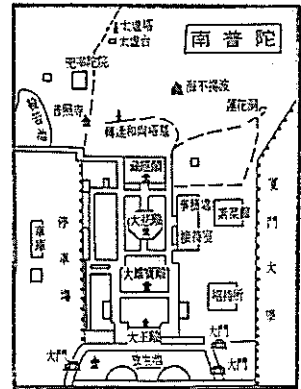
(右は大悲殿と千手観音像)

殿内に祀ってある3体の千手観音菩薩は、微笑を含んで慈愛に満ちた表情を表わし、扁額に「妙相莊嚴」と書かれていた。まさに其の通りである。

大悲殿の後方に2層の藏経閣が建っている(上の平面図参照)。その1階は法堂(經典を講じる堂)、2階の玉仏宝殿にはビルマの玉仏28尊と観音菩薩が祀られ、その他1万余冊、10万卷が保存されている。

其中には外国の仏典も含まれており、日本の大藏經(一切經)も収蔵されているとのことであった。これこそ最善の日中友好親善である。

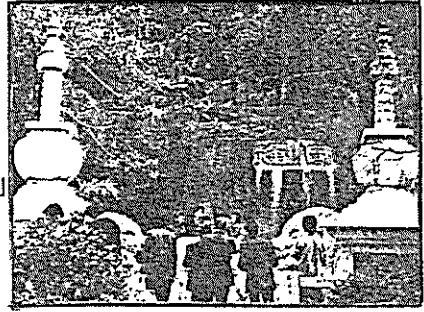
藏経閣の裏に延々と続いている断崖の壁面には(五老峰)、歴代の名将や文人墨客の筆による石刻群が所狭しと埋め尽くし、しばらく立ち止まって眺めていた。





高さ5 mもある「仏」という字の石刻は、清の光緒年間にこの寺の根慧大師が筆をとったもので有名である。(左の写真)

「仏」の石刻の前に「念仏一聲福増無量、礼仏一拜罪滅河沙」と書かれていたが、その意味は念仏を唱えて仏を敬えば、仏の智慧の世界に行くことができるということだろうか。(左の写真は石刻の文字)



「仏」の石刻を更に進むと、奥から太虚大師が建立した2基の白い墓塔が見えてきた。その墓塔の後方の懸崖に彫られた石刻の「円通」と、大きな獅子像が我々の眼を引き付けていた。(右側の写真)

「円通」とは、仏の智慧が総てに及んでいることであり、真理が遍く行き渡っていることだろうか。我々凡人には生涯かなわぬことである。

海と山の碧波に囲まれた南普陀寺、香煙縷々として厳肅に読経の行われている中を一巡し、魂が浄化されたような心境になっていた。そして数ある石刻の中で私の心を衝いたのは「心即是仏」の四文字である

胡里山砲台 (60頁地図参照)

南普陀寺のすぐ南にある宮殿式建物の厦門大学を経て、さらに南に下った海辺の小高い丘が胡里山砲台であった。

砲台の入口にある窪地には兵舎(140名収容)と弾薬庫があり、地下坑道によつて砲台と連結されていた。丘の突出部にある砲台の丘は高さ20余mの海蝕断崖の上にあり、険峻な地形を遺憾なく利用している。

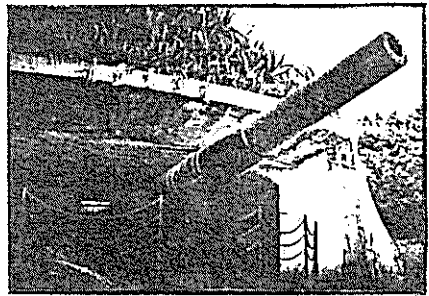
アヘン戦争(1839~42)のときに英国海軍と砲戦を交えている。英軍は此の砲台を「長列砲台」と呼んでいたが、遂に占領されて100門の大砲は海中に破棄されてしまった。

清の光緒17年(1891)、福建水師提督の彭楚漢が砲台再建を提唱し、5年の歳月をかけて1896年に完成したのが此の砲台であった。

東西の両砲台とも德国製(ドイツ製で現存は1門のみ)で、正式名は克虎伯大砲と言う。砲身の全長14m、重量6トン、口径280ミリ、射程約1600m、当時の製造価格は白銀5万両であった。

この砲台が日中戦争中に日本軍艦1隻を撃破したと伝えられているが疑問だ。

台上に立つと歴史の重みが肌に伝わり、魂魄が暗澹として沃雲を孕み、山雨まさに至らんとする当時が想起されてくる。砲台は世の中の移り変わって行くのも知らずに大海原を睨んでいた。



鏡のように広い海は豊かな寛ぎの空間をつくり、四海は波静かで航海を見守る灯台は、船を統率する名指揮官に似ている。灯台とともに歩んできた此の地の歴史は古く、灯台と海のロマンを求めたような感じさえしていた。

舳艫千里の中に順風に帆を上げて浮かぶ小舟、潮騒が心地よく響き渡って低く飛ぶ海鳥の姿は平和の生き写しだ。その天空海濶の彼方に滄海の一粟のように浮かんだ金門島が見えていた。

砲台に据え付けられた望遠鏡を覗き、往時の砲撃戦を険に描きながら手に汗を握って凝視すると、国の象徴である台湾の青天白日旗が翻っていた。

金門島 (59頁地図参照)

眼鏡に映る金門島は「鉄桶水も漏らさず」と言った堅固で、要塞化しているようには見受けられない。

一時は砲撃戦を交えて乱を起した台湾海峡、ともに乾坤一擲の骨肉の争いを演じた台湾海峡、今では緊張の海から融和な海へと変わろうとしている。(上は金門諸島の島影)

金門島とは12の島からなる総称である。胡里砲台の東方に見えている島は大金門島であった(上の写真の左端)。昔から海賊や密貿易の根拠地として知られており、清朝初期にはアモイとともに鄭成功の義挙の本拠となった。

上海～広州間の航路を抑え、馬祖島(福州東方24km)と共に台湾政府が大陸に接してもっている重要な軍事基地、地下まで要塞化して大陸反攻の拠点であった。しかし現在の台湾政府は中国(大陸)の敵国条項を解除した。

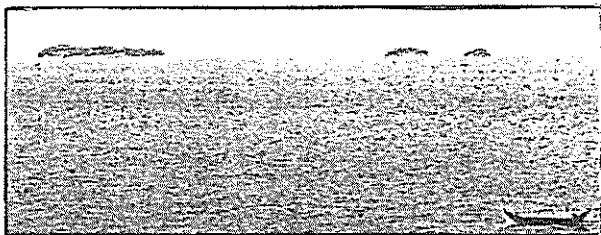
嘗て政治対立を反映していた緊張の海は、今では人、物、金の繋がりを強めて海峡経済圏を作りつつあるようだ。中台の貨物船は第三国(日本の石垣島など)を経由すれば目をつぶって貿易を認めていると言う。経済的には大陸が台湾化する必要があるのではないだろうか。

人件費の高騰などによって台湾では労働集約型産業が成り立たなくなった。距離的に近く言葉が通じ人脈もある福建省は、移転に最適という台湾側の期待にこたえてアモイ市は一昨年、経済特別区の中に台湾企業専用の投資地域まで設けている。

一方、台湾と大陸側との間でテレビをめぐる電波合戦が激化している。既に福建省南部の沿海地方では台湾の番組が視聴可能となり、大陸側はチャンネルを増やして対抗するなど、視聴者の獲得に躍起となっているらしい。

台湾のテレビ局が大陸向けの中継局を金門島に建設した。アモイ市内ではマルチタイプの受像機をつければ鮮明な画像が映り、多くの市民や経済特別区に進出している台湾人が番組を楽しんでいると言う。しかし、大陸の政府はアモイのホテルにまでは許可を与えず、残念ながら見ることは出来なかった。

「土仏の水遊び」のように、自ら災いを招くことをしなかった金門島と胡里砲台、共に地球という一つの星に住む者として、主義や国対国ではなく世界的な見地に立って欲しい。今では戦争の実相が茶の間まで実況中継される時代に到来したのだ。



この紀行文を綴っているいる時、日本の新聞は、金門・馬祖両島の台湾軍が中国船に射撃したことを認めたと報道した。大陸側の船舶が両島の領海を侵犯したから前線の安全確保のため、威嚇射撃をしたと言うのが台湾国防部の声明であった。平和に見えて矢張り小競り合いが続くのであろうか。

激しい競争原理が支配する世界と、一党独裁の体制の何れが優るかは衆目の一致するところだが、海辺を洗う波の音に夢のある平和な海峡を托して砲台を去つた。

鼓浪嶼（コロンス）島（60頁地図参照）

コロンス島はアモイ島の輪渡碼頭（棧橋）から約500m、鷺江海峡を隔てた対岸にあり、大小16の島から成っている。宋末から元初（1280年前後）には「円沙州」と呼んでいた。

島の西南海岸に1巨石があり、満潮時には波浪がぶつかって太鼓のような音を出したことから、明朝は正式に「鼓浪嶼島」と命名したと言う。

山、島、礁、岩、寺、花、樹木の景観は雄峻幽秀、四季を通じて春の如しと言われており、長期間の海浪の侵蝕によって中空に聳えた日光岩の景観を、「浪撃龍宮鼓」と形容している。

明の万暦年間には村落が形成されている。明末、清初の民族的英雄「鄭成功」は廈門と金門島に兵を駐屯させ、此处を水軍の訓練場として練兵し、龍頭山（日光岩）を水操台（指揮所）としていた。

1843年のアヘン戦争後、南京条約によって廈門が5港の1つとして開港すると、鼓浪嶼島は英国に強制的に占領された。続く1902年には英、米、仏、独、日、葡等の領事館が進出して共同租界地を作り、それら13ヶ国の建築は世界建築博物館を見ているようであったと言う。

アモイの鴻山酒店で昼食を済ませた一行は、輪渡碼頭から2階建て300人乗りの渡し船に乗船し、小舟の繋留された鷺江海峡を渡った。

（右の写真はアモイから眺めたコロンス島の全景）



憧れであった鵬程万里の鼓浪嶼島に全身の血潮を充溢させて第一歩を印した。興奮しながら鼓浪嶼島の棧橋に降りると、四行の詩が書かれた大看板が眼に留まった。

それは「思帰・願統一・兩岸・一家親」という四行の文字である。台湾の復帰を望み統一を願っている。大陸と台湾は親しい一つの家族であると言う、大陸側のメッセージであった。それだけ多くの台湾人がコロンス島を訪れるのであろう。

赤い名も知らない大木の花が咲き匂う庭に建つ「旧英国大使館」、何となくアヘンで水脹れしたような感じがする。恐らく当時の中国の有識者たちは遺恨復讐の心を磨き、会稽の恥をすすがんと思っていたことだろう。

続いて「旧日本領事館跡」に案内された。赤煉瓦の囲塀の前に「日本帝国主義領事館警察署地下監獄」と彫った石碑が立っている。通訳は無言でこれを指差したが、我々は棒を呑んだように呆然と立ちすくんでしまった。

（租界地は地外法権であり領事裁判権が認められていたのであった）

灰色に似た空気が漲って暫く沈滞感で無口になり、心中は狼狽してしまつた。旧日本軍の過度な仕打ちとして各地に恨みの記念館が建てられた上に、このような地下監獄まで見せられると、我々は胸が切り裂かれる思いがする。

無知蒙昧な中国人をよいことにして有頂天になつて狂喜乱舞した租界地、特に海賊の大将だつた英国人が悦楽に耽つた街道、天高く聳えた教会の塔は今も其の威容を留めていた。

島に一台の自動車もないことはコロンス島の特徴である。美しい煉瓦造りの洋館が建つ坂道を歩くと、ピアノ型の屋根をのせた音楽堂が見えていた。鼓浪嶼島の棧橋の建物はバイオリン型であつたが、島全体が音楽の島と呼ばれるほど音楽が盛んで、ピアノの普及率は中国で筆頭だという。

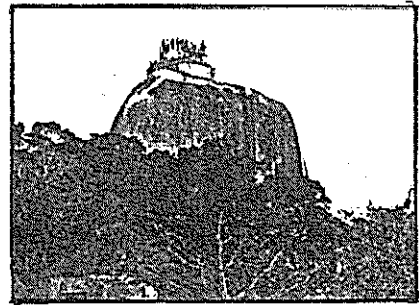
アモイ市の樹は鳳凰木、市の花は三角梅で、芳香の漂う島は海上花園と云われるほど花と緑が繁っている。路傍の古松が覆い重なつた急坂を登ると、そこは日光岩の入り口である「日光巖」であつた。此処が有名な鄭成功の水軍を訓練した跡である。

附近の大きな摩崖に「鼓浪洞天」「鷺江第一」「天風海濤」の石刻が彫まれ、その前の小さな広場に「蓮花庵」が建っていた。明初の創建で日光が庵内に直射することから「日光寺」の別称もあり、口を大きく開いた「笑石」は私に一服を促していた。

いよいよ鼓浪嶼島の最高峰・龍頭山への挑戦となつた。ゆっくり急げと吾れ我れを忘れて石刻群の急坂を登攀した。

鶏群の一鶴のように屹立した「日光岩」を、義眼のように動かめ目で見上げながら、青息吐息で足を運んだ。

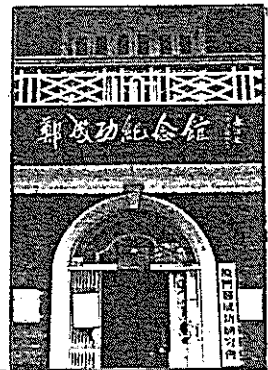
海拔92、68mの「日光岩」は古名を龍頭山と言ひ、頂上は4m四方の平らな石となつて欄干で囲まれている。(右はコロンス島の中央に聳える最高峰・日光岩の遠望)



群衆で立錐の余地もない頂上から俯瞰する展望は、時間の経過も忘れさすような壮快さである。光復台とも言われる展望台は巨石畳々の上であり、厦門市街から鷺江海峡、それにコロンス島の全部が手にとるようで、「閩海雄風」の石刻の通りの眺望であつた。

大海に臨んで水軍を統率しているような気分になり、日光岩を下つて蓮花庵で休憩をとつた。息を整うのを待つて再び曲がりくねつた幽路を下り、水操台遺址に建てられた「鄭成功記念館」へと向かつた。(右は鄭成功記念館)

3層の高い建物の正面にある「鄭成功記念館」の扁額は1962年、開館の際に郭沫若氏によって書かれたものであつた。



館の前に立つと「英雄、英雄を知る」の句が私の脳裏を走つた。唐の詩人・杜甫が諸葛孔明を祀つた社を訪れた時の一節だ。

英雄の心は英雄でないと言はれないと言われるが、凡人の私にも理解できる言葉である。

楚の屈原と同じく国を愛し、暴虎馮河の勇を振り絞つて戦つた英雄「鄭成功」の像

が正面玄関内に据えられていた。日本人の血が流れている鄭成功に運命の皮肉を感じながら、何もかも忘れて茫然と拝していた。(館内は撮影禁止)

像はどこことなく表情が厳しく引き締まった感じががする。これは私の過剰反応だろうか。そして人の心を率直に感動させる、或る不思議な説得力を発揮しているように見受けられた。

「烈士は名に^{ソウゴウ}殉^ムう」、即ち自分の考えが正しいと節を曲げない人は、名誉のために命を命を捨てることを怖れない。その精神は矢張り日本人の血の性だろうか。まさに「人生意気に感じては成否を誰か^{アノタ}論ろう」の昭和維新の歌詞の通りである。

悲歌慷慨しながら館内に入ると、「光復台湾」と「驅除荷虜」(荷はオランダ)の大額が掲げられていた。7つの陳列館には実物や文献の写し、図表、生前の少年時代から抗清活動期に使用した玉帯、兵器、印章、台湾の地図などが展示されていた。

数多くある中に日本から贈呈された「児誕石」の写真までが展示され、私の心を晴々とさせたのであった。

記念館を辞した一行は大徳記海水浴場へと思い脚を運んだ。海浜に高さ20mもある巨岩が白砂に横たわって「水面盆景」の景観を呈していた。

海水浴場に隣接して「林叔蔵」が造った「菽莊花園」と「觀海園」が蜿蜒と延びていた。

日清戦争によって台湾が日本に割譲されると、林叔蔵父子はコロンス島に帰って園を造り、菽莊花園・觀海園と命名したのであった。

天然の地形を利用した園の中でも有名な四十四橋を散策した。折れ曲

がった橋の至る所に亭が設けられ、高さ丈余もある巨岩が海中に突き出し、「沈流」「海關天空」の草書の石刻が見え、旅人に風雅な情緒を与えていた。(上は四十四橋)

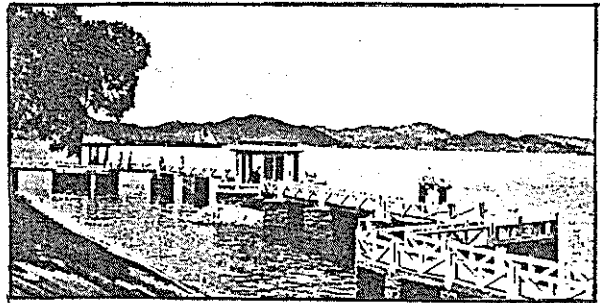
空は漸く暮れ落ちようとして海は一日のうちで最も美しい景観であった。一行はコロンス島の棧橋に集り、再び渡し船に乗船した。

咄嗟に3歳ほどの子供が頭をさげて金品を乞うて来たが、誰一人として恵み与える者はいない。何処の国でも宋襄の仁だと心得ているようである。

波が白く砕けている鼓浪嶼島の東端に、四海を睥睨するようにして立っている「鄭成功」の石像が網膜に映った。(右は島の東端に立つ鄭成功像)

コロンス島観光悦楽の最後を飾るように、彼の石像は私の肺肝を^{ツク}掻き、心悸^{ツク}昂進、顔面紅潮する感動であった。

鼎岩の上に立つ花崗岩の像は高さ15、7m、像と岩とは渾然一体、一波動けば万波生ずという彼の心が、仁王立ちの中に現われていた。春の日は秋の^{ツルベ}釣瓶落としと違ってゆっくりと暮れて行き、悄然とした海峡には板子一枚の下は地獄のジャンクがひしめいていた。こうして待望久しかったアモイ観光も遂に終わったのである。



鄭成功 (1624~62) (右は胸像)

鄭成功には自らの著作はない。彼が有名になった「^{コウセンゲ}国姓爺合戦」は近松門左衛門によって脚色された義太夫節である。1715年11月から17ヶ月にわたって大阪の竹本座で上演された。その後も人形浄瑠璃や歌舞伎で繰返し上演され今日に到っている。

国姓爺合戦が初演されたのは彼が急死して53年後のことである。その頃の日本は鎖国状態であったが、長崎を窓口として日清両国の間に通商貿易が行われ、大衆の間にも中国に対する関心が強まっていた。

その後、密貿易は厳禁となつて貿易は制限されたが、町人の世界に視線を向けていた近松門左衛門は、「父は^{モロコシ}唐土、母は日本」とうたう混血児の動きを通して、一種の政治批判を試みたのかも知れない。

鄭成功の母は田川七左衛門の娘で名前はわからない。身分の低い家だったが、先祖は北条家の家臣で田川八郎朝頭といい、蒙古襲来の折りに武勲をたてたと伝えられている。

父の鄭芝竜は福建省の泉州南安県の生まれだが、長崎県平戸では「老一官」で通っていた。芝竜が母方の伯父・黄程の持ち船に乗り、積荷の監督をかねて日本に渡来したのは慶長17年、しばらく長崎に住んでいたが、やがて平戸に移った。

そこで仕立屋の看板を出したと言われているが、それは恐らく表向きのことだろう。実際は日本・中国・東南アジアを結ぶ南海貿易の、重要なポストに就いていたものと思われる。

寛永2年に彼は頭領となり、芝竜を名乗るのもそれからであった。弟達と組んで沿岸諸州を荒しまくり、海賊たちを次々に滅ぼして南海一円の覇者に申し上がった。

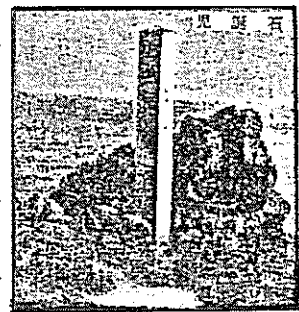
平戸に住んだ鄭芝竜は藩士から武技を学んだりしたようだが、そのうち田川氏の娘とも交渉ができて、「福松」という子が生まれた。これが鄭成功である。

日本の言い伝えによると、田川の娘が平戸の千里ヶ浜で貝を拾っているとき俄かに産気づき、浜の巨石によって一男子を生んだと謂れている。この岩は史蹟として今も「児誕生石」として保存されている。(右の写真は児誕生石)

明朝も末期に近づくに農村経済も次第にゆきずまり、あいつぐ災害も加わつて大規模な農民一揆が起り、支配体制が揺らぎ始めた。そこで明朝は鄭芝竜を招聘し(1628年)、海防遊撃として迎えられた彼は総兵官から都督(地方の軍事を司る長)へと進んだ。

多忙をきわめた鄭芝竜は平戸に立ち寄る余裕もなく、妻子を呼びよせようとしたが奉行の許可が下りなかった。やむなく少年「福松」は7歳の時に母と弟たちと別れ、ひとり父のいる福建省の福州・安平鎮へ渡った。

鄭成功の福松は15歳の時に學員生に選ばれるほど頭脳が優れていたから、20歳で南京の大学に遊学した。南京遊学中に明朝最後の皇帝・毅宗(崇禎帝)が景山で自害し、明朝は17代、295年で滅んだ。



北京が陥落した翌年、万曆帝の孫にあたる福王（弘光帝）が南京で擁立されたが、1年も経たずに清軍に攻められ捕らえられて殺された。（右は平戸にある鄭成功の居宅跡）

続いて魯王・以海が紹興（浙江省）で擁立され、さらに唐王（隆武帝）が鄭芝竜らによって福州で擁立された。南京に遊学中の鄭成功も呼び戻されて其の軍に加わった。

その時に国姓（明朝の姓）の「朱」を賜り、成功と名を改めたのは其の時からだ。従って「朱成功」と呼ぶのが正しいが、彼は朱姓を用いることをはばかり、自らは鄭成功と名乗った。



しかし百姓たちは彼を国姓爺と尊敬した。鄭成功は御営中軍都督（総大将）に任ぜられ、その翌月、母と15年ぶりに再会した。父・芝竜が長崎奉行の庇護を請い日本妻を招いたのである。母は夫との再会を喜ぶ以上に、立派に成長した我が子を見て感激し、成功もまた感涙にむせんだと云う。

明朝の復興に情熱を燃やした鄭成功は抗戦派の中核となつて各地を転戦した。その一方、父の芝竜は次第に前途に不安を抱き始めていた。貿易商で鍛えあげた現実感覚は、日ごとに衰微する明の残党軍について行けず、やがて清軍に内通する。

そのために福州は陥落して隆武帝は殺された。父・芝竜は其の折り息子を誘ったが、成功は「昔から父親が子供に向かって、忠義をつくすようにと教えることは聞いていますが、主君を裏切れと説くのは未だ聞いたことはありません」と言って父を諫めたという。

堅牢を誇った福州の安平鎮は清軍の暴威にさらされ、最後まで踏み止まった成功の母は楼上に登つて自害し、下の川に身を投じた。

これを目撃した清軍の兵士は、「女性でさえも此のように潔い最後を遂げるのだから、さだめし日本の勇士は手ごたいに違いない」と、賛嘆したと伝えられている。

忠誠を誓った隆武帝は殺され、父は裏切り者となり、母は自害し、ますます抗清復明の決意をかためた鄭成功は安平鎮を去り、厦門に近い鼓浪嶼島に根拠地を移し、そこで軍艦を造って兵を養った。

当時、厦門島には魯王・以海を擁立する成功の従兄弟がおり、金門島に叔父が根拠地を置いていた。成功は従弟を殺して厦門島を占領して金門島も確保した。そして沿岸各地に軍事的、経済的な拠点を増やし、それを足掛かりとして大陸反攻の機会を得ようと努めた。

成功が沿岸各地を掌中に収めようとした狙いの裏には、兵站基地を確保することが込められており、東洋各地は勿論のこと、南洋から遠く西洋に至る販路の拡大に力を尽くしている。

清朝は父・芝竜に働きかけて執拗に和議をもちかけたが、成功は取りあわず、沿岸各地の攻略を依然として継続したのであつた。

鄭成功の抗清復明を支えた軍事費は日本、ルソン、交趾支那などの諸国との貿易によって賄われた。長崎には毎年のように「国姓爺船」が入港したが、それは貿易だけでなく援兵を請うたのである。所謂「乞師」である。（乞師とは明の遺臣たちが軍隊や軍需物資を請うことである）

1648年10月には援兵を請う書を日本に送り、51年には使者を派遣して鉛や

銅を求めた。58年6月にも日本に書を献上している。

しかし日本への乞師は殆ど成功しなかった。密かに武器や食糧の援助はされたが、鎖国をたてまいとする日本としては、表立つた援助をする訳にはいかなかった。

鄭成功は南京攻略のため10万の精鋭を集め、大小300余艘の船を動かして北上を開始した。それは1658年5月のことである。

弘光帝や隆武帝が無残な最後を遂げた後、成功は永曆帝を押し立てた。この永曆帝から彼は「延平郡王」に封じられ、大いに荣誉としたのである。その恩に報いるためにも南京攻略は重要であった。(延平郡王に就いては38頁に記述)

これまで沿岸諸地域を攻略し、それなりの成果を挙げた成功は、その総決算として南京攻略を企てたとも言えるだろう。

5月に廈門島を出発して福建・浙江と船団を北上させ、温州に兵を進め、浙江省南部を攻略したが、激しい風雨に見舞われて止むなく兵を取めて舟山列島附近に終結し、8月には羊山に達した。(右の地図参照)

乾坤一擲の運命をかけた北征は其の出鼻をくぢかれた。そこで舟山列島まで船を返し、兵器の修理を行うのと同時に、浙江省の台州や温州を襲つて船を奪い、食糧を確保して再建に努めた。

万治2年(永曆13年)4月19日、鄭成功は自ら第1軍の艦隊を率いて礮石街を出発して鎮海を攻めた。

さらに寧波を襲つて其処に終結していた敵の船団を焼き払い、平山も無事に通過して、いよいよ長江への進撃を開始した。

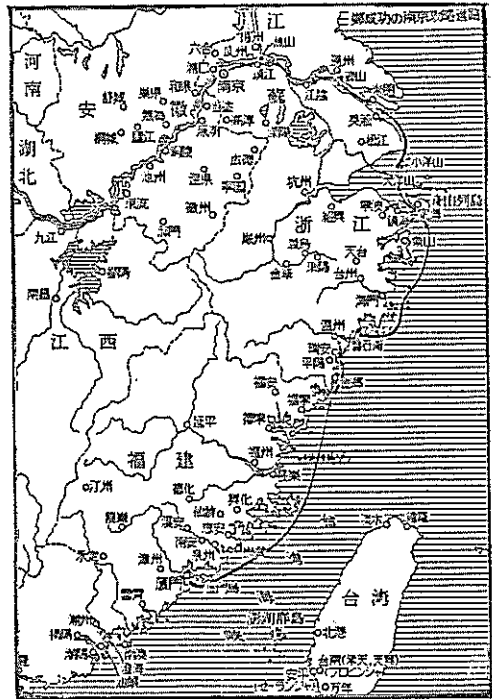
崇明島から呉淞に入り、さらに長江を遡って江陰を攻めた。しかし防備が堅固で仲々陥ちない。そこで長江を深く進んで瓜州(揚州の南)を攻撃し、激戦のすえ敵将を捕らえた。

鎮江の攻防戦も激烈をきわめ、特に銀山での決戦は肉弾相討つ白兵戦となった。鄭成功軍の精鋭である鉄人部隊は目覚ましい戦いぶりを発揮した。何れも鉄甲を身に着け、第一線の斬り込み部隊として奮戦している。総数は5千から8千であった。

この鉄人部隊は何処で編成されたか、中核をなしたのは誰であったのか興味があるところだ。と言うのは、鄭成功の請援で密かに派遣された、日本人部隊だったという説もあるからだ。

瓜州の殲滅戦で5つに分けた1つの部隊は、「倭銃」部隊だったことが明らかになっている。火器だけでなく日本人の外人部隊が鎧兜に身をかため、敵中深く斬り込んで斬馬刀を振り回す光景は想像に難くない。

瓜州、鎮江の戦いは文字通り南京攻略の関ヶ原であった。鄭成功は鎮口に兵を集め全軍を閲兵した。その意気は天を衝くものがあつたと伝えられている。ここまで来れ



ば南京は目睫の間であった。迂回して蕪湖（南京の西南）を衝かせた部隊も江南各地で勝利をおさめ、あとは南京城を陥すだけとなった。

南京は陥ちたと同様であった。あと一押しで南京攻略は成就するということで、心の驕りがあったのであろうか。軍律が弛んで内通する者も現われ、投降者の証言を信じ込んで清軍の奇襲を受けた。

驕り高ぶった鼻っばしを一撃された感じで、全軍は異常なショックを受け、陣容を立て直す余裕もなく、追い立てられて敗走することになった。鄭成功が陣没したというデマが流されたことも、浮足だった攻略軍の統一を乱す原因となった。

この敗北で多くの股肱の臣を失った。鄭成功は再編成を行い、瓜州、鎮江を捨てて長江を下り、河口の崇明島を攻めたが砦は堅く、遂に攻撃を諦めて廈門に引き返した。

鄭成功軍の敗北の原因は兵站線の延びたこと、驕りからくる士気の弛み、後方地域を十分に固めず先へ先へと進撃し、返つて孤立化したことなどが上げられる。1年5ヶ月にわたる遠征はこうして失敗に終わった。

南京から撤退してくると、勢いに乗じた清軍は廈門周辺にまで攻撃をかけてきたが、鄭成功軍はこれを迎撃して大いに破った。しかし、このままの状態ではジリ貧に陥る。むしろ対岸の台湾に拠点を移し、廈門島や金門島を前線にして相互に連絡をとって行けば、今後どう動くにしても便利だと鄭成功は考えた。

美しい島とか蓬萊島と呼ばれていた台湾を、オランダ人が占領したのは、鄭成功が生まれた1624年のことであった。そしてオランダは7年の歳月を費やして築城を完成していた。

鄭成功の台湾攻略は1616年3月に開始された。長男を留守部隊長として廈門に残し、先ず金門島へ船を進め、翌月2万5千の軍勢を乗せた一大船団が台湾海峡を渡った。

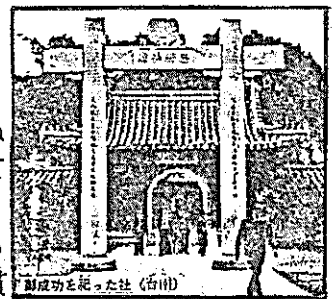
鄭成功は〔台湾の領有は清軍との戦いに必要であり、決して東インド会社を敵とするものではなく、その財産を奪う積りもない。台湾はもともと中国のものであり、オランダ人がそれを元の主人に返すのは当然である。一刻も早く砦を破壊して私財を持って退去してほしい。それを拒否した場合は最後の強行手段をとる〕と宣言した。

台湾の戦闘は省略するが、総攻撃を開始して1662年2月1日にオランダ側は降伏した。（下の写真は台南の鄭成功を祀った社）

こうして内政を固めるのと同時に、かねてからの懸案であった^{（1624年）}呂宋に対する働きかけを行っている。呂宋を招諭して台湾との連帯を強め、抗清復明を期そうというのであった。

しかし鄭成功は熱病のために39歳の若さで急死した。病床に伏したとき部下の大將の一人が薬湯をすすめると、それを地面に投げ捨て「忠孝二つながら達成できずに死ぬのは死に切れない。天よ、この孤忠の臣をどうして見捨て給うや」と大声で叫び、息絶えたと伝えられている。

以上で鄭成功の概要を記述した。我々の年代の者にとっては彼の心中と相通じるものがある。忠とは口と心とを貫く意志であり、国破れて忠臣出づるの言葉が想い浮かぶ。彼の根拠地であった鼓浪嶼島に今吹く風は枝を鳴らさず、天下太平の島であった。



鄭成功に就いては先年平戸市を訪れた際、私のビルマ戦線に於る戦友・神田 昇様（当時平戸市教育長）に案内して頂いた時の記事を参考にした。又、台湾・台南市からの団体が毎年1回、平戸市の鄭成功を祀った神社に参拝するとのことである。

廈門に就いては、アモイ市・新世界出版社発行の叢書を参考にした。

3月14日

(木) 晴

アモイ～広州

健康で中身の濃い人生を送りたいと思いつながら、長かった福建省の旅を終えた。武夷山、福州、泉州、廈門、鼓浪嶼島の各地は其れ其れの古い歴史があり、何れも兄たり難く弟たり難しの地であった。

各地の仏閣や偉人の足跡から「蠟燭は身を減らしても人を照らす」、自分の身を犠牲にしてまで、他人の幸せになるように尽くす精神、この心を過去に遡つて教えられたような気がするのであった。

今日は廈門から広州に翔んで広州観光を済ませ、一挙に海南島まで一足飛びという長駈・凶南の旅だ。朝寝坊の醍醐味も味わえずに早朝の5時にホテルを発つた。

複雑な色をした巨大な雲は、朝焼け雲というだけのものではなかった。赤や黄の派手派手しい混沌とした色彩は、何か人間の犯した不安、悔恨の渦のようにも見え、人間の運命が赤い腹綿を見せて地面を覆っているようでもあった。

搭乗機は7:10に飛び発って紺碧の海上を浮かぶように飛行した。時間にして1時間足らず、広州市街を蛇行する珠江の流れは旭に映え、奇麗に整理された周りの畑に包まれた高層ビルが林立し、高速道路は延々と延びて中国第一の大都会らしい景観である。

珍しく定刻の8:10に白雲空港に到着、南国とはいえ肌寒く気温は21度、朝食は北園レストランで摂った。私は過去4回広州を訪れている関係から、観光というよりも温故知新の旅となった。簡単に広東省・広州の概要を記しておく。

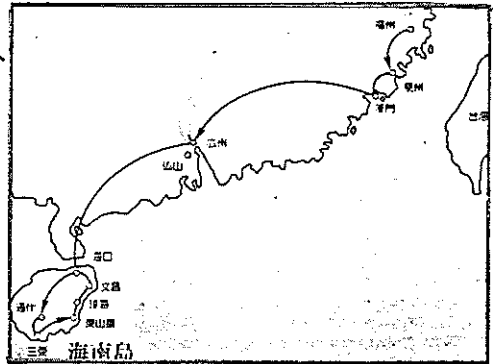
〔広東省・広州の概要〕

この地の起源は遠く3千年の昔に遡る。広州はその昔は「南武の地」、周の初めに「南海」、戦国時代は后越と称していた（越民族が住む）。秦の始皇帝が天下を統一すると、此の地に南海郡を設置している。（郡は現在の省）

漢の初め惠州の趙佗がここに立ち籠って独立し、南粵（粵は越の別名）の武王と称した。これを知った漢は直ちに討伐軍を派遣してこれを破り、再び南海郡とした。

次いで三国時代に入って呉はここを広州と呼び、以後はこの地名を用いたが、隋に至って番州と改称、唐時代には嶺南道と言ひ、さらに下って宋代には広東という名称の起源となった広南東路と称した。

明朝はここを広州府に改め、前清時代もその名を踏襲し、その後の中華民国になると全国に市制を敷いたため、広州市となった。



以上が広州の沿革であるが、広州の面目は国内的な変遷よりも、対外的関係にあると云える。遠く紀元前の漢の桓帝のとき、ローマとの互市を行ったのが全中国での外国貿易の最初であった。

唐時代に入ってからアラビアとの通商は頻繁に行われ、特に外国船舶の監督官を設けて外国商品に課税している。現在中国に数千万人の信者をもつ回教も、広州が輸入された最初の地である。

この地が海のシルクロードの大拠点になったのは隋、唐のころで、明時代に入ってからポルトガル人も渡来、清朝時代には英国の東印度会社が広東に着眼し、アヘンの貿易禁止にからんで遂に史上有名なアヘン戦争が起った（1839～42）。

1842年に南京条約が成立して外国船舶に開放されて今日に至っているが、広州の経済的及び思想的発達の重大な原因の1つは、確かにこれが影響している。

アヘン戦争後の1851年、滅清興漢（満州族の清朝に対し漢民族国家を建設）を標榜して挙兵した、太平天国（長髪賊の乱）の首謀者「洪秀全」も広東の人であった。

辛亥革命の先駆けとなった「黄興」たちの清朝に対する武装蜂起（黄花崗事件）も、広州で発生している（彼は後に孫文と意見が合わず隠退して病没）。

続いて清末に立憲君主政体を目指して改革に着手した「康有為」（1858～1927）、その門弟の「梁啓超」（1873～1930）が民族革命を鼓吹したのも広州であった。

中華民国を建て今日でも国父と慕われている孫文は、このような情勢を背景にして広州で軍閥を倒し、中国の統一を図るために北伐を開始したのであった（1926）。

孫文は珠江下流の黄浦に黄浦軍官学校を設立、校長は蒋介石、教員に周恩来、生徒の中に林彪がいたことは周知の通りである。この地に燃え上がって全国に拡がった革命の火は孫文の死後、蒋介石の4・12クーデター（1927年）により、多くの犠牲を出して後退して行った。

（上記した康有為以下の人達は、いずれも日本に亡命している点は注目すべきである）

一方、広州は中国でも最も豊穡なデルター地帯をひかえ、商工業の中心地として経済的に誇り、南中国に於ける心臓であり、司令塔であったと言える。

貿易の歴史は古く秦漢の時代には貿易港が開かれ、絹織物、陶器、茶などを積んで旅立って行った。帰路にはサイの角、象牙、香料などを持ち帰り、広州から長安の都へと運んだ。

唐・宋時代は広州の対外貿易の最盛期で、外国商船が珠江に雲集し、アラブ、インドなどから集まって居住した外国商人は10万人に達したという。イスラム教やキリスト教もこの時代に広州に伝えられた。

海外との交通も最も早く開け、国外の知識をいち早く吸収した広州は又、欧米諸国の侵略を真っ先に経験した街であり、これに抗して戦った革命的伝統に貫かれた街であった。これらは前記した通りである。

広州観光と通訳

流暢な日本語を喋る広州の通訳は、広州の実態を詳細に亙つて説明した。その第1は広州人は「社会主義には無関心」だと言うのであった。裏返せば「自由主義に憧れている」証拠である。

彼は日本の実態を熟知、理解しており、その弁舌は熱がこもり、頼母しい味方を得たように話し続けた。社会主義がどうかと真剣に考えているのは共産党のエリートぐらいで、大多数の人は生活が向上すればよいと考えていると言う。

共産党独裁の政治体制がどこまで耐えられるか、これが中国の経済を占う鍵だと臆面もなく喋り、ソ連の脱社会主義が軌道に乗れば、中国も徐々に追隨するだろうと、立て板に水のように話し続けた。

今日まで12回に及ぶ訪中で、このような通訳の言を聞くのは初めてのことだ。体制は必ず崩壊する運命にあることを感じない訳にはいかない。

「民の口を防ぐは水を防ぐよりも甚し」という言葉が思い出される。「民は之に由らしむ可し、之を知らしむ可からず」という体制は、過去の王朝の思想と変わることはなく、知識階層の反発は当然であろう。

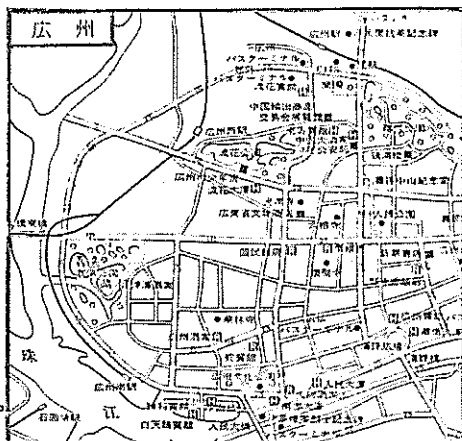
広州や上海、福建省などの地域では、もう既に今の体制と全く違った潮流が支配的である。広州の資本主義的な発展は目覚ましく、GNPでは広州は遂に上海を抜き、福建省も物凄い勢いで伸びていると言う。

ソ連の現状は解体の方向にあり、植民地的な帝国は解体する否、しなければならず、各共和国ごとに富を競い合っていく以外に策はないようだ、仄めかしていた。

福岡市と姉妹都市を締結した広州は人口700万(市内400万)、労働者の平均賃金は約140元、ボーナス(能率給)は1ヶ月に月給の約3倍と言うから中国では抜群だ。タクシの運転手は月に3000元を支払って車を借り受け、残った金は自己の収入だから月に約1000元になるらしい。これでは自由経済に憧れるだろう。

日本円で100万円あれば利息が年に10万円(約250万円)付くから、一生滯贅沢して暮らしても未だ金が余ると、笑いながら話していた。だから日本円を夢見て不法入国を志すのも無理はない。

発展の陰には墮落の危険性があることを自覚して欲しいと考えながら、通訳の訴える言葉を真剣に聞き入っていた。広州は後世畏るべしと思っていると、バスは中山記念堂の広場に到着した。



中山記念堂

前回訪れてから何年になるだろうか。孫文(号は中山)を記念して造られた宮殿式の建物は、広州市民と海外華僑が基金を提供し、1931年に完成した八角形の記念堂である。

記念堂は広州を見下ろす越秀公園の南麓にあり、1921年、孫文が臨時大統領に就任した時の総督府の跡である。高さ56m、八角形の大ホールには2階を含めて4700席があり、柱1本も使っていない円蓋天井は中国では独特のものである。

外面は青色の遼寧省産の大理石と、黄色の泰山石とで外装し、藍色の琉璃瓦、紫紅石の柱を使用している。その堂々とした威風と落ち着いた色彩は、満腔の希望をもって万里に馳駆した彼に相応しい。

輝かしい殿堂の前には、杖をついた孫文の銅像が厳然と立っている。その表情には水火のような激しい闘争の中で、国家の柱石たらんとした彼の鞏固な意志が窺われる。(右は孫文の銅像と記念堂)



緑の芝生に覆われた広場に毅然として立った銅像は1956年、孫文生誕90周年を記念して建立したものである。辛亥革命80周年(革命は明治44年)に当る今年、再び彼の銅像を前にして感あり。今さらながら文化大革命は何であったのであろうかと。中国の近代史に於ては孫文の右に出る人物は無いと言えるだろう。

大きな望みを抱いて事に当たり、「天を幕として地を席とす」といった鞏固な意志は国土夢双である。感激を新たにして六榕寺へと進んだ。

六榕寺 (前頁地図参照)

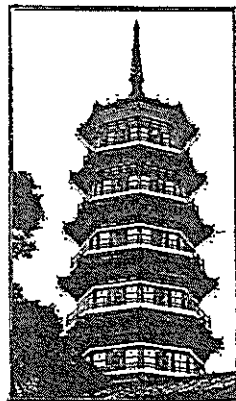
老樹の茂った六榕寺の歴史は古く537年、南朝の梁の武帝の時に、命によって曇裕法師が宝莊嚴寺と舍利塔を創建した。宋代(10世紀)に火災に遭ったが989年に重修して浄慧寺と改称する。1097年に宝塔を建立して内部に千仏像を収めたことから、千仏塔とも呼ばれている。

紀元1100年、宋の詩人・蘇東坡が寺内に6本の榕樹(ガジュマル)が盛え立っただのを見て、「六榕」の2字を書いて以来、六榕寺と呼ぶようになった。

荘嚴華麗な大雄宝殿には高さ6mの釈迦仏、阿弥陀仏、弥勒仏が祀られ、榕樹の蔭にある六祖堂には中国の禪宗第6代祖師の慧能大師の像が安置されていた。

高さ57mの六榕塔は外観は9層、内部は17層、遠くから眺めると色華やかな花卉が、重なっているように見えるから花塔とも呼ばれている。

この塔の最上塔に登れば、広州市街が一望のもとに見渡せると云われたが、時間はこれを許さず、諦めながら素早く一巡して境内を出た。(上は六榕塔)



越秀公園 (73頁地図参照)

旧体制の古い香りと新しい息吹きが聞こえる街並みは、櫛の歯を引くように人の往來が頻繁で、GNPが最高らしい活気を呈している。通訳の滔々と喋りまくる弁舌は話半分に聞いても退屈せず、耳をそばたてて聞いていた。

広州には自由市場が50ヶ所以上もあり、その1つの「建設新村農副産物市場」という長たらしい名前の市場に立ち寄った。遺産過多の広州でなぜ市場に案内するのか其の意図が分からない。

各国には其れ其れ固有の習慣があるのは当然だが、市場には鶏肋のような捨てるべきものまで並んでおり、市民の台所をあずかる市場は甘いものに蟻がつくように股賑を極めていす。所変われば品変わると言われるものの、蛇だけは気持が悪くて目を向けることはできない。

市場を出ると幾度か訪れたことのある越秀公園の丘が見えてきた。附近の風物を借景とした庭園の優雅な湖面は、私の脳中に遠る記憶を刺激していた。

バスはテレビタワーの前に停車して早速、エレベーターで星河座という展望台に昇った。世界の流行であろうか、このタワーも近年に建てたものらしく、前回訪れた時には無かった。それだけ広州の財源が豊かな性であろう。

夜になるとディスコに早変わりするという展望台から、眼下に流れる珠江や近代高層ビル、鎮海楼、中山記念堂、広州起義烈士の塔が見え、広州最高の鳥瞰である。

続いて直ぐ近くの鎮海楼に誘導された。相変わらず玄関には広州のシンボル「五羊像」の銅像が立っている。

周(1122?~256BC)の時代、5人の仙人が口に穀物の穂をくわえた5匹の羊に乗ってこの地に降り立った。そして人々に飢えることのないように穂を与えるると仙人は消え、跡に石と化した5匹の羊が遺っていたと言う伝説がある。

伝説の羊の像は今も越秀公園の高台に立ち、広州を見下しているから広州は「羊城」とも呼ばれている。鎮海楼の像は此の模型である。

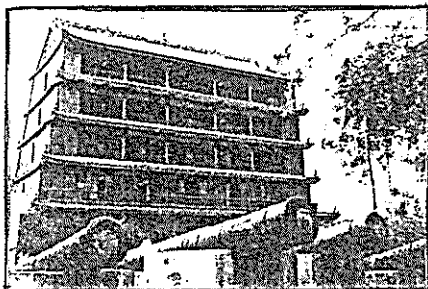
鎮海楼の景観は市内全域を俯瞰できるのと同時に、1階から4階までは歴史も一望できる広州博物館となっている。明の1880年、宋代に造られた広州3城を1つにして拡大築城した楼である。当時は灯台の役目を果たしたと言うから、恐らく此の丘の下は海だったのであろう。

広州は海に臨んでいるから鎮海楼(海を鎮める)と名付け、高さ28m、奥行き16m、紅殻色の壁、緑の瓦の勇壮な姿は、広州・羊城観光のメインの1つだ。

楼の下の広場に据付られている大砲は、アヘン戦争に使われたものであった。当時の清国にとっては英国は海賊の国、不倶戴天の敵、英国に対する苛立ちの憤慨で沸騰していたことだろう。

楼上から木々の緑を臉におさめながら、暫く雑踏を忘れて充電していた。昼食時を迎えて広州酒店に向かうと、通訳は満面笑みを浮べて多々益々弁舌とばかり熱弁をふるった。本当に同憂具眼の士の感じがする。(右は鎮海楼と大砲)

「食は広州に有り」と言われる通りで、流石に



広東料理は「大牢^{ダイラウ}の滋味」がする。大牢とは、中国では祭の時に牛、豚、羊の生け贄^{ニエ}を供えるから、立派な御馳走のおいしい味を意味しており、味覚は極楽の味であった。

広州は古くから貿易港として栄え、物資が集り、豪商が蝟集したから食べ物に贅を尽くしたのであろう。材料の豊富さからすると、四肢のあるものはテーブル以外の物は、総て使うと言われているから驚きである。

飯店の味は淡泊で、こってりに見えても意外にあっさりしており、我々日本人好みの味であった。久し振りの酒池肉林に舌を堪能させ、陳氏書院へと転向した。

陳氏書院 (広東民間工芸館)

海南島に翔ぶまでに若干の余裕が出来たところ、雄弁家の通訳は我々一行に好意を示して、六榕寺西方の陳氏書院にまで足を延ばしてくれた。

広東民間工芸館として公開されている陳氏書院は、俗に陳家祠とも呼ばれており、私も初対面であった。

貿易商として成功を収めた陳氏は祖先を祀って親孝行のためと、一族の子弟の教育のために書院を建てた。

(清の光緒年間の1890年から94年にかけて)

約4000坪の敷地内には前院、後院、東院、西院を主体にした、19の伝統的な南方建築が建ち、贅を極めた個人住宅であった。(上の写真は中庭の景観)

夕暮れ時が迫って薄暗くなった院内に一步足を踏み込むと、金石满堂と形容する建物は、万事は金の世の中と言わんばかりであった。これを阿弥陀様も銭が光ると言うのであろう。

柱といわず、屋根といわず、至る所に施された華麗、繊細、優雅な彫刻群に、呆然と眼が釘付けにされた。

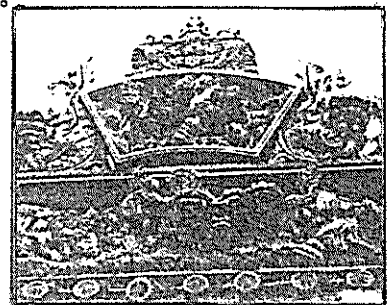
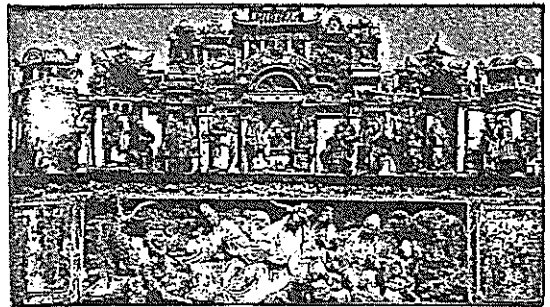
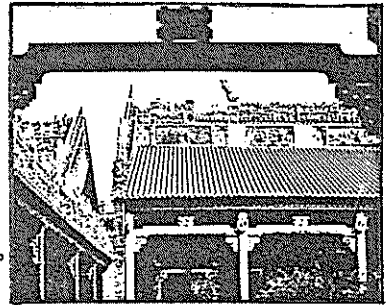
石刻、木彫、磚彫(瓦)、陶塑などが堂院、廊下などの門、窓、欄干、屋根瓦、柱に隙間なく細工されている。建物が大きく飾りが多い此の書院こそ、「輪奐」と云うのであろうか。(上は屋根の彫刻群)

しかもそれは5000人もの生き生きとした人物や動物の塑像であり、何れも「竹林の七賢」「水滸伝」「三国志演戯」などの古典、故物語りに因んだもので、中国史に興味を持った私にとっては親しみ深いものばかりだ。

各部屋の調度品や欄間は紅木(紫檀)で作られ、格調の高い洗練されたものばかりである。特に両親の部屋には太陽を表現した彫刻が飾られ、「芸術は長く人生は短し」の感を抱くのであった。(右は屋根瓦)

文化大革命の時には、陳氏が貧しい人達に援助したと云うことで破壊を免れ、1962年に国が此の書院を買収して、広州民間工芸館としたのである。

嘗て此処を訪れた郭沫若は、天の工でさえ之を作っ



た人間の技術には及ばないだろう、という意味の詩を詠んでいる。中国各地を訪れた私も今まで眼にしたことのない輪奐（建物の高大で壮麗なこと）であり、陽の沈む前にと懸命にシャッターを切っていた。

広州～海南島（右下の地図参照）

陳氏書院の金に糸目をつけない図案花紋、珍禽瑞善、楼台勝景は、言葉の世界を現実の世界に合致させたものである。凡人の我々とは土俵が違い先駆的な人物だったと、想像しながらバスに乗車した。

17:30から朝食と同じ北園レストランで夕食を摂り、19:45に白雲空港を離陸して凶南の翼は、海南島の玄関・海口に向かって飛翔した。

意外なことに国内線でありながら、パスポートの提示を求められた。天安門事件の1周年を控えて警戒が厳重なのだろうか。それとも湾岸戦争の影響であろうか。

海南島との交流が盛んなどみえて、250人乗りのジェット機は満席であった。終生かなわぬ夢だと考えていた海南島、夢の世界が現実となったことは黄梁一炊の夢である。

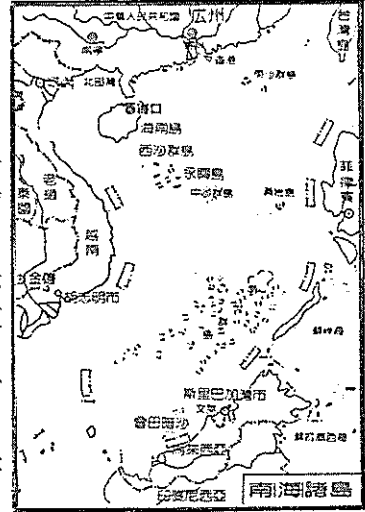
大東亜戦争が開戦して早や50年の歳月が経過した。海南島の名称を知ったのは恐らく開戦の数年前で、日本の南進政策が唱導されていたからであろう。その間の人生を懐古すると、一生のうちで素晴らしい時期は実に短いものであったと言える。

時の流れと自己の無力を感じ、運命もまた然りだと思っていると、鳴物入りで宣伝する海南島の玄関、海口空港に向かって着陸態勢に入っていた。時は20:50、飛行時間は約1時間である。

北回帰線の南に位置する熱帯の海口は、強風が吹き荒れて暑さを感じない。歓楽の街のように煌々と輝くネオンの光が車窓を照らし、人目を引き付ける美的効果の役割を果たしていた。

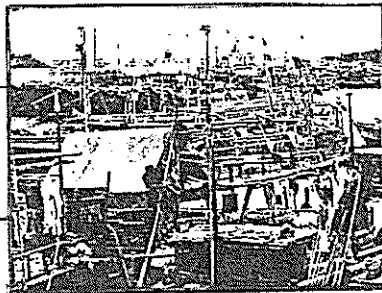
社会主義国にしては物珍しいネオン街は甘美な雰囲気なたたえている。外見だけの辺幅を飾り立てているのではないか。「遼東の豕」の感じさえするのであった。

鵬程万里の彼方の海南島、積年の望みが順風満帆のように叶えられ、22階建ての豪華ホテル・海口国際金融大廈に旅装を解くことになった。命あつての物种と言わなければならない。



右の写真は海南島・海口

「ジャンク」の景観

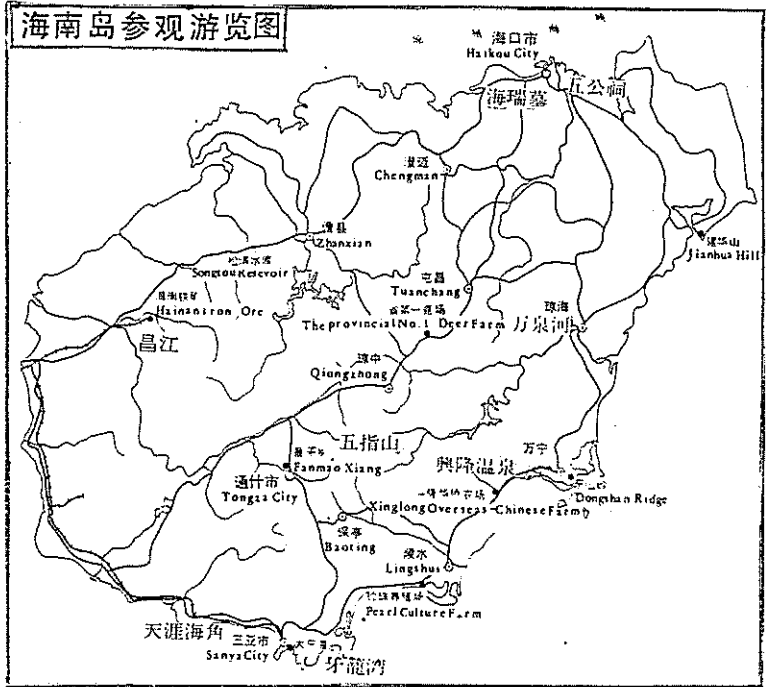


海南島の概要 ケイ (別名は瓊州島)

歴史的には既に紀元前、漢の武帝の時に珠崖・儋耳両郡が、宋時代には瓊州が置かれ

(大陸との海峡を瓊州海峡という)、三国時代に南海沿岸各地の一名であった「海南」が宋代から島の名前として定着した。

海南島は3つの古称をもっている。1に「珠崖」(真珠が採れるから)、2に儋耳(タンジとって臉に花紋を刻み、顔に色を塗り、耳ぶたに環を垂した古い習慣による)、3に台(瓊=たま、瓊山にちなむ)である。(上は海南島全土の平面図と主要都市)



香港の西南約500kmに位置する熱帯の島で、日本の九州とほぼ同じ面積である。島の中央に標高1867mの五指山があり、これから四方に支脈を出しているが概して低く、北部と海岸線には平地が多い。

四海は海だが海岸線は湾曲が少なく、遠浅のために良港に恵まれない。米は年に3回、養蚕は8回の収穫があり、島民の勤儉心と相俟って一般に富裕である。(これは中国内でのことで先進国との比較ではない)

海南島は産物が豊富なことから「南海明珠」と呼ばれている。主な産物は米、落花生、芋を始め椰子、ゴム、胡椒、コーヒ、砂糖黍などである。又、森林資源、水産資源も豊富で、南部には中国有数の油田があり、ゴムは最も主要な産物として近年その需要が増えている。

人口650万のうち漢民族が最も多く約500万、黎族81万、苗族4万、残りは回族、壮族などの少数民族や華僑である。そのため黎族苗族自治州が置かれている。

1983年に中国政府が海南島の新開発を決定して以来、経済特別区と同様の特典が与えられたが、1988年、特別立法によって省に昇格し、世界各国の投資家たちの熱い視線を浴びている。

海南島は海のシルクロードの途上にある島であり、今次旅行の目的の総仕上げとして興味津々、又、戦時中は日本軍の中継基地の1つでもあった。(瓊=中国略字は琼)

3月15日 (金) 晴

海口～通什

昨夜は海口のネオンの夜景に戸惑うばかりであった。早起きは健康、有徳、富裕の3つの美德をもつと謂れ、5時に眼覚めて窓の外を眺めながら、南国の空気を腹一杯吸い込んだ。

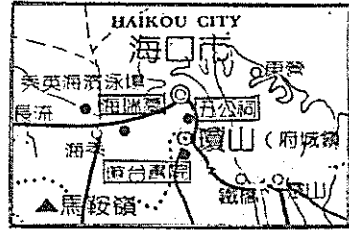
弾丸黒子の狭い土地のコンクリートの世界に住む我々が、自然に親しみ自然と交わることの楽しさは、自然は常に偽りがなく正直だからであろう。早速朝の散策に出掛けた。海口公園の近くに建つ海口国際金融大廈はアメリカとの合弁で、附近にはブラジルが原産地と云われる椰子の並木が続いていた。椰子の寿命は70年くらいで金の成る木と言うらしく、勿論、海南島の輸出品である。

すでに唐の時代に漁港として栄えていたという海口が、本格的に貿易港となったのは1858年の天津条約締結後であった。昔あった城壁は明の1394年、倭寇の侵入を防ぐために構築したもので、その時から日本との交流があったらしい。

今世紀初頭には一漁港に過ぎなかった海口は、今では人口40万の都市に発達している。戦時中の私の知識では、大陸側の雷州半島の海安港と相対峙し、香港と海防（ベトナムのハイホン港）間の中継地に過ぎなかった。歴史の歯車の大きく回転している今日、時代のバスに乗り遅れまいと懸命のようである。

朝食を終えて8時に出発。本日の宿泊地の通什（78頁地図の中央左下）までの約250kmのバスの旅となった。灼熱の陽光が燦々として降り注ぐ中、椰子やソテツの並木が整然と植えられたメンストリートを、三輪タクシーは風を切って走っていた。

一步郊外に出ると閑古鳥が鳴く有様で、出発して約20分を経過した頃に、海口の観光名所「海瑞の墓」に到着した。

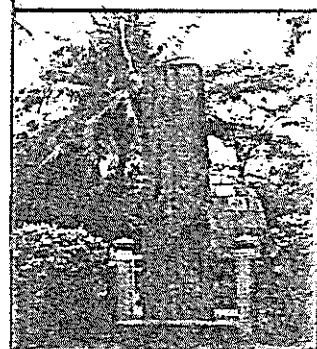
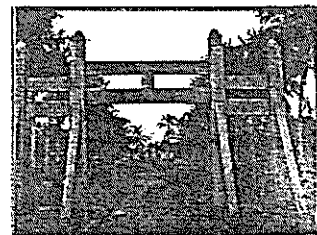


海瑞の墓 (上の地図参照)

海瑞は海南島出身の明代の政治家である。海忠介公とも言われている。明の正徳8年（1514）に海南島瓊山県に生まれ、明の万暦15年（1587）に没し、字は汝、号は剛峰という。

3歳のとき父は病死し、母から字を教わり、13歳のとき私塾で学び、27歳にして学校に就学した。その後科学の試験に合格して進士となり、福建省南平県の教諭を経て淳安県知事（浙江省）、興国県知事（江西省）を歴任。

51歳のとき雲南省の司主事となったが、清廉潔白な氏は大地主や悪徳役人を訴えて朝野を驚かした。53歳のときの2月、横暴な権力者に反抗したため入獄。嘉靖帝の死後の12月（1566）、恩赦によって出獄して復職し兵部武庫司主事となる。（右は石碑と海瑞の墓）



その後、榮進して55歳で南京通政司になり、提督軍務、応天巡撫の職に累進し、57歳の隆慶4年（1570）に瓊山に帰って閉居した。

万曆3年（1575）に母が病死し、1581年に忘備録を2巻書いている。70歳になって再び南京察院右金部御史の職に就いたが病に倒れ、74歳で世を去る。朝廷から「太子少保」の名を贈られ、諡を忠介、海口郊外の浜涯村に葬られた。

明代の有力な地方政治家であった彼は、横暴な権力者に抗して人民のために尽くした人で、特に少数民族の為に力を尽くしている。大地主や悪質な役人を憎み、民衆のために身を挺した清廉潔白な人物であったからこそ、今日でも浜涯村に墓が建立されているのである。（海口市海瑞墓管理处発行の資料を参考）

1589年に建造された墓は約350年後の文化大革命の時、海瑞の事跡が政治に悪用された為に徹底的な破壊を蒙った。しかし現在は修復されている。

古木に覆われて敷地の入口に、「粵東正氣」と「旨」と彫られた牌坊が立っていた。「旨」は皇帝は日の上という意味で、「粵東正氣」は清廉潔白を現わしている。皇帝から太子少保の名が贈られた人物に相応しい牌坊である。（前頁の門の写真）

鬱蒼として広大な敷地の中の参道を進むと、その奥に花崗石の大墓碑が建っていた。碑には「海瑞署官」と彫られていたが、「署官」とは大臣を意味している。墓碑の後方にある円形をした煉瓦の墓は、彼の遺体を安置していた。（前頁の下の写真）

入口の牌坊の傍らに建った海瑞陳列館には、写真の外に彼の著書や年表、明代の海瑞伝などが陳列されていた。海瑞に関する書籍2冊を求めて辞去する。

海南島では泰斗の人物で、入獄された為に更に彼の名声は高まったのである。人間の価値は「棺を蓋って事定まる」という故事の通りであった。

観鹿園（右の地図では養鹿場、右上）

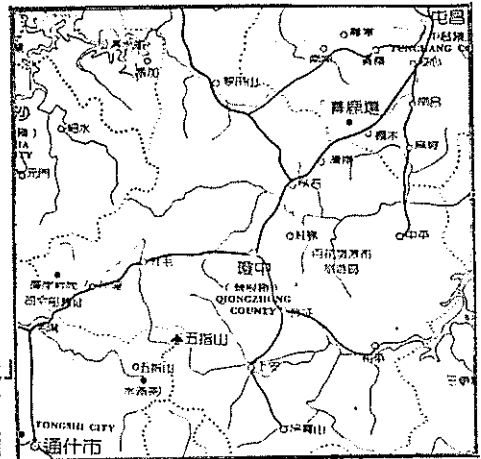
海口の観光は海瑞の墓で終わり、他の観光名所の五公祠などは帰路に訪れることになった。我々一行は海南島の真中を走る中央道の大平原を南下した。（78頁地図参照）

直線コースの縦断道路は簡易舗装され、対向車のいない街道は高速道路なみのスピードだ。人間は実に勝手なもので、無人の野を疾走して風の音を聞いていると、都会の雑踏が恋しくなってくる。不思議な現象だ。

退屈のぎにホテルで求めた新聞「海南日報」に目を通した。今回の旅に出て初めて見る新聞だ。新華社電では軍（中国）の強化と軍民の団結を訴え、社会主義制度の鞏固な確立を強調している。

このような記事は連日のことで、湾岸戦争を契機に一段と富国強兵を重視する保守派の発言が強くなり、「権力は銃口から生まれる」と云う軍事国家であることは、疑う余地はない。

海南省人民政府発行の地方新聞のためか、世界情勢に関する記事は全く見えない。



専ら省政府の業績を鼓吸いしているばかりで、文盲率20%、就学率も80%以下の島民では新聞は読まず、我が事以外に関心はないからであろう。

省民に商工業の偉大な発展と経済5ヶ年計画に対する協力を訴え、政府は運輸・郵政業務の進展に力を注いでいると述べている。又、各国及び中国各省の視察団の来訪、旅行業務は中国の中でも先進的效果をあげている等、自画自賛の記事が多い。

その他の雑記事は森林火災の予防、海域水質汚染の防止、交通法規の遵守、婦人の産児制限や保険衛生問題、政治は表彰するに限るというのか、各方面の表彰者の氏名が紙面を埋め尽くしていた。

日本人として眼に着いたのは「TOYOTA」の横文字であった。豊田皇冠汽車(中国)有限公司の名称で、でかでかと写真を掲載。ガソリンの効率抜群の経済車、高い耐久性を強調。豊かな海南島では売れ行きが好調なのであろうか。思い出されるのは海南島政府高官の車の横流し事件である。

海南島の通訳の日本語は誠にお粗末であった。優秀な人材は本土で活躍し、貴州省出身の彼は海南島に飛ばされた感じだ。(貴州省は本当に田舎で名前だけでもと貴州と着けた省である)

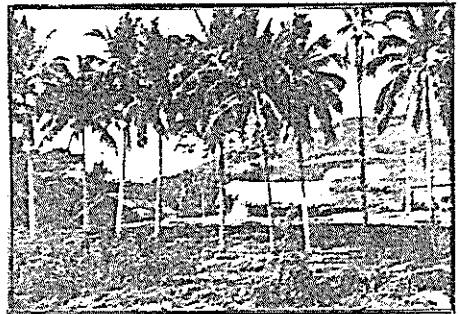
通訳の説明では此の島の平均寿命は男性は60歳、女性は80歳で両者に格段の差がある。これは男性の性欲の問題だと述べたいた。?

田園地帯は田植えの真っ最中だが一方では、輸送力が貧弱なために西瓜やパイナップルに置き去りにされて腐敗している。省政府は輸送力の増強を記事にしていたが、これでは行政があるのだろうか。早急に加工工場の建設も必要だ。

屯昌(前頁地図右上)を流れる南渡江の濁った水は、緩慢に流れて人間の悩みや悲しみを流れに乗せ、大海に向かって押し流すような悠揚迫らずと言った感じだ。

北半分は平地となっている海南島は割合に裕福そうに見えるが、成育した稻田の中にも農家は疎らで人影は見えず、椰子の中に少しばかりの家が点在するのみである。廃屋も眼に映っていたが世界的な農業の衰退であろうか。

屯昌を過ぎた頃より南に連峰の遠影が雲の上顔を出し、500年前に噴火した溶岩の石ころが多くなってきた。田圃の中では除草、除虫作業をするように餌をあさる家鴨は一石二鳥だ。



農村人口の稀薄は近親相姦を招き、知能が低下して1200万人以上の精神薄弱者を抱える中国、その不幸も海南島農民も其の例に漏れず、深刻切実な問題である。

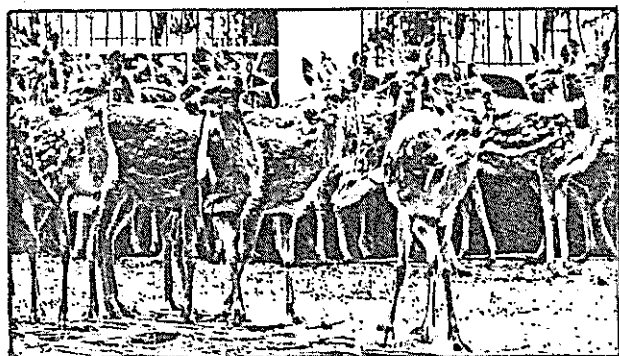
井戸の中の蛙、文明国を知らずといった通訳は、海南島のように発達した所があるだろうかと述べていた。苦笑を通り越して開いた口が塞がらない。貴州省の田舎出身の彼にとっては、海南島が物凄く開けていると思うのも無理のない事かも知れない。

やがて前方に陽光を美しく反射している湖水が現われると、バスは其処に停車した。前以て通訳は鹿の放牧の見学だと宣伝していたが、彼は放牧の意味を理解しているのだろうか。(位置は前頁地図参照)(上の写真は田園風景)

案内された放牧場の看板には観鹿園と表示されていた。数棟の小屋に100頭ばかりの鹿が養われているだけで、彼に奈良の鹿を見せてやりたいほどである。

養鹿棟を一瞥しただけで売店に案内され、早速説明が始まった。鹿の角で作った薬、角から採った血酒、鹿油などの製品の販売が主目的であった。

鹿の角は滋養強請剤として中国人に好まれ、下痢、目眩、神経衰弱、低血圧などに効果があるらしい。一行の人達は金余り現象を遺憾なく発揮して、盛んに買い求めていた。(上の写真は数棟の養鹿棟内で飼育する鹿の群)



看板の簡介(説明)を読むと、ここの鹿は「水鹿」と「梅花鹿」が主体で、世界中でも海南島にしかない「坡鹿」も僅かにいると書いていた。坡鹿はパンダや金糸猿に匹敵する珍獣で、現在海南島の南部に約80頭ほど飼育されていると言う。しかしこの珍鹿も見せることなく、騙された養鹿場の感じが強い。

五指山 (右図と78頁地図参照)

平地が続く海南島の北半分を踏破し、五指山系に入った。さほど高くない山脈はなだらかな稜線を描き、麓には南国らしくゴムや椰子の木が生えており、人や車の往来は少なく人口密度は希薄であった。

閑古鳥が鳴くような街道に熱帯の強烈な太陽の降り注ぎ、殺風景な景観はやがて微かな恍惚感を誘ってくる。

自分の人生を如何にしたら良いのかと言う刺激もなく、漫然と暮らす人達、彼等には精神的な飢餓があるのだろうか。此処の住民も大陸の同胞と同じく、「没法子」という諦めの心情が支配しているようだ。

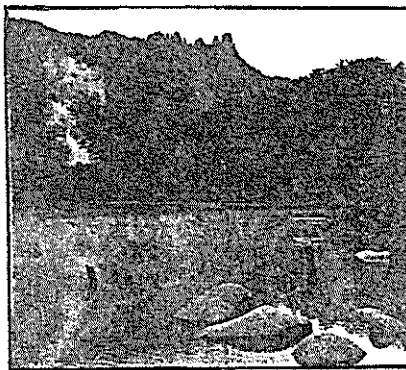
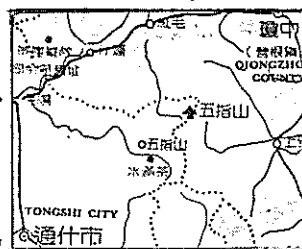
これを鷹揚と言うのであろうか。「鷹が舞い上がる」、我が国ではオウヨウと読むことから「大様」の当て字に使われ、こせつかない意味に使われているが、彼等の心情は鷹揚とは思えない。

中県の旅行社で昼食を摂り、再び南下したが魅力の乏しい光景が続くばかりであった。突然、白雲が柵引き東に聳える連山が視界に入り、刻々と山容は変化して行く中でバスは紅毛部落で停車した。(上の地図参照)

バスを降りた瞬間、僥倖にも白雲は流れて湖面の向こうに、明瞭な五指山が雄姿を現わした。間髪入れずシャッターを切ると忽ちにして、山容は再び雲の影に隠れてしまった。(右は五指山)

静かな谷間の湖水の彼方に人煙が昇る大原始林、熱帯雨林の清らかな細流の中に水牛が遊び、椰子やゴム林に白煙の立ち昇る小さな部落が見えていた。

海拔1867mが最高峰の五指山は海難島のシン



ボルで、五指山を水源とする河川は150本にも達し、全島の平原を潤す母なる山であった。

海南島を象徴する山だけに五指山には伝説が多く、その1つに次ぎのような物語がある。

遠い昔、この辺に黎族の夫婦が住んでいた。5人の子供が生まれて夫婦は昼夜兼行で働いたが、生活は苦しかった。

或時、夫婦に同情した一人の仙人が、宝の鋤と刀を彼等に贈った。夫婦たちは鋤と刀を使って働き、どうにか一家の生活も楽になった。ところがそれを知った魔王は、妖兵を派遣して一家を火攻め、水攻め、風攻めにして、宝の鋤と刀を奪い取ろうとして夫婦を死地に陥れた。

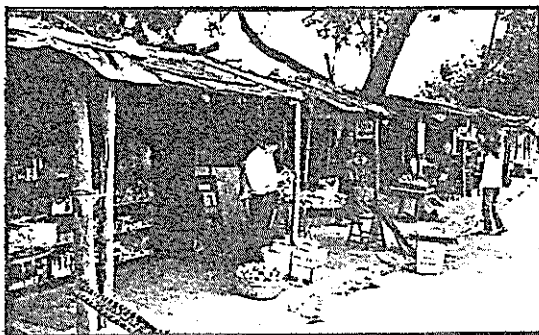
死ぬ間際に夫婦は5人の子供に必ずこの宝を守るようにと遺言した。両親の言葉を肝に銘じた5人の兄弟は、魔王と果敢に死闘を繰り広げたが力およばず、遂に殺されてしまった。

しかし5人の兄弟の英雄的な行為に感動した森の熊や豹、蟻、蜂、鳥たちが立上り、遂に魔王と妖兵を打ち滅ぼした。そして熊たちは泥土や石を運んで5人を葬った。

長い年月が過ぎ、5人の墳墓はいつしか5つの山になった。遠くから眺めると5本の指のように見えるから、五指山と呼ぶようになったと言う。(前頁の写真)

五指山を展望する絶好の地「紅毛」部落には、少数民族の開いたトタン葺きの露天商が並んでいた。飲料水や果物が主なもので、数少ない観光客を相手というよりも、僅かなドライバーが最大の客ではないだろうか。(上の写真は露天商)

その中に五指山鷹や猿が養われ、珍しい光景だと写真を撮って記念とした。



少数民族の通什 (78頁地図参照)

鶏群の一鶴のように聳えた五指山とも別れ、バスは一目散に通什へと疾走した。山村の農民は焼畑農業と山林で生計を立てているのか、少しばかりの育ちの悪い作物や茶畑だけが見えていた。

漢民族の進入で山奥に追いやられた少数民族は、希望のない憔悴したような眼で我々を見詰めている。瀕死の形相を帯びた少数民族に対し、政治は然るべき対策を採っている形跡は見られず、判官墨蹟になって同情せざるを得ない。

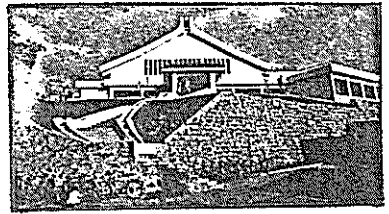
「海南省民族博物館」

走行すること小1時間、開豁とした盆地に高層建築が建った通什の市街が眼に映った。バスは通什盆地を見渡す高台に登り、丘に建つ民族博物館の見学に移った。

博物館の壁に書いた序言には次のように記されていた。

海南島には古代から黎族の先住民族が棲息し、後に入ってきた漢、苗、回の各民族と力を合わせて開発に貢献した。黎、漢、苗、回族の労働人民は、多彩で豊かな物質文化と精神文化を持っていた。本館にはこれらの民族の光輝ある文化財を陳列してあると。勿論、漢族政府首脳が書いた臭いの強い序文である。

本館は海南黎族苗族自治州の人民政府が1981年秋に着工し、1986年10月1日に完成、海南黎族苗族自治州博物館と称したが、海南省に昇格した1987年に海南省民族博物館と改称したという。



中国共産党の指導のもとに各民族は和睦に努め、民族精神の高揚にを計り、自力更生、難苦奮闘、美しい家庭を造り、各種族が協力して中国に貢献していると書いていた。この簡介を見る限り、漢民族の中国共産党が総ての実権を掌握し、黎族回族自治州とは名ばかりである。

丘から俯瞰する通什は少数民族の街の雰囲気は感じられず、海口や瓊中と同じ漢民族の街の感じがする。奇麗に見える通什は又、三亜（78頁地図参照）に次ぐ海南島南部の10万の都市、「翡翠城」という美しい別名をもっている。

通什とは黎族の言葉で「肥沃な河と谷」という意味があり、古名を「衝山」とも言われているが、これは四方は山で囲まれ、街の中を「南聖河」の冷たい水が流れているからであろう。

「通什旅遊山荘」

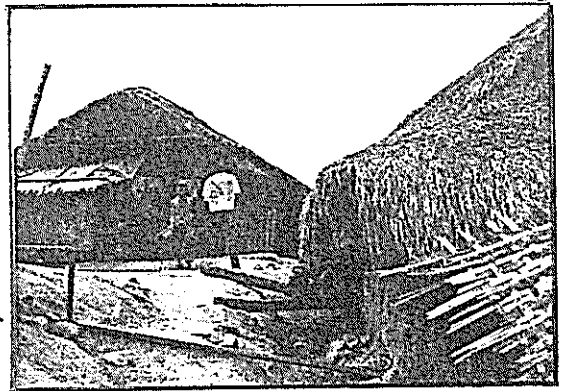
一行は市街を睥睨するように建った博物館を去り、今日宿泊する通什旅遊山荘に向かった。街の南の高台に聳える近代的なホテルは香港企業との合併であり、将来の観光を目指した洒落た造りであった。（上の写真は通什旅遊山荘）

旅装を解いて直ぐ独りで市街を散策したところ、美しい街の中を唾液を垂らした牛の群れが悠々と歩いていた。中国の特徴であるように外観ばかり飾った街は、翡翠城のイメージを吹っ飛ばしてしまった。

黎族村の見学

黎族は別名をロイと称し、海南島の山地に棲むというか、漢民族の進入によって山岳地方に追いやられた民族である。土着の黎族と移住してきた黎族がいて分派が多く、マレイ系とタイ系が主流をなしている。母権制の習慣が残存し、黎語は広義のタイ語に属している。

海南島と同じく2千年の民族の歴史をもつ黎族は、現在この島以外には住まず、人口は約80万で男性は狩猟、女性は農業を主としている。彼等は独特な生活様式や文化をかたくなに守り続けているが、それでも若者の村離れは此処でも問題になっているらしい。



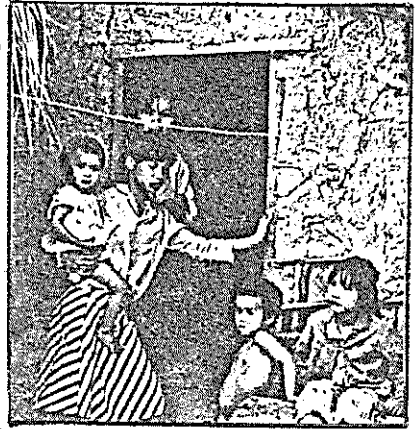
我々は通什旅遊山荘から1kmほど離れた黎族部落の見学に出掛けた。これは観光用に一部を移住させたもので、一般に開放して自由に見学は許されている。

人の足跡が道になったような径を行くと、そこに泥土で造った明かり窓もない、舟型の素朴な藁小屋が点在して集落を成していた。（上の写真は部落の一部）

事実は小説より奇なりと言われるが、想像していたよりも貧しい生活ぶり、測隠の情を禁じえない。世の中は気の毒の入れ物の感じがする。

異境におることも忘れて視細胞は刺激され、好奇心な眼で見詰めてカメラを向けると、「顔に紅葉を散らす」ように若い母親は恥ずかしさの余り、頬を赤らめて室内に隠れてしまった。

室内に電燈がある訳ではなく、我々が遠ざかると再び戸外に出ていた。撮りたい一心から気付かれないように、遠く離れたところから望遠でカメラに収めた。(右はその一家の写真)



南方民族は早熟のために12、3歳で子供を生み、生命の再生と更新の驚異が感じられる。小さくても女の子は肌着を身に纏っているが、男の子はパンツも履かずに自然の姿、横目で見なければならぬ貧しさに、哀れさが込み上げてくる。

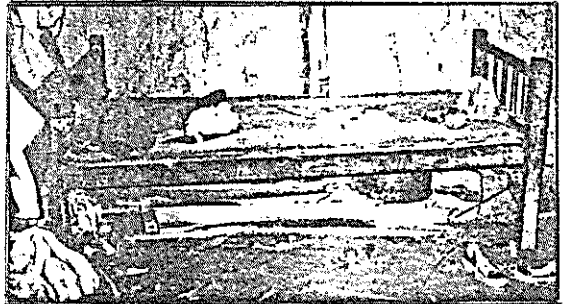
無味乾燥の藁葺きの住み家の前で、若い娘達は懸命に民族衣装を織っていた。(右の写真)

彼女等は何ら羞恥心もなく撮影に応じてくれたが、万事塞翁ケ馬で何が幸福か不孝か、判らない感じであった。



彼女らにとっては住居は雨と夜露を凌ぐ場所ではないのだろう。誰も居らない家の中を覗いて見ると、ワンルームマンションよりも狭い。真っ暗な泥土の空間に木の寝台があるだけで、布団らしい物は見当らず簡素な生活だ。(右の写真)

熱帯の恵まれた気候では昼間は外に出ているより仕方がない。男は狩に出掛け女は畑仕事、炊事も屋外だから台所らしいものはなく、低い天井の屋内の片隅に、鍋釜が乱雑に置かれていた。

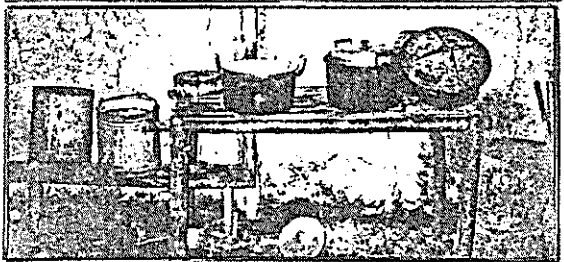


(右は室内の様)

文明の産物や人工的環境に囲まれている我々は、果たして彼等より幸せなのであろうかと、ふと考える。

珍しい外国人に驚異の眼差しを向ける彼等の瞳の中に、幼い頃に失った新鮮な輝きを見出したような気がする。

これらは前世からの因果だと思っていたところ、ホテル従業員の女性が案内に駆け付けて来た。彼女は縁に美事な刺繍の装飾がついた衣装を身に纏い、頭にも刺繍の帽子を被っていた。



彼女はくりっとした丸い大きな瞳に引き締まった口元、それに美人で良く喋べり、村一番の娘であろう。一方では村の若い男性が「五指山」の看板を掲げた演芸場を造っていた。観光客に披露する彼等自慢の踊りを見せる場所造りであった。

山が深く類稀な風習を持ったからこそ秘境に住み、其れ其れ独特の風俗習慣を守り、我々にユニークな生活を見せてくれた。人間は「普天の下、率土の浜」というのか、天の下はどこでも、地の続くところはどこでも、棲めるのである。

この世の中は小説に出てくるよりも不思議で複雑なことが多く、飽食暖衣の我々は薄幸な人たち、弱い立場の者に同情し、声援を送る心情を持たなければならない。

西の山に陽は沈みかけ、紫色の空に映える高嶺は夜の趣を知らせていた。世の中には無縁の人はいないと云った感情に打たれながら帰路につくと、盛りのついた七面鳥は大きく羽を拡げていた。

夕食後、黎族の民族舞踊がホテルの広間で開かれた。彼女等は鮮やかな色彩の民族衣装を身に纏い、頭にも特殊な頭巾を被り、思い切り沢山なアクセサリーを着けて、妖精のように舞っていた。

明眸皓齒の娘たちは愛想を振り撒きながら、愛嬌のある仕草で米を搗く踊りを披露した。戦いに敗れてビルマから国境を越えてタイに後退した時、この眼で見た少数民族の姿が自然に思い出され、時計の針が50年前に逆戻りしたような感じがする。

耳を澄ましてじっと見詰めていると、何となく彼女等と対話してみたいような気持が高まって来た。それは幸福は独りで歩いて来ないと言うことで、中共政府の少数民族に対する手厚い対策を望む強い期待であった。

3月16日

(土) 晴

苗族村の見学 (下の地図参照)

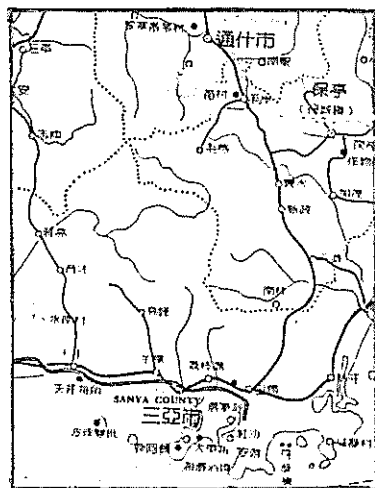
世の中が発達するにつれて人間の悪智恵が発達しがちである。然し昨夕は悪智恵のない原始生活を営む黎族を見て、天淵の差を感じながら心の痛む思いがした。

早朝の南聖河に浮かぶ水鳥の群は、白い胸毛に瑠璃色の羽根を胴体にぴったりと着け、滑るように泳いでいた。

空に漂う雲や流れる水のように、通什盆地は自然のままに実に爽やかであった。誠に行雲流水の旅に相応しい光景を呈していた。

8:30に山荘を発ち、南方100km足らずの三亚(上の地図参照)に向ったところ、先ず南聖河畔に沿って数百mも並ぶ青空市場の見学となった。そこには黎族苗族の人達の焼畑農業で栽培した営々辛苦の野菜も混じっていた。師範大学の前で再び乗車して郊外に出た。街道は南国らしくゴム林が続ぎ、椰子やバナナの木も威勢よく繁って、自然は恒常不変だと人間様を嘲笑しているようであった。

走行すること約30分、「苗村」の広場になったところに到着した。愛嬌のある明



るい目と真っ白い歯をした少女たちが顔を化粧し、美しい民族衣装を身につけて一行を出迎えていた。

(右は出迎えた苗族の少女たち)

バスを降りた途端、米搗きバツタのように御辞儀をして手の平を上に向け、施しをせがむ乞食のようであった。

持参してきた飴を分配しようとしても我先にと手を出し、血相を変えて私の手を引っ掻いて奪っていく有様である。中には妖艶な美女までが子供を押し退けて奪いあい、制止しようとしても言葉が通じない。



漸く少女たちを並ばせて写真を撮り、お礼の意味で平等に飴を渡そうとすると、再び奪いあい合戦が始まって、宥めることも出来ない状態だ。

現金なもので恵んでやる物がなくなると子供達は分散し、今度は入れ代わって娘から老女にいたるまで、手作りの民芸品を10ドル、20ドルと押し売りの開始だ。

ビルマやタイの山岳民族の民芸品とそつくりの物が多く、何か相通じるものがあるのは実に不思議な現象で、遠くなった戦陣の昔を思い出していた。

広場の周りには藁葺きの露天商が軒を並べ、主に民族衣装を売っている。擲風沐雨の生活をする苗族に同情する一行は、それぞれ施しの積りで購入していた。

苗族は通称をミャオ族と云い、大陸の貴州省を中心に雲南、四川省に広がり、中国南西から海南島、インドシナ北部に分布する農耕民族で、長年の漢族との抗争にも屈しなかった独立心の旺盛な民族である。

苗族は元は中国南西部の住民の総称であった。中国文化の影響もあったが独自の原始的な農耕文化をもち、苗語はタイ・シナ語科に属している。

漢民族が海南島に移住し始めたのは紀元前2世紀頃からで、明、清時代になつて急激に増加した。戦乱などによって逃げてきた難民が最も多く、商人、辺境の守備兵、役人などがそれに続いている。

海南島には漢民族がやってくる以前から住んでいたのが黎族であつた。彼等は旧石器時代に現在の広西チワン族自治区や、広東などの大陸から海を渡ってやってきた。しかし今では黎族は海南島にしか住んでいない。それが通什を中心にした黎俗苗族自治州に住んでいる。

黎族に次いで多いのが苗族である。彼等は主に大陸の華南や雲南省一帯に居住している。明代にその一部が兵士として派遣され、それが移住の始まりだと言われている。

(現在は約4万人である)

彼等は苗語を話さず、広西チワン族自治区に住むヤオ族の言葉を話すと言う。無論、海南語も話している。苗俗の婦人は衣装を染めたり刺繍するのを好み、娘は頭に刺繍した頭巾を被っている。これは黎族も同様だ。

我々は黎族も苗族にも接触したが見分けはつかない。彼等は顔を見ただけで何の人種か解かるというから不思議である。

苗族たちとの対面は約30分に過ぎなかったが其の印象は強烈で、熱い惜別の情が込み上げていた。いろいろなことが考えられる中で、「冥土の道に王なし」と云う言葉を送りたい。強く生き抜いて民族は美風を守って団結し、豊かな生活の向上発展を祈りたいものである。

ピンロウ

檳榔樹

苗族や黎族と接していると、一日に腸が九度もよじれるような、気の毒な思いに駆られた。文盲率は30%に近く、学校にも行かれない子供たちに同情を寄せ、手を振りながらバスに乗車して南進した。

通訳は突然、三亜街道の途中の部落で停車を命じた。我々に檳榔樹の木を見せることが目的で、その好意には感謝する。

ピルマやタイなどの女性が檳榔樹の実を噛み、赤い汁を口から吐き出す姿はよく眼にしたが、私は実物の実を見た経験がなかった。

10軒ばかりの藁葺きの苗族部落には、虚空に伸びた椰子が生えていた。檳榔樹を全く知らない我々は椰子ばかりだと眺めていると、通訳は椰子に混じった1本の木を指差し、これが檳榔樹だと教えた。椰子の木は鈴なりに実を付け、実を付けていない木が檳榔樹という新知識を得た。

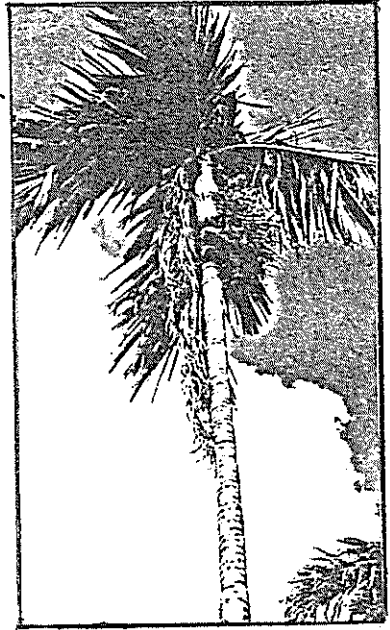
よく観察すると、椰子の実の成るところに黄色を帯びた花が垂れ下がっているのが見えていた。(上の葉の右下に垂れ下がったもの)

春に花が咲き、夏から秋にかけてレモン型の実を成らすらしい。上の写真の左側に垂れ下がっているのは昨年のもので、まるで長い髪をなびかせながら群舞する乙女の髪に似ている。

檳榔樹の実を黎族苗族の生活、冠婚葬祭や接客には欠かすことはできず、女性には切っても切れないほどの縁がある。彼女等は男が酒やタバコを吸うように、何時でも何処でも檳榔樹の実を噛んでいる。

檳榔樹の実を扶留葉という緑の葉に、果実の一片と石灰ひとつまみを包み、それを一緒に口の中で噛む。まもなく唾液が赤味を帯びてくる。一旦その唾液を吐き捨て、また噛む。これを繰り返しているうちに、ほのかな香りが漂い始め、やがて顔がほてって「檳榔樹に酔う」のである。

黎族や苗族の婦人に口紅をつけたように口中の紅い人が多いのは、檳榔樹の実を噛むからで、それが習慣化したのは殺菌、回虫駆除や消化剤の働きがあるからだと言う。自然には無駄なものは何一つないのであった。



苗族の祠

檳榔樹の生えた集落の、道路を隔てた反対側の山中に、小さな「祠」のようなものが見えていた。

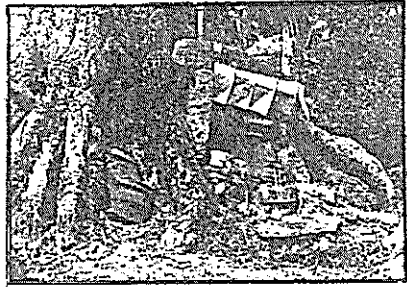
なんとなくしに独りで山に入ると、大木の根本の盛り上がった穴を利用して、何かが祀ってあるように見えていた。(右の写真の木の根の穴)

丁度その時、村人の一人が道路を歩いてこちらに近づき、私の眼と合った。手を合わせて合掌して見せると、彼はそうだと云うふうに首を縦に振って肯定した。矢張り村の鎮守の神か祖先を祀った祠である。「祠」は「神庫」の意味で私は合掌しながら木の根株の中を覗いて見た。

写真のように上部に白い紙片が貼り付けてあったが、内部の穴には祭神のようなものはない。祠の前には素焼きの鉢に数本の線香が立てられ、水を入れた茶碗が供えてあるだけの簡素なものであった。魂の安息所としては誠にお粗末なもので、中に遺骨が祀られているのだろうか。

「李に報い始めに反せ」(報本反始)という言葉があるが、祖先を大事にして其の恩に報いるのは人間だけのものである。貧困な生活をする少数民族の祖先崇拜の姿を眼にすると、華美飽食の贅を尽くして暮らす我々に、胸中をえぐり取るような思いを抱かせた。

「あだし野の露(墓地)、鳥辺野の煙(火葬場)」同じ人間に生れ、このように差のあることに無常を感じながら、祠を去ってバスに戻った。



三亜 (78及び86頁地図参照)

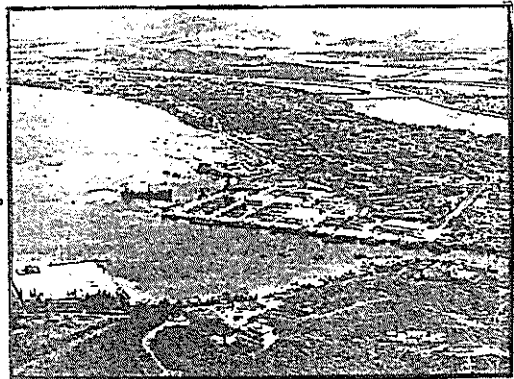
バスに乗車すると通訳は昼食の料理の他に、希望者から三亜名物の「鮑」^{アワビ}と「伊勢海老」の注文を取り付けた。日本円にして一人前千円ということで、一行全員は南海の鮮魚料理に魅力を感じて注文に承諾した。

やがて長かった五指山脈を通り抜けて平野に臨むと、そこは高層ビルの建ち並ぶ三亜の市街であった。熱帯の情緒に満ちた四季常夏の楽園都市は、椰子の並木が海岸線に蜿蜒と延びていた。(右は三亜市街)

昔から海南島南部の政治、経済、文化の中心地で漁港として栄えた。唐の大宝7年、鑑真和上は5度目の日本渡航を企てたが、台風で三亜西方の寧遠河口に漂着し、そこに大雲寺を建てたことは良く知られている。

崖県の県庁所在地の三亜は少数民族11万人を含めて37万(市内人口10万)、3月半ばの今日の気温は34度であった。

眩しい太陽が焼き付ける細長い町を眺めながら、鹿回頭半島の裾に建った新築草々



の金陵渡假村（ホテル名）に着くと、時計の針は12時を指していた。

ホテルで小休止の後、昼食のために市街に向ったところ、海岸一帯の海域には漁船がひしめき、「鮮魚市巷道」と呼ばれるメンストリートであった。

（右の写真は鮮魚市巷道）

翠園酒家での昼食となつて通訳が幹旋した鮑と伊勢海老が運ばれた。すると、

一行の口から喧々囂々とした非難の音が上がった。期待に反して鮑は3cm程度、伊勢海老も5cmほどのものに過ぎず、文句の出るのは無理もないことである。

通訳のペテンに引っ掛かって開いた口が塞がらず、針小棒大な彼の話に騙されてしまった。日本の鮑や伊勢海老はこんなに大きいものだとして手で示すと、三亜ではこれが鮑であり伊勢海老だと反論し、結局は水掛論であった。矢張り貴州の山奥育ちの彼は井戸の中の蛙であった。

理屈と齋薬は何処にでも着くもので、儲けようとしたのか好意的なのか不明だが、長舌する通訳の弁解には納得がいかず、このような不愉快な食事は初めてのことだ。

天涯海角（右の地図参照）

木に餅がなるようなうま過ぎる食事は終わり、市内から西方24kmの天涯海角へと海浜道路を疾走した。

郊外に出ると海岸線に沿った鉄道線路が見えてきた。この鉄道は旧日本軍が敷設したもので、昌江（78頁地図参照）から鉄鉱石を輸送するためであった。（右下の写真）

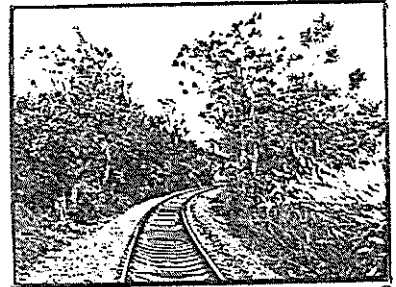
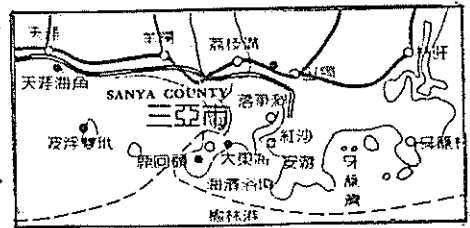
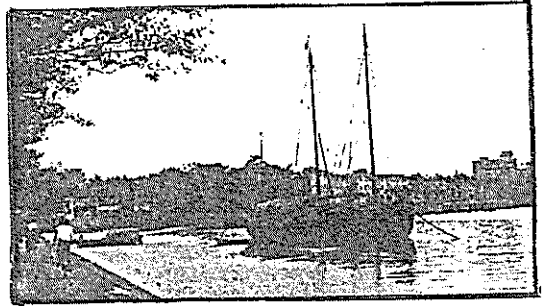
「夏草や兵どもが夢のあと」である。このような海南島の果てまでも進出していたとは驚きであり、飽くなき住民の労働を強制した光景を思い浮かべると、空恐ろしく胸に痛みを感じる。

何処までも続くレールには怨恨が含まれているようで、自分の人生も此のレールの上を走る列車に、繋がっているようにも思えるのであった。

灼熱の太陽が焼き付ける車窓に小さなモスクが映り、砂地の中に土葬の墓地が見えている。この海浜一帯には4000人の回族が住んでおり、彼等は海のシルクロードを通り流れ着いたのであろうか。やはり三亜もシルクロードの途上にあつたのである。

回族が海南島に何のようにして漂着したのかは2説がある。1つは宋、元代に今のベトナムから逃げて来たという説、もう1つは中国との貿易を求めた古代ペルシア人の一部が、三亜地区に住み着いたという説である。

男は漁業、女は農業に従事する回族も例外ではなく、満足な教育は受けておらない。



彼等の生活こそ小さな水溜りいる魚のように、生命の危険が目前に迫っている感じさえしていた。ビルマやタイの少数民族を想起しながら、援助してやりたい気持はあるものの、赤子を裸にしたような我々の無力では頼りにならない。

街道の右手に3400mの空港予定地をブルが整地している。それだけ省政府は三亜の観光に力を注いでいたが、これも日本の資金援助を期待しているらしく、熊谷組の看板が一際目立って立っていた。

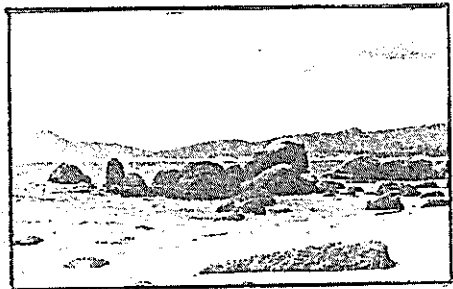
吹き寄せる潮風を受ける高台に昨年のアジア大会を記念した聖火台が聳え、殺風景な砂漠の海浜には不似合いな、白亜の鉄筋コンクリートの建物であった。中国最南端からも聖火を運んだことを子孫に遺す為であろう。

天涯海角の白砂青松の海岸が強烈に視神経を刺激してきた。青い海と空、輝く太陽、乾いた砂が水を吸収するように、我々は砂浜に引きずられて歩き出した。

三亜第1の名勝地の天涯海角、見知らぬものを見ることは最大の慰めであり楽しみである。

「老いて益々壮なるべし」と驚馬に鞭打ち、放心状態になって白砂をサクサクと足を運んだ。

前方の砂浜には大小の岩石が海中にまで突出し、鶏群の一鶴のような大石に「天涯」「海闊天空」「海角」「南方一柱」などの石刻が彫まれていた。(右は天涯海角の一部)



「天涯」とは天の果て、即ち極遠の地である。「海角」とは土地が狭くて細長く海の中に突き出た所で、海の果てを意味している。

昔日の唐、宋時代に都から流されてきた役人たちは、流刑地の此処から無限に広がるエメラルドの海を眺め、いかに漂情と思つたことだろうか。彼等はこの海岸を「天と海の境」と呼んだのである。

中国の最南端、これから先は海の涯^{ハテ}である天涯、限りない大空、涯しない大洋、大小の岩石、いくら眺めていても飽きることはなく大きさが解ってくる。

水平線の彼方から順風が心地よく吹き寄せ、海浜の石に砕けた波が引いていた。その光景につられて先へ先へと歩いたが、涯^{ハテ}しく真砂は続いていた。

砂の上に坐って休憩した。冥想するようにして潮騒を聴いていると、精妙な震動を感じるような気がする。自然に親しんで暮らしていた古代人たちは、何時もこのような震動にひたっていたのであろう。平安無事を誘う震動に超自然を感じるのであった。

大海原の彼方、宇宙原の彼方を見詰めると、麻の如く乱れた中東戦争の悲惨な状景が臉に浮かび出され、魚の木に登るような人間の愚が良く判ってきた。

再び石に腰をおろして海水を凝視していた。生命の水は太陽の放射熱で蒸発して水蒸気になり、雲となり雨となって地球に帰ってくる。太古からおそらく未来永劫まで、水はこの循環を繰り返すだろう。

遡ると30数億年前に生物の祖先は海に生まれ、気が遠くなるほど進化の時間を海で過ごし、4億年ほど前に陸にあがった。海こそ我々生物の故郷であり、水なしでは生物の誕生も生命もあり得ないと、新ためて水の神秘



性に思いを巡らしていた。

蜿蜒と続いた砂浜から戻って駐車場に帰り着いた。其処の両側に土産品店を開いた回族は、白珊瑚や貝細工、椰子の実、椰子の葉で作った笠などを売っていた。主として中国人相手の商売であろう。我々は出発時間が切迫し一瞥して乗車した。

(前頁の下の写真は回族の土産品店)

鹿回頭公園 (90頁地図参照)

長い海岸道路の市街を通過してホテルに帰り、休憩して再びバスに乗車し鹿回頭公園に向かった。鹿回頭という地名には次ぎのような伝説がある。

凡そ300年ほど前、五指山に住む1人の若い黎族の獵師が、鹿を追ってこの海辺までやってきた。渚に追い詰められた鹿は踵を巡らせて、再び山の方へ逃げようとした。

青年獵師がさらに追いかけようとする、彼方の畑を耕していた1人の黎族の娘が鹿を遮り、獵師は鹿を捕らえることができた。後に獵師と娘は夫婦になって此の地に住み、荒れ地を切り開いたと。

これに因んで鹿と娘の石像が立っていた。(上の写真)毛沢東夫人の江青も訪れたこの公園は、ハイビスカスや黄色い卵花の真っ盛りで、大東湾の漁港にはジャクが海面を埋め尽くし、三亜が漁港として栄えているのがよく判る。

鹿回頭半島の東に広がる大東海は日本軍の上陸した地点で、現在は中国海軍の基地となっている。

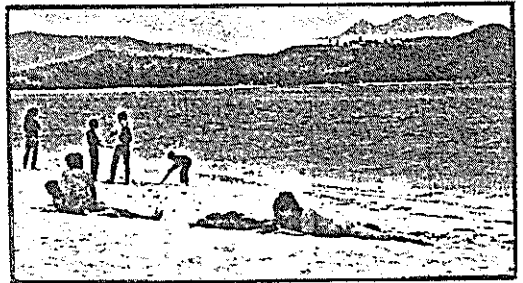
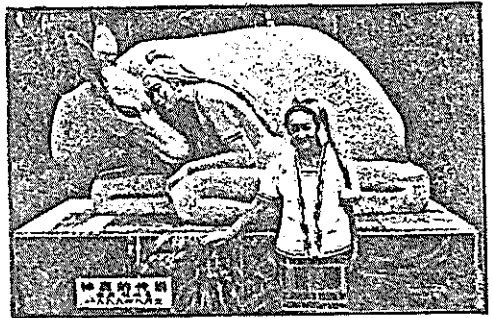
一方、大東海は海南省が宣伝に努めている海水浴場で、さらりとした白砂、遠浅の海はライトブルー、椰子の林が木陰を作っていた。(右は海水浴場)

通訳は附近の土地を指差して数多くの建設計画を述べていた。資金のメドがあるのだろうか。口先だけでは大阪の城でも建つが、投資を渴望する海南島の資本なき資本主義的傾向は、一体どうなるのか。

続いて公園の奥にある真珠の養殖場に案内した。日本の発達した真珠養殖のことを全く知らない通訳は、管を以て天を窺うように得意になつて滔々と説明している。本当に片腹痛しの笑止の至りであった。

今まで晴れ上がっていた空の一角に雨雲が湧き立ち、やがて墨を流したように一面に拡がって、鉛色の雲が海に重く垂れこめてきた。

標高275mの鹿回頭は雲に覆われて山頂の観光は中止となり、あり余る時間を虚しく思いながらホテルに帰館した。ここ数ヶ月間降雨のなかつた三亜地方にとっては千天の慈雨、我々日本人一行が雨を持つてきたようで、荒涼として乾き切つた砂地を湿らしたのである。



3月17日

(日) 雨・曇

三亜～興隆～海口 (78頁地図参照)

天涯の白砂を踏み椰子の蔭にやどった三亜も、浅からぬ因縁があったからこそだが、一場の春夢のように過ぎ去った。15日間の旅で初めて小雨の朝を迎え、8時に三亜を離れて330kmの東海岸を踏破することになる。

この地方の人達にとっては恵みの雨、生き返ったような椰子の街道を無人の境を行くように蒸地に走った。ほどなく東方20km地点の牙龍湾に立ち寄る。

7kmも延びる海浜に進むと、白くサラサラとした砂浜の遠浅に、波は倦むこともなく打ち寄せていた。遠くの地曳網を曳く光景もまた懐かしい。対岸には数個の島影が微かに浮かび、サボテンの花の鮮やかな黄色など、この素朴な浜には時間だけがあるような気がする。



近い将来この美しい牙龍湾をリゾート化して、世界に誇る海水浴場にする計画だと通訳は説明した。確かに真青な海、真白い砂浜、風に揺れる椰子など、今に観光地として熱い視線を浴びるだろう。

(上の写真は牙龍湾の光景)

しかし問題は資金だ。恐らく日本企業の進出を鶴首しているのに違いない。そこで中国に親しみを覚える私にも言いたいことがある。中国首脳の唱える中日友好とは、日本側の譲歩を意味するのが常であり、その中華思想が一人の田舎通訳まで浸透していることだ。

戦時中に甚大な損害を与えたことは遺憾である。だからこそ国交回復以来から今日まで、横紙破りのような言動にも日本政府は臥薪嘗胆を続け、素直に莫大な借款に応じた。しかし戦後50年を経過した今、真実と相違するするような南京虐殺30万人記念碑や、各地に日本軍を暴いた記念館を建てている。「怨みに報いるに徳を以てす」と言った蒋介石を見習って欲しい。(老子第63章の言葉)

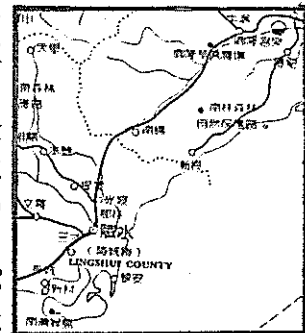
雨と風によって自然の奏でる現象は、真似のできない演出だと感じながら、バスは北進してジャンクの群がる新村に立ち寄った。(右の地図参照)

商魂逞しい回族の女性は雨の中で店を開いて我々を待ち受けていた。新村の対岸に見える猿島には約1000匹の野生猿が棲息すると言われ、遠望しながら北上すると直ぐ陵水の街であった。(右の地図参照)

相も変わらず通訳は、陵水地方は西瓜、胡椒、コーヒ、パイン、椰子の産地だと紹介したが、大海を知らない彼の話は聞き飽いてしまった。山積みされた小さい西瓜は商品価値はなく、日本では豚の餌であろう。中国の農業は全く改良されていない状態だ。

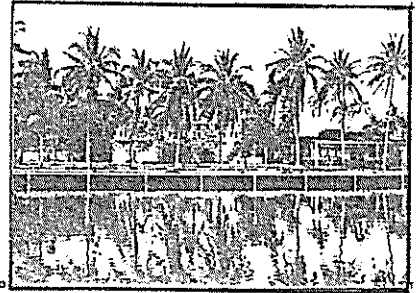
薄暗い天空に霏々として雲が覆い、県境を走る五指山系の九十九折りの坂を、バスは喘ぎながら登った。熱帯と亜熱帯の境をなす山を越すと不思議なことに雨はあがり、水牛の田を耕す光景や田植えの姿も見えていた。

南の地の涯でも恰も天上の神に祈りを捧げるように、テレビアンテナが黙って立っ



ているのが眼に付いていた。矢張り平野の経済の方が裕福なのであろう。漸く東海岸道路の最高の観光地「興隆温泉」が椰子の樹間から見えてきた。(78、93頁地図参照)

最近脚光を浴びてきた温泉地の中央に構えた、興隆温泉賓館が昼食の場所となった。興隆華橋農場が経営するこのホテルは白亜の洒落た建物で、椰子を始め南国の花樹が木陰を作る公園の中に建っていた。



温泉プール、水上レストラン、ショッピングセンターなどが周囲を取り巻き、劉少奇、周恩来、朱徳などの中国要人も泊まった興隆温泉は、ここ数年来、日本や欧州の観光客が増加したという。(上の写真は興隆温泉中央の湖水)

南国の満天の星空でのプールを想像すると、さぞかし余所では味わえない魅力だろうと考えながら散策した。公園中央に立った大碑石に興隆温泉と彫んだ金文字が燦然と光り、その傍らがショッピングセンターとなっている。特産のコーヒの売れ行きは羽が生えたように上々であった。

この温泉の温度は65度、関節炎、脊髄炎、皮膚病、神経衰弱等に効能があると言われる。しかし時間もなく、温泉好きな日本人として入浴できなかつたことは残念だ。読んで字の如く興隆を祈って温泉地を離れた。

午後は興隆温泉から海口までの220kmを轟進することになる。ゴム林や椰子の繁る中に茶畑があり、変幻万化する街道を凝視しながら走行した。珍しく野外でビリヤードに耽っている光景が眼に留まり、農村の懐具合は本土よりも上だろうか。

途中、五指山に水源をもつ海南島第3の大河、万泉河が流れる瓊海の万泉河遊楽園に立ち寄った。広い川幅に堰堤が水を堰止めて眺めは絶景である。



(右は万泉河遊楽縁の亭と流れ)

万泉河酒店で小休止の後、瓊海市街の自由市場を一巡し、バスはエンジンを全開して海口へと疾走を続けた。

水のように動き続け、川のように流れて留まることもなく変化する景観は、命の洗濯をしている感じを受ける。これを「命長ければ蓬萊を見る」と言うのであろうか。長生きすればそれだけ良いことに巡り合える実感を味わっていた。

北進するにつれて稲作地帯に変化し、眩しかった陽は樹々の枝葉に遮られ、次第に傾いて漆黒の闇に移ろうとしていた。海口の南の街・瓊山の鉄橋を渡ると、この橋は日本軍が架設したものを掛け替えたものだと言明された。海南島の涯まで足を運んで日本軍と聞くと、冷水を浴びせられたような胸の痛みを覚えるのであった。

瓊山から海口に通じる道路は数本に分かれ、煌々と照らされた街道一帯は台湾人が土地を買収し、現在は製靴などの軽工業を営んでいるようである。台湾同胞の進出は目覚ましく時代は移り変わっていた。

長距離の車の旅は漸く終わりを告げたものの、年には勝てず疲労困憊の極に達していた。19時からタイの華僑の経営する泰華酒店で夕食を摂り、21時に海口国際金融大廈に落ち着き、海南島最後の夜を枕を高くして眠りに就いた。

3月18日 (月) 晴

海口～上海

瓊台書院跡 (瓊台師範大学校) (79頁地図参照)

海口空港発21・10まで海口市街の見学となる。早朝でも寒暖計は25度を示し、純白の太陽は鮮やかに映えて南国の情緒が溢れていた。

8:30にホテルを出て郊外行バスターミナルからメンストリートに入った。台湾人経営の遊技場や映画館、商店街、ホテル街が櫛の歯を挽くように続き、緑の椰子やソテツ並木は陽陰を作っていた。

バスは瓊台書院の扁額を掲げた絢爛豪華な朱塗りの門の前で停車した。門柱には海南瓊台師範大学校の金看板も見えていた。

瓊台書院は瓊山出身で明代の学者で政治家であった「邱瓊台」の名前をとって、清代に創立された海南島の最高学府。邱は唐の張九齡や宋の余靖、崔如などと共に、「嶺南(広東の意)の四傑」と云われている人物である。いま書院は緑の瓦、朱塗りの外装をした建物として樹木に囲まれ、静かな環境に保存されている。

清の康熙44年(1705)の創建で1902年に瓊山府中学校となり、幾多の変遷を経て革命後の1951年、瓊台師範大学校と改名され、多くの人材を育成している。(上の写真は正面玄関の扁額)

院内の1階は陳列館で莫大な書籍が陳列されている。2階には昔の校長が使った机が据えられ、その上に赤幕に金色で「進士」と書いた額が飾られていた。瓊台氏の科挙の試験に合格した記念のものだろうか、古色蒼然とした額であった。

海南島は本土に比較すると教育の後進地、だから地域格差を解消するために教育に重点を置いている。現在の学生数は1500人で校舎は書院の裏側に建っていた。

書院を去るに当って「知識は力なり」と言う辞が浮かんできた。知恵のある者は強い人より強く、知識のある者は力のある人より強いのである。

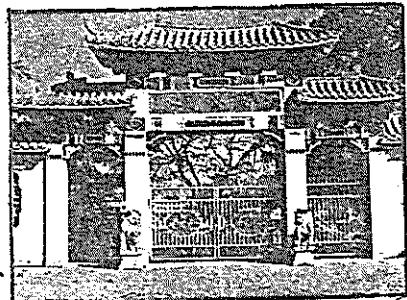
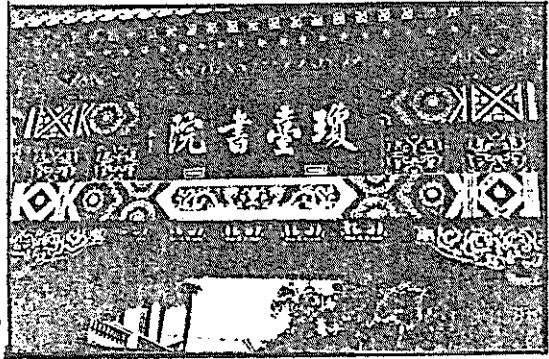
五公祠 (79頁地図参照)

海南島の史跡は海口附近に多く、五公祠は市街の東南5kmの地点にあり、瓊台書院の北側であった。

海南島は昔「さいはての島」「毒ガスの島」などと言われ、罪人などが流された島であった。

唐代から宋代にかけて忠誠を完うした為に罪に落とされ、海南島に追い遣られた5人の政治家を祀ったのが五公祠である。

5人の歴史的人物とは李徳裕、李綱、趙鼎、李光、胡金全である。彼等を記念する学圃堂や五公精舎は



清の光緒15年(1889)に建てられた。(前頁下の写真は五公祠正門)

「瓊台勝境」「海南第一樓」の扁額のある黄色い瓦をのせた、2層の門を潜って庭内を進むと、青々とした樹林に覆われた中に五公祠が見えていた。

祠の建物の中に青みがかった5人の石像が、静かな雰囲気にもまれて毅然として立っていた。本当に霊を宿した生命となっているようで、「芳を後世に流す」というか、彼等の業績を後世まで知らせていた。

五公祠の隣に建った「蘇公祠」には、蘇軾、蘇過、姜唐佐の墓が祀られていた。この3人は宋代の節義に富んだ才気横溢な文人で、詩人として有名である。特に蘇軾は61歳で海南島に流されている。

蘇公祠の次ぎの建物には、黄帝、禹帝に始まる歴代皇帝の像が、華麗豪華な衣装を纏って立っていた。特に際立って眼に付いたのは唐の則天武後の像だ。彼女は立てば芍薬、坐れば牡丹のような顔立ちで、

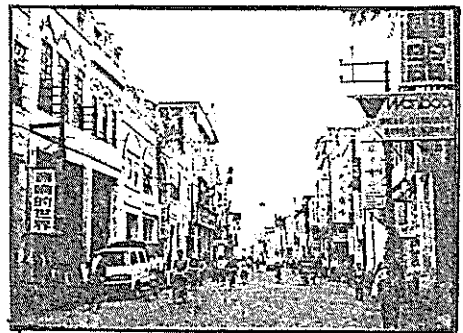
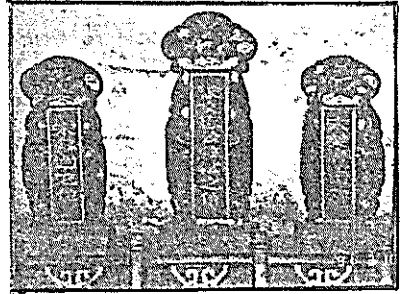
哀れな姿は清朝最後の皇帝・宣統帝(満州皇帝)の3歳の像であった。(上は蘇公祠)

続く殿宇には「兩伏波洞」の扁額があり、漢時代のものから宋、元、明、清までの、数百点に及ぶ古陶器が展示されている。又、明・清海南名人資料室には数多くの書が飾られていた。

五公祠の中庭に「浮粟泉」と命名した池がある。これは蘇軾(蘇東坡)が地面を指差したところ、水が湧き出た池だと言われており、雨が降っても水嵩が増えないのも不思議だと伝えられている。

1966年から中国全土に吹き荒れた文化大革命の折、ここも例外でなく多くの文物が破壊され、書籍類は悉く焼き払われてしまった。近年ようやく修復されたのが今、見学したものであった。

五公祠の拝観が終わると通訳は古い海口の商店街を案内し、乞食に執拗にせがまれる路上をだらだらと歩かされた。何の目的もなく漫歩するのは骨身にこたえ、全く骨折り損の草臥儲けで、悪い印象を残すだけであった。漸く海岸の埋め立て地に面した富都大酒店に辿り着き、体を癒しながら昼食となる。(上の写真は海口の古い商店街)



海口公園

午後は先ず海口のジャンクの浮かぶ海岸通りを歩いた。何気なく呆然と眺めていると、芥捨場で食物を漁っている乞食の姿が眼に留り、国の恥部を暴露していた。(右はジャンクの群)

不快な思いでバスに乗車し、椰子の木に囲まれた海口公園の湖畔で停車した。東湖、西湖は満々



闇黒の空を翔ぶ機上は物思いに耽る絶好の時であった。然し乍ら湾岸戦争の経過、日本及び中国の国内情勢から隔離されて全く不明だ。情報化社会に生きる者にとって、棧敷に置かれるほど辛いものはない。

思い出されるのは「治人有れども治なし」の辞であった。国を治める人はあっても、民を治める方法を知らない。旅を続けて眼に見るもの耳に聞くものから教えられた尊厳の教訓である。一衣帯水とか言って友好親善を唱える中国指導者には、傷口に塩を塗るような不和の基となる言動だけは謹んで欲しい。

妄想に耽っていると時の過ぎるのは速く22時に上海空港に着陸、約3時間の空路の旅は終わりを告げた。海南島とは格段の差である気温9度の寒さは身に凍みた。

今夜の宿泊は南京西路に新築された45階建ての「波特曼酒店」(ホテル・ポートマン)に決まり、23時にホテルに入って頓死したように眠りに就いた。

3月19日 (火) 晴

上海～帰国

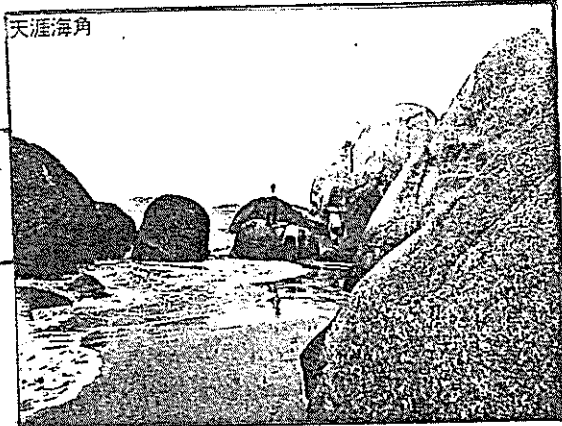
長途の旅の疲労が一挙に吹き出して目覚めは遅く、足もとの砂が崩れるような感じがしていた。将に見掛けばかりの空大名である。

9時に波特曼酒店を発ち、バスは上海のメンストリート南京路の大混雑の中を進行した。友誼商店は改築のため南京西路の百貨店に案内され、一行の人たちは最後の買い物を楽しんでいた。

旅馴れしたツアーの人達は何回か上海を訪れた経験があり、見るべき処もなく直ぐ空港近くのレストランに引返した。昼食を摂って空港ターミナルに入り、14:00発MU-913便に搭乗、1時間半後の16:30(時差1時間)、福岡空港に無事到着する。

15日間の長旅は恙無く終止符をうった。「終わりよければ凡てよし」としなければならず、概ね満足のいく旅であった。しかし喜びや楽しみが終わると、何となく寂しい感じもしてくる。

本夜は博多に一泊し、翌20日午後、我が家に帰宅。年寄りには二度目の子供だと、旅の楽しみを嘔み締めていた。



右の写真は海南島・三亚

「天涯海角」の景観

と水をたたえて周りの景観を写し、反対側の高台は人民公園になっている。(右は海口公園の東湖)

人民公園に入った正面に朱徳の書いた「革命烈士永靈不朽之碑」が見上げるように立っていた。碑の後方の軍人の像には「馮白駒將軍」と記されている。

この將軍は1903年6月7日生れの瓊山県出身で、学生時代から革命運動に参加し、上海七厦大学に学んで中国共産党に入党、抗日戦線に参加して蒋介石の国民党に反旗を翻す。その後、海南島の開放運動に参加した人物だと記録されていた。



中国各地を訪ねると革命、開放の文字が氾濫している。「開放」とは革命を行った当事者の言葉で、自由な体制を信じない人の言葉だと言ってよいだろう。この言葉遊びを一般の中国人は如何に理解しているのであろうか。

広大な閑散とした公園の一隅で、ゲートボールを楽しむ老人たちの姿は何処の国も同じだ。静かな園内の一部を散策しながら門を出て、東湖の湖畔に佇んで休憩した。

湖の淵に咲いた小さな花は手招きしているようでもあり、又、時を忘れて人生を送れる人は、贅沢な幸せだと訴えているようでもあった。

観るところの少ない海口の観光も千秋楽となった。未だ陽の高い5時から南天大酒店で夕食となったものの、食事ばかりが続いて腹は空かず、無理矢理の食事攻めには閉口させられる。

数々の想い出を残した海南島とも永遠に別れなければならない。千里に亘って同じ風が吹かないのは理の当然だが、星を摩すように天の時、地の利によつて、早く本土並みの力を着けて欲しいものである。

一斑を見て全豹を論じることにはできないが、海南島は未だ観光開発は遅れている。空樽の音は高いように、名声の高いわりに内容は空虚であった。日本人の温泉好きに着目して、興隆温泉などに全力を注ぐことも一策だと提言しておきたい。

上海へ

「東洋のハワイ」だと宣伝に努める海南島、新奇独特な風俗の海南島ともお別れだ。19；20、海口空港を離陸した搭乗機は真っ黒い宇宙空間を飛翔した。15日間の長期の旅も竜頭蛇尾とならず、終わってみると命に過ぎた宝なしだと痛感する。

「月夜も15日、闇夜も15日」、世の中は良い時もあれば悪い時もある。好天に恵まれ友人に恵まれた今次の旅は、私にとっては月夜の感じで良いガス抜きの旅であった。

何時までも鮮やかに心に思い浮ぶ旅先の光景、各地に遺る師表とすべき人物の感化、苛酷な戦争の一齣に胸が引き裂かれる思いなど、よい機会を捕らえた旅であった。これを「過ぎ去った水では水車は回らない」と言うのであろうか。

あとがき

「名鏡は形を照らす所以、古事は今を知る所以」、くもりのない鏡は形を写し出し、歴史上のことがらは現在を理解するために参考になるものだ。

今次旅行は鑑真和上の「揚州」、過去の戦争の殻から脱皮しない「南京」、雄大・廣大・大自然の「武夷山」に祀られた朱子、「福州」の社稷の臣・林則徐、外来文化の影響を受けた「泉州」、匪躬の節をつくした鄭成功の「厦門」、檳榔樹下に棲む黎族・苗族・回族の「海南島」など、各地で学んだ古事は金銀に勝ものであった。各地の仏閣もまた、宗教は道徳を前提とすると啓蒙していた。

滔々と獅子吼して我々の舌を巻かせた「広州」の通訳、社会主義には無関心だという広州人の声は、中国全人民の真実な胸中を代弁している。生活を豊かにすることのみを念願とする広州人、ソ連の社会主義の崩壊から学んだ資本主義経済を謳歌する姿は、新発見と言わなければならない。

生命のあるところには希望があり、人生の最後に咲いた花こそ誠の花である。使いみちのない「坊主に簪」のような私にとって、如何に生きるべきかを会得し、花を咲かせるのは旅しかない。

経験は馬鹿をも賢くする。学問のない経験は、経験のない学問に優ると言われるように、非才な私にとっては旅は誠に良き経験である。

水戸黄門の主題歌「人生に涙あり」は、私の大好きな歌詞で旅心を誘ってくる。「人生楽ありゃ苦もあるを、涙のあとには虹も出る。歩いて行くんだ真っ直に、自己の道を踏みしめて。人生勇気が必要だ、くじけりゃ誰かが先に行く。後から来たのに追い越され、泣くのが嫌ならさあ歩け。」、これは老いた者の青春維持の健康法であると言えらるだろう。

「読むことは豊かな人を作り、会話は即妙な人を作り、書くことは正確な人を作る」と謂れている。眼で見ただけでは眼から入って耳に抜け、何の知識にもならない。人間の記憶は不確実で、いざ書こうとすると曖昧模糊として思うように書けない。しかし、人は書くことによつて知識が確実になり、今回も読みにくい「偲屈聲牙」な文章を綴ることにした。

運命は天にあり、人間は其の人らしく暮らせばよい。私は今まで幾度も死んでいた。これからは何度も生きてやる気構えだ。「年問わんより世を問へ」の言葉の通り私がどのように生きたか、旅名人を目指して知識を広めて行きたい。

この紀行文のワープロを叩いていた4月17日、ゴルビが来日した。ソ連は帝政時代から最近まで続いた領土拡張のツケが回つて来たのである。北方領土は如何に進展するか、憤懣やるかたない思いで見守っていた。

平成 3 年 4 月